

仙台市文化財調査報告書第151集

山 口 遺 跡

第9次・10次発掘調査報告書

1991年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

山 口 遺 跡

第9次・10次発掘調査報告書

1991年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

日頃より仙台市の文化財保護行政に多大のご協力を賜り、誠に感謝にたえません。

現在、仙台市内には約700箇所の遺跡が知られており、太白区に所在する山口遺跡もその一つです。この遺跡は富沢遺跡の南側に隣接するもので、一体として捉える必要がある遺跡と認識しております。また下ノ内浦遺跡、泉崎浦遺跡も同様と考えられます。これらは、いずれも郡山低地と称されるなかにあり、自然堤防と後背湿地上に住居跡や水田跡などを残す遺跡です。

今回この遺跡で店舗と共同住宅を建設することになり発掘調査を実施しましたが、中世・古代の住居跡、弥生時代の水田跡などが発見され、当書で詳しく報告いたしております。

このような発掘調査によって得られた多くの成果は、地域の歴史を知るうえで貴重な資料ですので、今後の仙台市における街づくりや学校教育などの中に、充分に活かしていきたいと考えております。

この報告書が広く皆様にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にご指導、ご協力くださいました皆様に対し、心より感謝申し上げます。

平成3年3月31日

仙台市教育委員会

教育長 東 海 林 恒 英

例　　言

- 1 本書は民間の受託事業に係わる山口遺跡第9・10次発掘調査報告書で、すでに公表された広報紙等に優先するものである。
- 2 報告書刊行のための遺物整理は文化財調査係佐藤甲二・中富洋が担当し、陶器・磁器の鑑定は佐藤洋が行った。
- 3 本書の編集は中富洋が担当した。
- 4 分析、同定については灰像分析を松谷暁子氏(東京大学総合研究資料館)、種子同定を星川清親氏・庄司駒男氏(東北大学農学部)、住居跡出土骨同定を富岡直人氏(東北大学文学部大学院)、プラント・オパール分析を古環境研究所に依頼した。
- 5 本文の執筆分担は下記のとおりである。

星川清親・庄司駒男：第3章第4節

松谷暁子：第3章第2節

富岡直人：第3章第3節

古環境研究所：第3章第1節

佐藤甲二：第2章第1節

中富　洋：第1章、第2章第2節

- 6 本書の作成にあたり下記の方々から適切な助言、指導をいただいた。

井上喜久男・庄司駒男・富岡直人・榎崎彰一・星川清親・松谷暁子

(50音順 敬称略)

- 7 本発掘調査に係わる出土資料は、仙台市教育委員会が一括して保管している。

凡　　例

- 1 本報告書の土色については『新版標準土色帳』(小山・竹原:1973)を使用した。
- 2 第4図に使用した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1「仙台市西南部」、「仙台市南東部」を合成したものである。
- 3 本書中で使用した方位の北は、すべて真北(GN)に統一している。
- 4 本書中の座標値は、平面直角座標系Xによっている。
- 5 図中の標高は海拔高を示している。
- 6 検出遺構には次の略号を使用した。

S B : 掘立柱建物跡 S D : 溝跡 S E : 井戸跡 S I : 壁穴住居跡、壁穴遺構
S K : 土坑 S R : 河川跡 P : ピット

- 7 出土遺物の登録は以下の分類によった。

A : 繩文土器	B : 弥生土器	C : 非ロクロ成形の土師器
D : ロクロ成形の土師器	E : 須恵器	F : 赤焼土器
G : 土師質土器	H : 陶器	I : 磁器
J : 判別できない酸化焰焼成の土器		K : 刻片石器
L : 砕石器	M : 石製品	N : 木製品
O : 金属製品	P a : 植物遺存体	P b : 動物遺存体
- 8 土師器実測図内面のスクリーントーンは、炭素吸着によると考えられる黒色処理を示す。
- 9 遺物の法量のうち () は図上復元値である。

調査要項

調査名 (1) 仙台市山口遺跡第9次調査

(2) 仙台市山口遺跡第10次調査

所在地 第9次：仙台市太白区富沢一丁目8
第10次：仙台市太白区富沢一丁目8-5

開発者 仙台市農業協同組合
組合長理事 佐藤 守

調査原因 第9次：店舗建設
第10次：共同住宅建設

調査期間 第9次：昭和63年9月13日～同10月1日
第10次：昭和63年10月24日～同12月21日、平成元年4月13日～同6月2日

調査主体 仙台市教育委員会
教育長 東海林慎英

調査担当 仙台市教育委員会文化財課
課長 早坂春一 調査係長 佐藤 隆 管理係長 鶴田義幸

担当職員 第9次：佐藤甲二
第10次：中富 洋

調査協力 仙台市農業協同組合・小池善七・株式会社大木建設仙台支店

調査参加者 相澤 史子 青山 諒子 浅見 禮子 板橋スエノ 伊藤 貞子
大友 節子 大友 義信 小沼ちえ子 菊地つね子 小池 房子

斎藤とき子 庄子 信哉 須賀 栄子 菅井 君子 菅井美枝子

菅谷 裕子 鈴木 正道 鈴木よしき 高橋ヨシ子 千田あや子

千田タイ子 永野 泰治 早川 裕子 原田由美子 針生 昭三

牧 かね子 三浦イチ子 三浦 芳子 村上 篤 森 剛男

山田 太 山田やす子

整理参加者 相澤 史子 白井美津子 大森 緑 小沼ちえ子 小野寺圭穂
西條 裕子 佐藤とき子 菅井 君子 菅谷 裕子 鈴木 幸子

鈴木よしき 高橋 健寿 原田由美子 村上 篤 森 剛男

米倉 節子

目 次

序 文

例 言

凡 例

調査要項

第1章 山口遺跡のあらまし	1
第2章 調査結果	7
第1節 山口遺跡第9次調査	7
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. まとめ	
第2節 山口遺跡第10次調査	12
1. 調査方法と経過 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. まとめ 5. 要旨	
第3章 分析・同定	83
第1節 プラント・オパール分析	83
仙台市山口遺跡（第9、10次調査）におけるプラント・オパール分析	
第2節 灰像分析	89
仙台市山口遺跡第10次調査出土試料の灰像について	89
第3節 出土骨同定	96
仙台市山口遺跡第10次調査S I 2堅穴住居跡カマド出土骨片について	96
第4節 種子同定	98
写真図版	103

第1章 山口遺跡のあらまし

山口遺跡は宮城県仙台市太白区富沢および泉崎に所在する。この付近は仙台市域の南東部に位置し、JR仙台駅から南西に約5kmの地点にある。遺跡は1976年、周辺一帯の区画整理事業に伴う水路工事の際に発見され、仙台市文化財登録番号C-233として登録、記載された。総面積は約25haで、1978年の第1次調査以来8次にわたる発掘調査が実施されている。



第1図 山口遺跡位置図

仙台地域周辺の地形は大きく山地・丘陵・台地および低地に三分され（地質調査所：1986）、これらの間を名取川・広瀬川・七北田川などが南東流して仙台湾に注いでいる。山口遺跡はこれら主要河川の下流域に形成された宮城野海岸平野の中の、名取川と広瀬川にはさまれた郡山低地（経済企画庁：1976）に立地しているが、丘陵や台地に近接した位置にある。本遺跡の南側には名取川水系荒川が東流している。この両岸には自然堤防と考えられる微高地の形成がみとめられ第9・10次両調査地点はこの北岸微高地のほぼ端部に位置しているものと推定される。なお、この両調査地点と第10次調査区に隣接する第2次調査区および遺跡東端部の第3次調査区以北では砂質シルト・シルト等の堆積がみられなくなり、後背湿地への移行が推測される。すなわち山口遺跡内の旧微地形を概観すると遺跡範囲の南部が自然堤防上にあり、北半部は隣接する富沢遺跡へ連続する後背湿地と捉えることができよう。

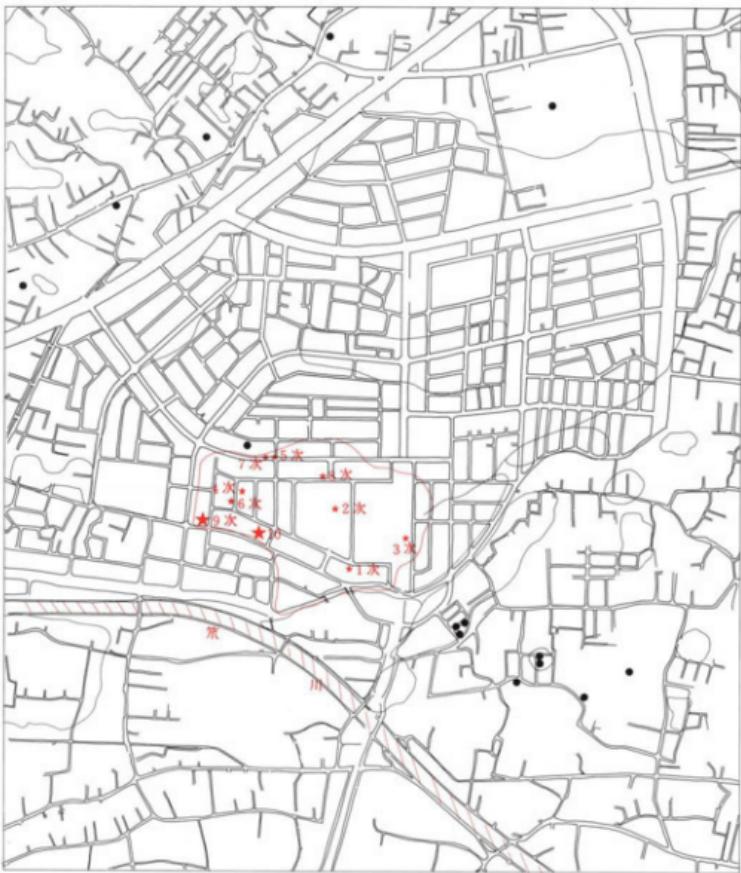
前述したように山口遺跡では現在までに8地点で発掘調査が行なわれている。その成果をご



第2図 山口遺跡周辺の微地形

く大まかに整理すると、自然堤防に立地すると考えられる1・2・3次調査区では縄文時代から中世にかけての集落関連遺構および弥生時代・平安時代の水田跡が確認されている。これに対して後背湿地部とみられる4～8次調査区での検出遺構は古墳時代から近世にかけての水田跡に限定され、土地利用の明瞭な差異がうかがわれる。なおこれらのうち最大規模に行なわれた調査は1981～82年の第2次調査であるが(調査面積9200m²)、仙台市内の沖積面遺跡で初の縄文時代早期の遺物(貝殻条痕土器、縄文条痕土器)の出土があった他、やはり市内で初めて水田跡(平安時代)が検出されるなどの成果がみられた。また今回第2次調査区と隣接する第10次調査区で山口遺跡では初めて弥生時代(後期)の水田跡が確認されたが、この付近に弥生時代の水田跡が存在する可能性は、すでにこの2次調査の際に予測されていた(田中:1984)。

山口遺跡北側の後背湿地部(一部泉崎微高地を含む)には総面積82haにおよぶ富沢遺跡が隣接している。この遺跡は近現代から弥生時代までの水田遺構が累重することで知られていたが、1988年第30次調査区において後期旧石器時代の埋没林・焚火痕跡や石器等が出土し、この部分の恒久的な遺構保存措置が講じられている。この富沢遺跡をはじめとして山口遺跡一帯は遺跡の密集地域で、とりわけ荒川が形成した自然堤防と考えられる微高地上には当山口遺跡を西端として下ノ内遺跡・下ノ内浦遺跡・六反田遺跡・元袋II・III遺跡等の遺跡群が連続しており、



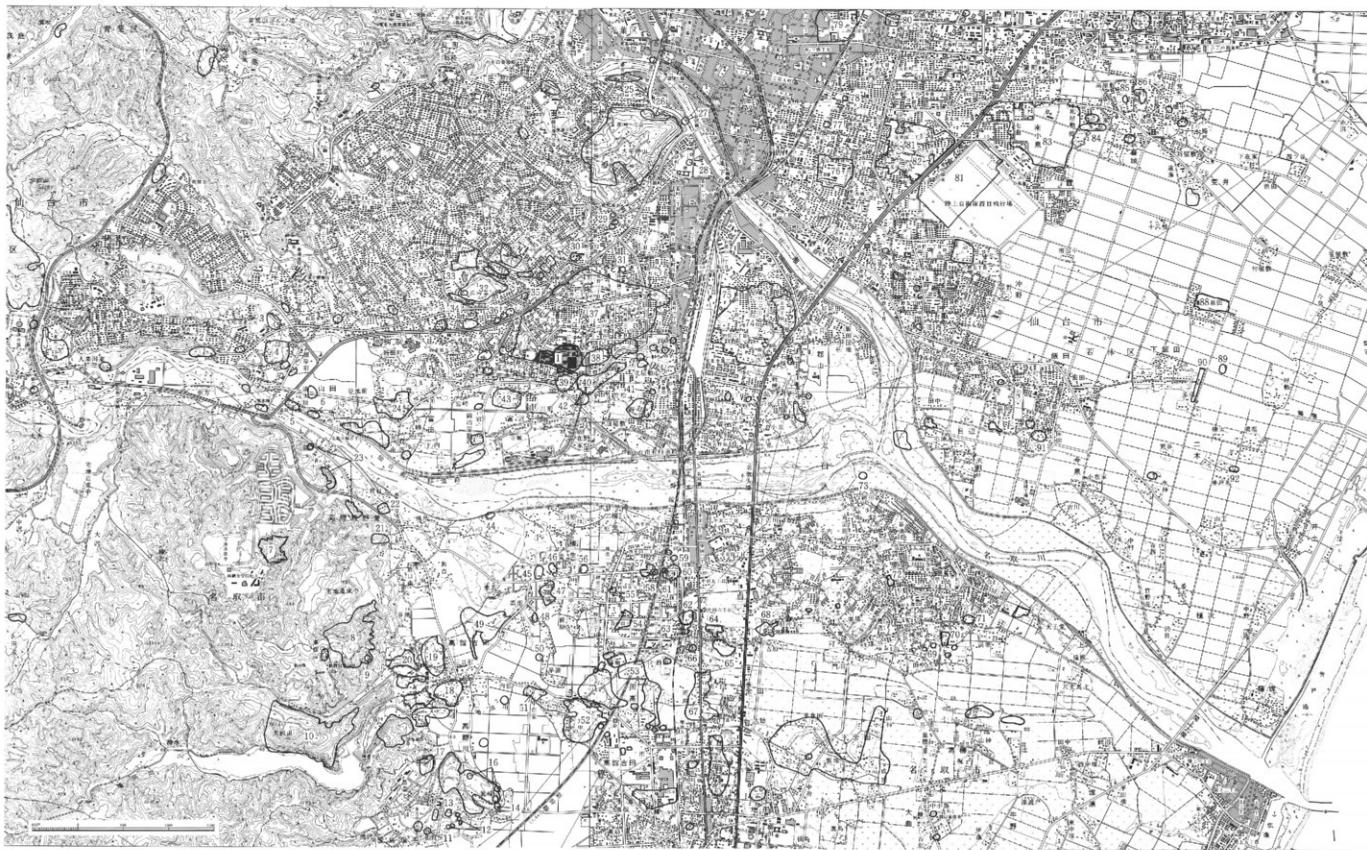
第3図 山口遺跡周辺図

主として繩文時代から平安時代にかけての集落関連遺構が検出されている。

なお山口遺跡周辺の歴史的背景および地形・地質に関しては富沢遺跡第15次調査報告書(斎野・豊島:1987)・同第24次調査報告書(工藤・豊島:1988)・同第30次調査報告書(太田:1991)・山口遺跡第2次調査報告書(田中:1984)に詳しい記載があるので参照されたい。

No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代		
1	山口遺跡	集落	自然地帯	縄文・後J・古墳・奈良・平安・中世	47	圓束遺跡	台地	自然地帯	古墳・奈良・平安		
2	羽黒舍遺跡	包谷	地段	丘	縄文・古墳・奈良・平安	48	生出遺跡	台地	自然地帯	奈良・平安	
3	北前湯跡	包谷	地段	丘	旧石器・縄文・古墳・平安	49	南御遺跡	台地	自然地帯	奈良・古墳・平安	
4	山田上ノ合造跡	包谷	地段	丘	石器・縄文・平安・近世	50	北宮神社跡	台地	自然地帯	奈良・平安	
5	山田南西遺跡	包谷	地	自然地帯	縄文・平安	51	東内離遺跡	台地	自然地帯	古墳・奈良・平安	
6	船足前跡	包谷	地	自然地帯	縄文・弥生・奈良・平安	52	田萬遺跡	台地	自然地帯	古墳・古墳・奈良・平安	
7	船野家大殿跡	城	丘	陵	中世	53	清水遺跡	台地	自然地帯	奈良・古墳・奈良・中世	
8	高麗城跡	城	丘	陵	中世	54	更通遺跡	台地	自然地帯	古墳	
9	高麗山古墳	塚	丘	陵	古墳(中期)	55	鬼塚遺跡	包谷	地	自然地帯	古墳・奈良・平安
10	高麗山跡城	跡	丘	陵	中世	56	靈東遺跡	包谷	地	自然地帯	平安
11	北野橋穴跡	橋	六段	丘	平安	57	里久漢跡	堆	落	自然地帯	弥生・平安・中世
12	箕輪B地区遺跡	円	段	丘	古墳	58	安久漢跡	古墳	円	自然地帯	古墳(後期)
13	南台城跡	城	丘	陵	平安	59	伊豆野櫛遺跡	円	堆	自然地帯	古墳
14	北野黑跡	跡	丘	陵	平安	60	安久東遺跡	集落	自然地帯	弥生・古墳・奈良・平安～近世	
15	今野野跡	跡	丘	陵	平安	61	安久東古墳	古墳	自然地帯	古墳(後期)	
16	箕輪A地区古墳群	前方後円墳・方墳	丘	古墳		62	前田城跡	城	自然地帯	中世	
17	金剛寺貝塚	貝塚	丘	陵	縄文・弥生・奈良・平安	63	櫻澤遺跡	台地	自然地帯	平安	
18	川上遺跡	包谷	地	冲積地	縄文・弥生・奈良・平安	64	中北道跡	包谷	地	自然地帯	奈良・平安
19	奥野東遺跡	包谷	地	冲積地	縄文・弥生・奈良・平安	65	中北道跡	包谷	地	自然地帯	奈良・平安
20	高板遺跡	包谷	地	冲積地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	66	天神塚古墳	方墳	堆	自然地帯	古墳(中期)
21	熊野武智賀跡	跡	丘	陵	中世	67	上白山遺跡	集落	自然地帯	弥生・古墳・奈良・平安	
22	沼上遺跡	包谷	地	谷	奈良・平安	68	後河津遺跡	包谷	地	自然地帯	奈良・平安
23	熊野堂塚穴	塚	穴	丘	古墳(後期)	69	弁天園古墳	円	堆	自然地帯	古墳
24	上野遺跡	包谷	地	冲積地	縄文・奈良・平安	70	戸内遺跡	墓葬	跡	自然地帯	古墳・平安・中世
25	向山塚穴跡	跡	丘	接觸面	古墳・奈良	71	城丸古墳	円	堆	自然地帯	古墳
26	大年寺横穴群	横	丘	接觸面	古墳・奈良	72	牛田中道跡	包谷	地	自然地帯	奈良・平安
27	赤禪寺横穴群	横	丘	接觸面	古墳・奈良	73	仙台大塚遺跡	円	堆	自然地帯	古墳
28	宝寧宮境	境	丘	接觸面	古墳(中期)	74	郡山虎跡	谷斜面	包地	自然地帯	縄文・弥生・古墳～中世
29	一ノ屋古墳	丘	段	丘	古墳	75	西台遺跡	包谷	地	自然地帯	弥生
30	二ノ屋古墳	前後方	丘	段	古墳	76	若林城跡	古墳	地	自然地帯	古墳・中世・近世
31	金岡八幡古墳	円	坂	古墳(後期)	77	福原櫻遺跡	円	堆	自然地帯	古墳	
32	三神墓遺跡	集落	丘	段	縄文	78	道旗古墳	円	堆	自然地帯	古墳(後期)
33	三神墓古墳群	円	坂	丘	古墳(後期)	79	唐農多分寺跡	寺院	跡	冲縄平原	奈良・平安
34	壹尺木山墓跡	段	丘	接觸面	縄文・奈良	80	越畠園分寺跡	寺院	跡	冲縄平原	奈良・平安
35	金沢汎古墳	段	丘	接觸面	古墳	81	新小瀬遺跡	集落	跡	自然地帯	弥生・古墳・奈良・平安・中世
36	篠町古墳	前後方	丘	段	古墳	82	遠見吉古墳	円	堆	自然地帯	古墳(中期)
37	京沢郡	水田跡・包地跡	後背高地	丘	石器・縄文・弥生～近世	83	佐伯糸多条里跡	里跡	跡	冲縄平原	古墳
38	下ノ内遺跡	集落	丘	自然地帯	縄文・弥生・平安	84	中布東遺跡	包谷	地	冲縄平原	弥生・古墳・平安～近世
39	久田遺跡	包谷	地	日光地帯	縄文・弥生・平安	85	青葉遺跡	包谷	地	冲縄平原	古墳・平安
40	大野田古墳	古墳	地	自然地帯	古墳	86	押口遺跡	包谷	地	冲縄平原	弥生・古墳・平安～近世
41	大野田古墳	古墳	地	自然地帯	古墳	87	青井畠中遺跡	包谷	地	自然地帯	古墳
42	伊吉田遺跡	集落	丘	自然地帯	縄文・古墳・奈良・平安	88	森口新田遺跡	集落	跡	冲縄平原	奈良・古墳
43	電気塗跡	塗	地	自然地帯	中世	89	下郷田原塚古墳	円	堆	自然地帯	古墳(後期)
44	八ヶ口遺跡	包谷	地	自然地帯	奈良・平安	90	下ノ田遺跡	集落	跡	自然地帯	古墳・弥生・古墳・奈良・平安～近世
45	木塗跡	集落	塗	自然地帯	古墳・奈良	91	中桑遺跡	集落	跡	自然地帯	弥生・古墳・奈良・平安～近世
46	雪遺跡	包谷	地	自然地帯	平安	92	三本家古墳	前方後円墳	跡	自然地帯	古墳

第1表 遺跡地名表



第4図 周辺の道路

第2章 調査結果

第1節 山口遺跡第9次調査

1 調査方法

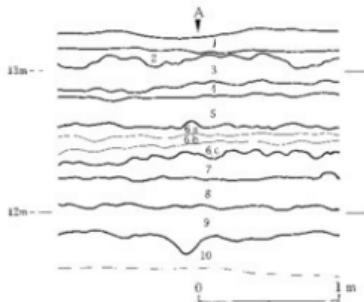
調査区の設定面積は約 $9.0 \times 6.0\text{m}$ (54 m^2) である。調査は、1層(水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行なった。調査区内には、南壁を除く三方の壁際に土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査は6層上面までは、調査区全面の精査を実施したが、6層以下は調査区を徐々に縮小して10層まで掘り下げた。なお、調査中に東壁が大きく崩落したため、東壁断面図は調査区外のかなり離れた位置で実測している。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施し、この基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値は、以下のとおりである。

杭A・X = -198.16221km, Y = +3.16203km

杭B・X = -198.16134km, Y = +3.15715km

2 基本層序

今回の調査では、大別10層、細別では12層が確認された。各層の土質はシルト及び粘土であるが、6層以下は粘土が主となる。各層とも傾きに大きな変化は認められない。グライ化は7層以下から始まり、10層では顕著である。現代のものを除く明確な水田土壤は不明であるが、2層は下面の起伏状況、下層ブロックの巻き上げより水田土壤の可能性もある。



第6図 基本層序断面図

基本層序註記表

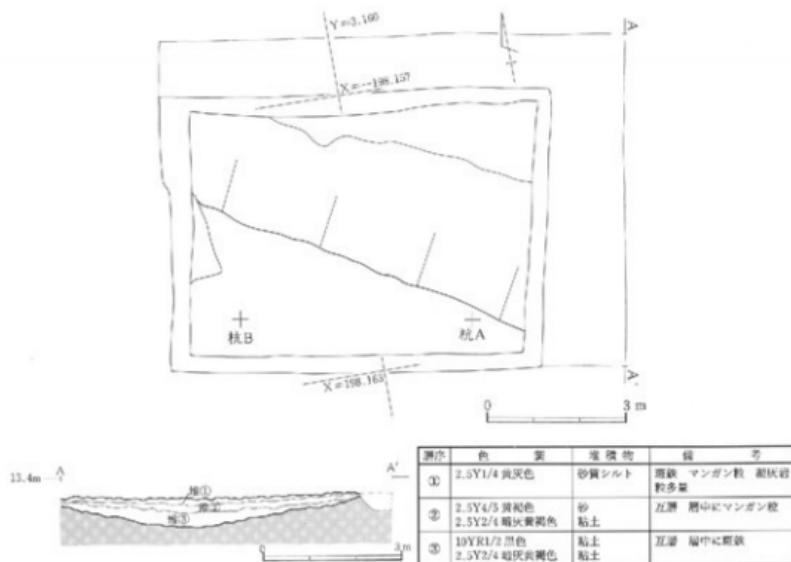
層序	色 葵	堆 墓 物	備 考				
1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	層中に鐵鉄、下面に鐵鉄集積 現代の水田耕作土	6a	10YR1/2 黒色	粘土	層中に鐵鉄（上面に集積）鐵 岩粒少量
2	2.5Y1/5 黄褐色	シルト	層中に鐵鉄、上面にマンガン粒 多量、鐵灰泥炭、日本耕作土？	6b	10YR1/3 黑褐色	粘土	層中に鐵鉄、鐵灰泥炭少量
3	2.5Y3/5 充褐色	砂質シルト	層中に鐵鉄、マンガン粒多量	6c	10YR1/2 黑色	粘土	層中に鐵鉄、鐵灰泥炭、下面鉄 伏
4	7.5YR8/4 暗灰色	シルト質粘土	層中に鐵鉄、マンガン粒	7	2.5Y3/5 黄褐色	シルト質粘土	鐵粉多量
5	7.5YR2/4 深褐色	シルト質粘土	層中に鐵鉄、マンガン粒（下面 に多量）	8	10YR1/1.7 黑色	粘土	7.5Y1/4 暗褐色
				9	7.5Y1/4 暗褐色	粘土	グライ層
				10	10G1/5 深褐色	粘土	グライ層

3 検出構造と出土遺物

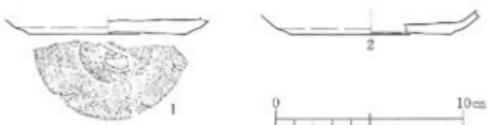
(1) 3層上面

1号河川跡-SR1-

北西-南東方向に延びる自然流路跡で、3層上面で検出された。北岸は、調査区外となり河川幅全てを検出することができなかつたが、調査区東壁から約1.7m離れたセクション図化部分において河川幅を推定することができた。推定河川幅7.0m前後、深さ60cm前後で、断面は張りの弱い弧状を呈する。調査区内では上端・下端ともほぼ直線的である。底面は、ほとんど凹凸が認められない。堆積土は3層から成り、各層とも自然堆積状況を示す。堆積土③層より土器・須恵器の細片が少量出土している。



第7図 1号河川跡平面・断面図



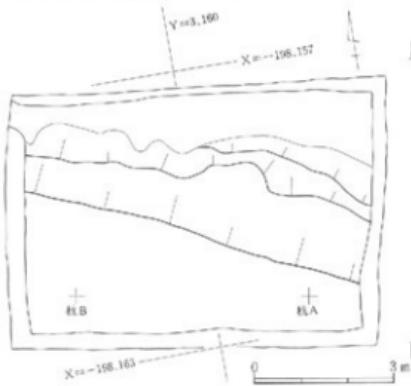
番号	品種	形状	河川跡	部位	法 葉(m)			外 围 調 査			内 围 調 査			備 考	写 真
					縦高	口径	底径	口 横 面	体 部	底 部	口 横 面	体 部	底 部		
1	E-4	調査器 環	底面	-	-	(0.4)	-	ロクロナデ	同様～ラ切り →四角へラ開 り	-	ロ ク ロ ナ デ	残存	片		
2	E-1	調査器 环	③	-	-	(0.0)	-	ロクロナデ	手持ヘラ削り 切り難し不明	-	ロ ク ロ ナ デ	残存	24		

第8図 1号河川跡出土遺物

(2) 4層上面

2号河川跡-SR2-

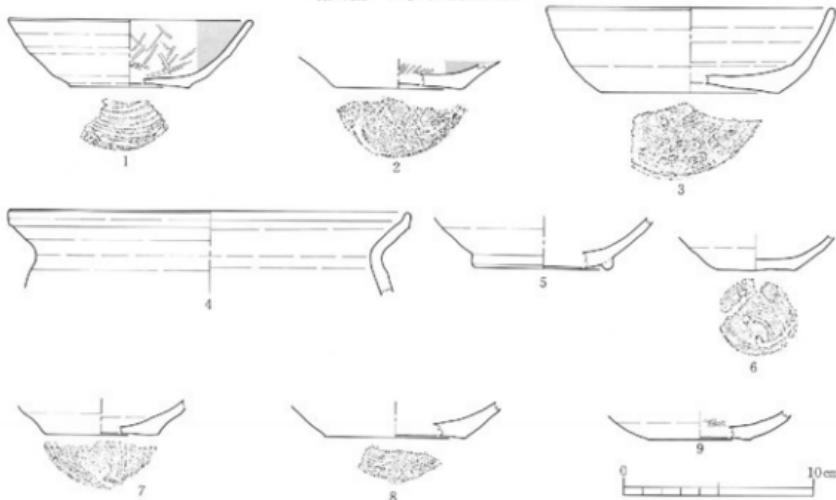
1号河川跡の直下に位置し、同一方向（北西—南東）をとる自然流路跡で、4層上面で検出された。1号河川跡より一回り以上規模が大きい河川跡で、北岸は、調査区外となり河川幅全てを検出することができなかった。河川幅は約5.0m以上で、深さは1.5m前後である。調査区内では上端はほぼ直線的であるが、下端は出入りが激しく蛇行している。底面及び壁面下半は凹凸が顕著である。堆積土は3層から成り、各層とも自然堆積状況を示す。この内、堆積土③層は砂砾層で、拳大の円礫を多量に含む。堆積土②・③層から200点以上の遺物が出土したが、その多くは最下層の堆積土③層からである。出土遺物には、ロクロ使用の土師器や赤焼土器が多いが、いずれも細片を主とする破片資料のみである。



第9図 2号河川跡平面図



第10図 2号河川跡断面図



回数 番号	セ ル 番 号	種 別 形	横 断 面 位	法 番(cm)	外 围 面 構 成			内 围 面 構 成			備 考	写 真 図版
					高 度	口 径	底 所	口 線 部	体 部	底 部		
1	D-10	土器器 環	③層	3.6 (12.8)	(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	刮削余切り	ヘ ラ と ガ キ	三 色 处 理	残存 1/2	-
2	D-4	土器器 環	③層 (上部)	-	- (6.8)	-	ロクロナデ	刮削余切り	-	ヘ ラ ミ ガ キ	残存 1/2	-
3	E-5	陶器器 環	③層	4.6	15.0 (9.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	刮削ヘラ削り	ロ ク ロ ナ デ	外側に薄灰 残存 1/2	-	-
4	D-14	土器器 環	③層	-	(21.2)	-	ロクロナデ	-	-	ロクロナデ	-	残存 1/2
5	F-6	赤土器 器	③層 (上部)	-	(7.0)	-	ロクロナデ	切り離し不明	-	ロ ク ロ ナ デ	-	-
6	F-2	赤土器 器	③層 (上部)	-	(4.0)	-	ロクロナデ	刮削余切り	-	ロ ク ロ ナ デ	内側にスリット有 残存 1/2	-
7	F-3	赤土器 器	③層 (上部)	-	(6.0)	-	ロクロナデ	刮削余切り	-	ロ ク ロ ナ デ	残存 1/2	-
8	F-8	赤土器 器	③層	-	(7.4)	-	ロクロナデ	刮削余切り	-	ロ ク ロ ナ デ	残存 1/2	-
9	D-15	土器器 環	③層	-	(5.4)	-	ロクロナデ	刮削余切り	-	ヘ ラ ミ ガ キ	残存 1/2	-

第11図 2号河川跡出土遺物

(3) その他の出土遺物

遺物出土層は1・2・3・5・6c層であるが、各層とも出土量はごく僅かで、合計36点である。土師器・須恵器などが出土しているが、これらは全て細片を主とする破片資料である。土師器は、6c層を除く上層の各層で出土しているが、5層中には、ロクロ使用のものが含まれなかった。5層出土の土師器片は13点であるが、4個体分程度の資料と考えられる。この資料中には、内外面に細かいハケメ調整が施されているものが認められる。6c層よりは、土器片が1点出土したが、内外面とも摩滅しており種別については不明である。

測定番号	登録番号	種類	層位	法 墓(cm)			外 面 調 参			内 面 調 参			写真回数
				高さ	口径	底径	口 線 部	体 部	底 部	口 線 部	体 部	底 部	
1	E-10	須恵器 環	3層	-	-	(7.4)	-	ロクロナデ	ナデ	-	ロクロナデ	残存	1/2

第12図 3層出土遺物

4 まとめ

- 検出遺構としては、2時期の河川跡(SR 1・2)が検出されたのみであった。
- 4層上面検出の2号河川跡は、堆積土最下層堆積物および底面付近の状況より、埋没前に流勢が激しかったことが窺える。
- 3層上面検出の1号河川跡は、2号河川跡の埋没後のへこみが再び自然流路として機能したものと想定される。
- 両河川跡とも狭い調査区内での検出で、底面の比高差を流路方向と結び付けることは困難であるが、当調査区周辺の全体的な地形から観ると、東側方向に流下したものと考えられる。
- 両河川跡の所属年代であるが、河川跡という性格上、堆積土内遺物のみでは所属年代を推し測り難く、また、基本層からの出土遺物も乏しいことにより、明確な所属年代は不明である。

測定番号	層位	調査土層		未確認土層 (確認済み)	共生土器 (確認済み)	土 壤			質	形	赤褐色土層	土師質土層	判別不能 な土層	土 製 品 (羽目)	合計
		測定番号	層位			高さ	幅	厚さ							
基本層	1	-	-	-	-	1	2	1	1	2	3	-	-	-	10
基本層	2	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	-	-	-	4
SR 1 ①	-	-	-	-	-	7	1	3	-	-	-	-	-	-	11
基本層	3	-	-	-	-	6	-	1	-	-	1	-	-	-	8
SR 2 ②	-	1	-	1	8	3	1	5	-	-	-	-	-	-	19
SR 2 ③	1	6	1	23	76	42	13	34	-	-	-	-	1	199	
基本層	5	-	-	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13
基本層	6C	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
合計	25	1	7	1	37	102	48	23	40	2	5	1	-	-	265

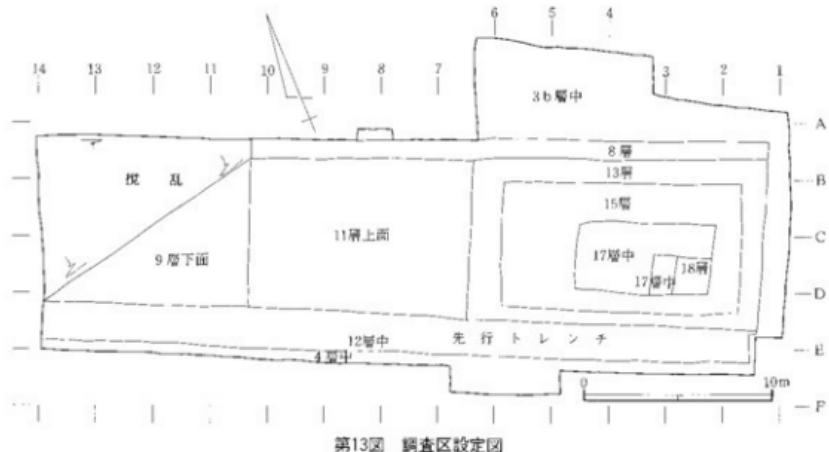
第2表 出土遺物集計表

第2節 山口遺跡第10次調査

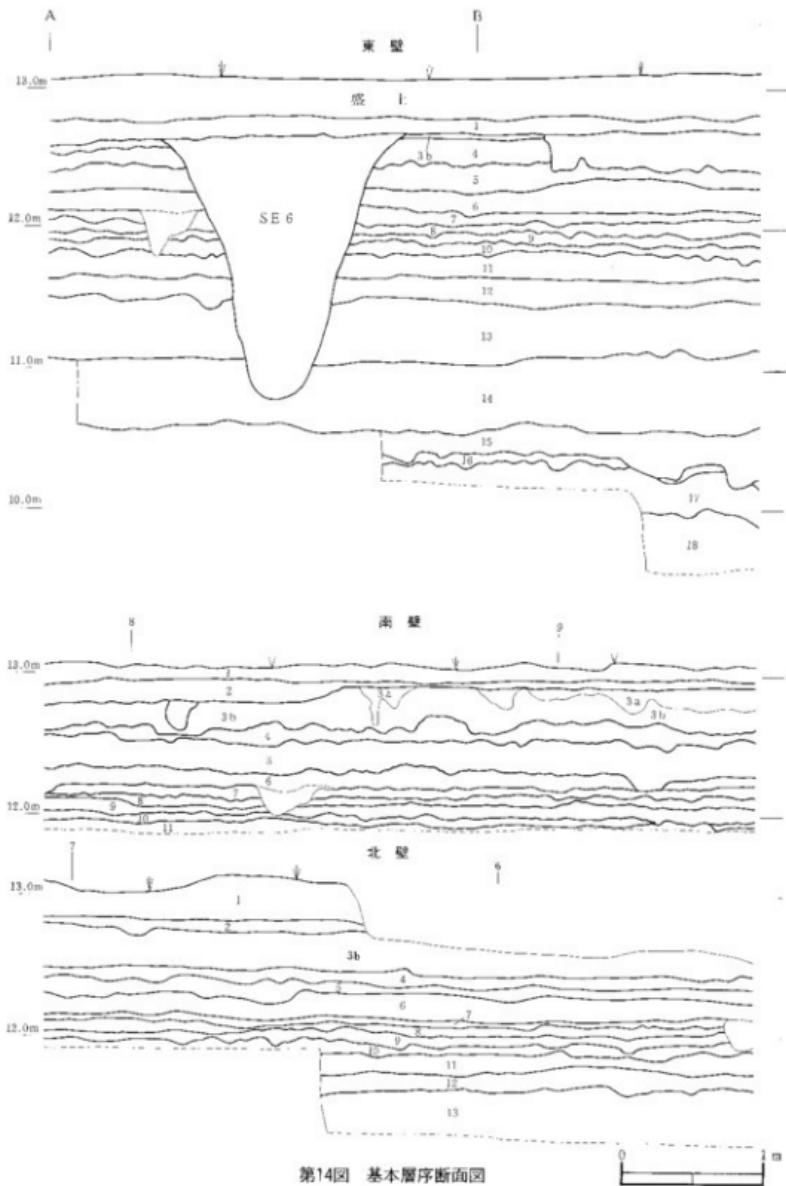
1 調査方法と経過

調査区は当初、建設される建物の基礎部分に沿って東西約37m・南北約12.5mの規模で設定した。その後3b層上面の集落跡において調査区外に延びる遺構が複数確認されたため、その時点でき可能な限りの拡張を行なった。これを加えた調査区の総面積は約532m²である。グリッドの設定は、調査区北東コーナー付近に任意に設けた原点を基準に行なった。この原点を起点(A-1)に定め、東西方向の基準線に3m間隔で設けた点にアラビア数字を付番しこれと直交する南北方向ラインには、同じく3m間隔の点にアルファベットを与えていった。遺構の測量はこうして得られたグリッドを基準にして実施したが、この南北ラインは真北より東に22°11'偏っている。またレベルの計測は、調査区施設に設置した13.00m(T.P.)のベンチマークを基準にした。なお2点のグリッド交点の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、正確な位置を把握している(F-14:X=-198.192162km, Y=+3.242942km F-1:X=-198.206883km, Y=+3.279054km)。

当調査区は最近まで水田として利用されていた所で盛り土はなされておらず、調査は旧水田耕作土の1層を機械で除去し2層以下は人力で行なった。なお、調査区北西コーナー付近はかつて高压線鉄塔が設置されていた場所で、少なくとも5m以上の深度で擾乱が及んでいることが判明したため、対象から除外した。調査開始は1988年10月であったが、同年12月までに調査区全面で3b層までの作業を完了した。これと併行して調査区南辺部に、12層中までの先行トレン



第13図 調査区設定図



第14図 基本層序断面図

基本層性記表

層序	色 調	地 物	層 厚	混 入 物	成 因	備 考
1	2.5Y4/1 黄褐色	シルト質粘土	30~42cm		水田耕作土	
2	2.5Y5/1 黄褐色	シルト質粘土	13~30cm	軽石粒	水田耕作土	しまり強
3a	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	8~13cm	軽石粒	畑作土?	
3b	2.5Y5/4 黄褐色	砂質シルト	30~46cm	軽石粒、カーボン酸少量		中世～平安～奈良時代の遺構検出面・しまり強
4	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	10~33cm	カーボン酸少量		
5	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	10~32cm	軽石粒		
6	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	5~26cm	カーボン酸少量		若干粘土質である。
7	2.5Y4/2 暗灰黄色	シルト質粘土	2~25cm			
8	10YR 3/1 黑褐色	粘 土	5~15cm	軽石粒、カーボン酸、粗砂少量	水田耕作土	しまりやや強
9	2.5Y2/1 黑色	粘 土	2~12cm		水田耕作土?	しまりやや強
10	10YR 4/1 黑褐色	粘 土	8~22cm		水田耕作土	
11	10YR 2/1 黑色	粘 土	12~33cm			
12	2.5Y2/1 黑色	粘 土	14~32cm			
13	5Y3/1 オリーブ黒色	粘 土	26~44cm	軽石粒、カーボン酸少量		グライ化断層
14	7.5Y5/3 深オリーブ色	粘 土	35~60cm			グライ化断層
15	5GY3/1 暗オリーブ色	粘 土	28~36cm			グライ化断層
16	7.5GY4/1 暗緑灰色	粘 土	4~24cm			グライ化断層・しまり強
17	5GY4/1 暗オリーブ色	粘 土	18~42cm	φ3cm~10cm程度の礫		グライ化断層・しまり強
18	5GY4/1 暗オリーブ色	砂 粒	45cm以上	φ3cm~10cm程度の礫、10GY4/1 暗緑灰色の粗砂		グライ化断層

チを入れて下層の状況把握を行なった。翌1989年4月に作業を再開し9層までは調査区全面の精査を実施したが、10層以下では順次調査区を縮小していった。18層の砂礫層を確認し調査の一切を終了したのは同年6月である。

なお調査途上の1988年12月に現地説明会を開催し、調査中であった中世から奈良時代にかけての集落跡を市民および報道機関に公開した。

2 基本層序

今回の調査で確認された基本層は大別で18層、細別では19層である。本調査区は近年まで水田として利用されていた場所で盛土はされておらず、この水田の耕作土を基本層の最上層1層とした。

最上層から最下層までの土質は、大きく4種類に区分することができます。1~2層はシルト質粘土で近世以降の水田耕作土と考えられるが、2層は直下の集落跡の造構面を耕作により削平したためか多数の遺物を含んでいる。3a~6層は砂質シルトである。このうち3a層は調査区の南西部を中心に観察される層である。この分布域では小溝造構が多く検出されており、畑作に伴う耕作土の可能性が想定される。3b層は中世から奈良時代、4層は古墳時代の遺構検出面である。7~17層は粘土層であるが8層・10層からは弥生時代の水田跡が確認された。またこの間層の9層も層下面に乱れが観察されることなどから、水田耕作土の可能性が考えられる。12・13層からは縄文時代の遺物が出土した。18層は砂礫層で直径3~10cmの円礫が主体をなしている。このように最上層からシルト質粘土→砂質シルト→粘土→砂礫という土質の区分が観察されることから、それぞれの変換点で地形や環境の変化が考えられる。今回の調査では粘土

層で水田跡、砂質シルト層で集落跡を検出しているが、このことは地形・環境の変化に対応した土地利用の相違として理解できよう。

なお当調査区に隣接する山口遺跡第2次調査(田中:1984)では、平安時代と纏文時代(?)に降下したとみられる2種類のテフラが確認されているが、今回は検出されなかった。また、調査区内の基本層には泥炭の形成は認められない。グライ化は13層から徐々に始まり、14層以下で明瞭となる。

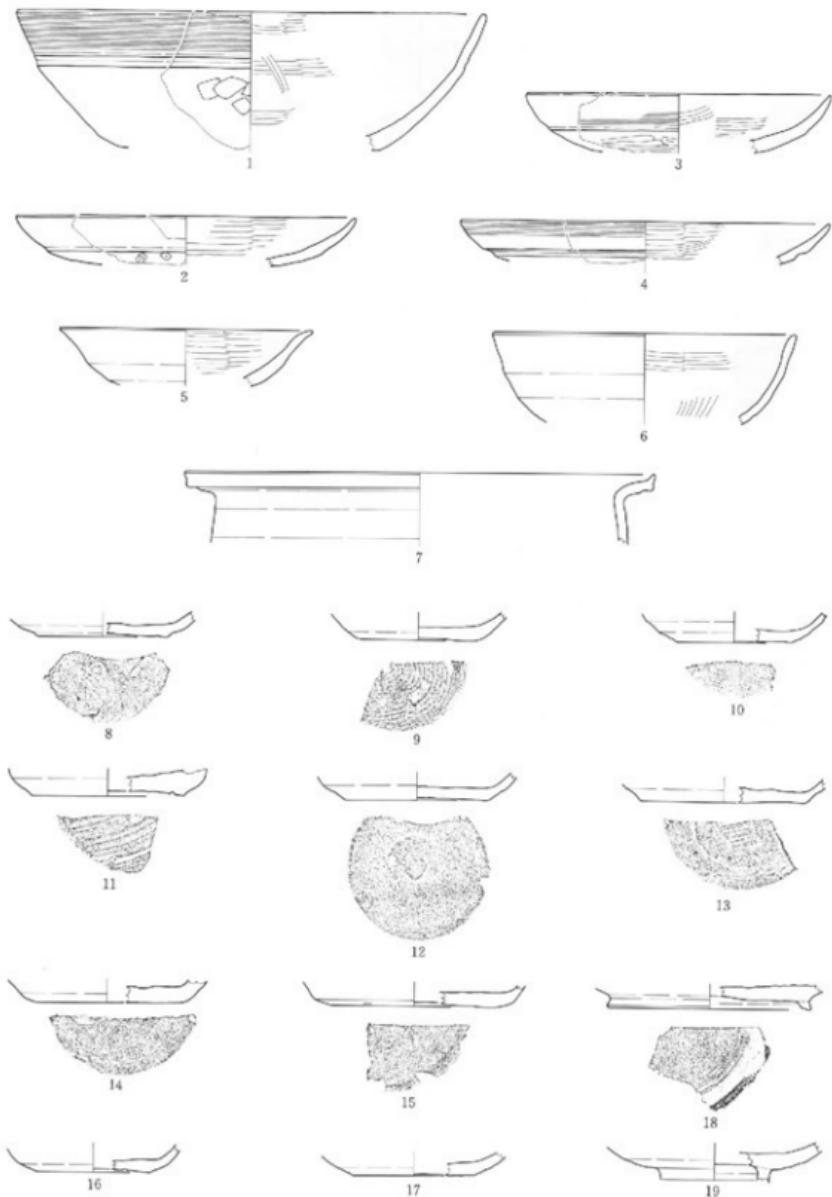
3 検出遺構と出土遺物

1 2層の遺物

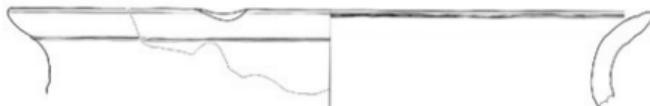
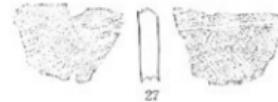
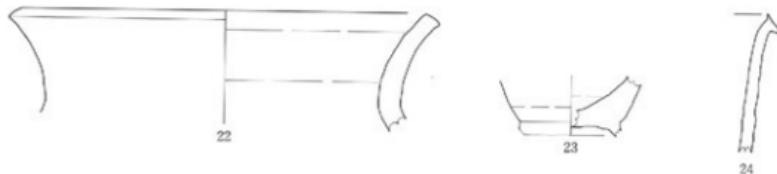
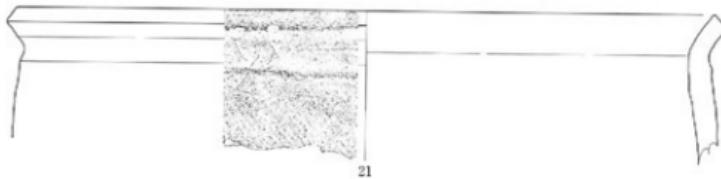
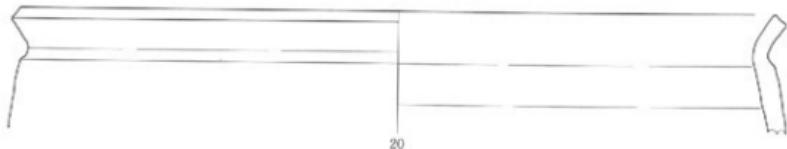
出土遺物(第15図・第16図・第17図)

2層は近世以降の水田耕作土と考えられる土層であるが、この上面で畦畔等の遺構は確認されなかった。しかし層中より比較的多量の遺物が出土した。これは2層の水田經營時に、直下の遺構面3b層を耕作によって攪拌したための混入が主であると推測される。出土した遺物には土師器・須恵器・陶器・灰釉陶器などがある。なお常滑産陶器の年代については檜崎彰一氏に、灰釉陶器の产地・年代については井上喜久男氏のご教示を得た。

1~4は土師器で、非クロロ成形の坏である。体部に軽い段がつくると(1・2・3)、沈線の巡るもの(4)がある。いずれも内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。これらの坏は、3b層で確認された一連の聚穴住居跡出土のものとよく似た特長をもっている。5~7はロクロ成形の土師器で5・6は坏、7は甌である。8~29は須恵器である。8~17は坏であるが、底部の状況をみていくと次のとおりである。回転糸切り無調整のもの(8・9・10)。静止糸切り無調整のもの(11)。回転ヘラ切りの後、手持ちヘラ削りを施したもの(12・13・14)。切り離し不明で、回転ヘラ削りが施されたもの(15)。切り離し不明で、ナデ調整が施されたもの(16・17)。18は高台付き坏である。19は甌と考えられる資料であるが明るい灰白色の胎土に白色・黒色の粒子を含んでおり、福島県会津若松市大戸窯産の製品にみられる特長と類似している。20・21は甌である。ともに体部外側は平行叩きの後、軽いナデ調整が施されている。口縁部の屈曲に特長が認められるほか内外面の色調は暗い赤褐色を呈し、現在のところ付近に類例を見出すことができない。22には甌か広口の壺などの器形が考えられる。内外面の色調は青黒色で、あまり類例をみない資料である。23は小型の甌である。24は長頸瓶と考えられる資料であるが明るい灰白色の胎土に白色・黒色の粒子を含んでおり、大戸窯の製品にみられる特長と類似している。25~29は甌類の体部である。外側はすべて平行叩きである。内面調整のうち27のハケメ状ナデ調整と、29の平行叩き状の当て目は特長のあるものである。30~33

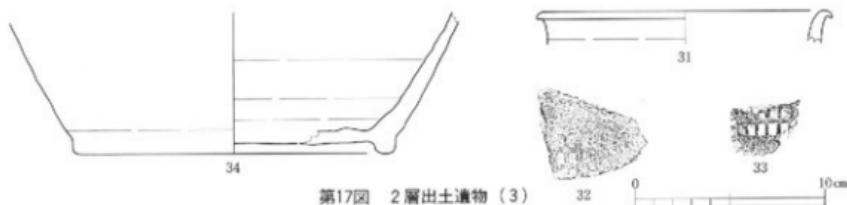


第15図 2層出土遺物 (1)



第16図 2層出土遺物 (2)

0 10cm

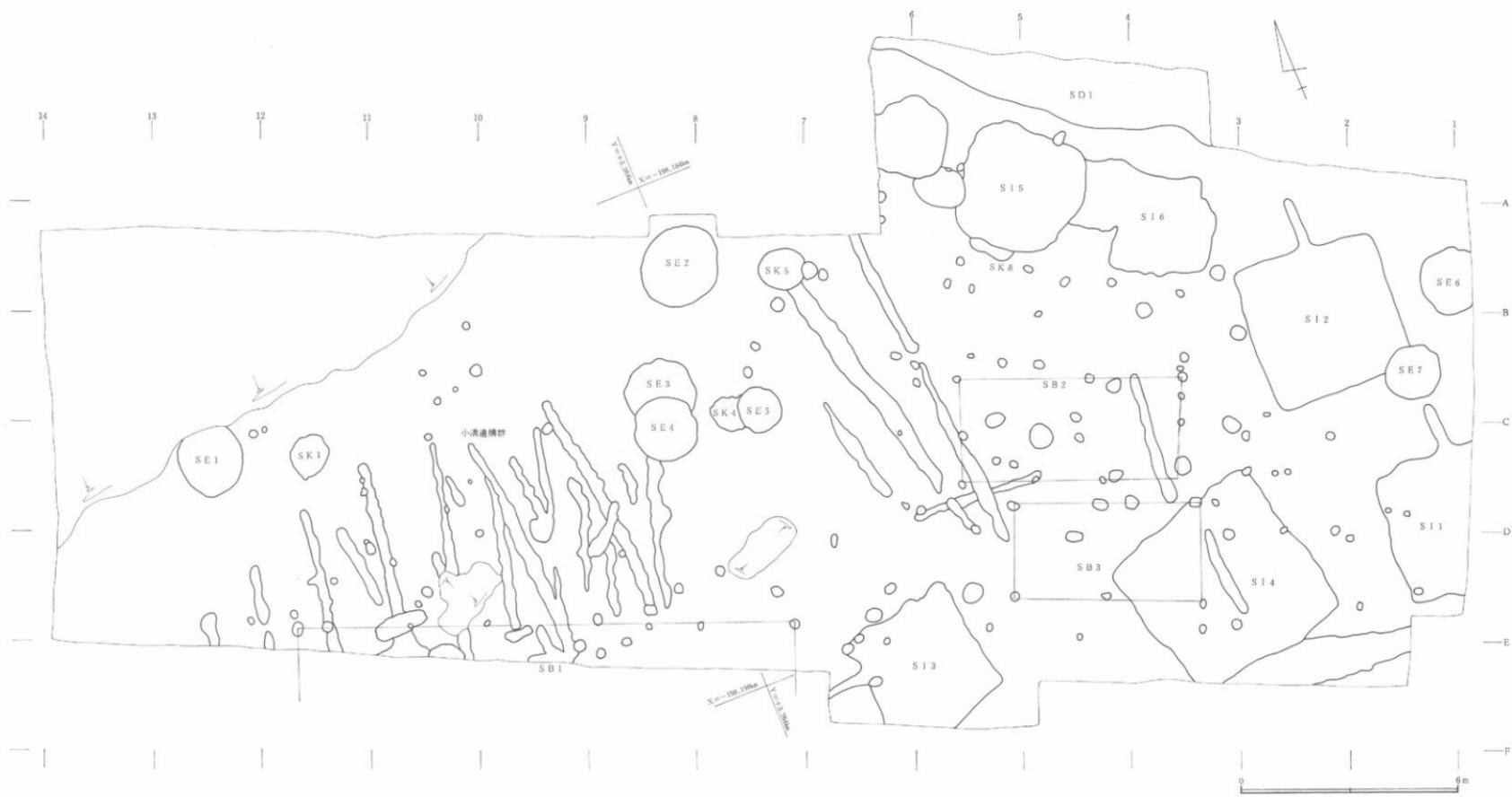


第17図 2層出土遺物 (3)

は陶器である。30は常滑産の壺である。口唇部が丸みを持ち、内側に沈線が巡るのが特長で12世紀後半の年代が推定される。32・33も中世の常滑産陶器で壺か甕の体部と考えられる。ともに外面に格子状押印が認められる。31は壺と推定される。産地・年代ともに特定することはできないが、胎土等の特長から渥美産の可能性も考えられる。34は灰釉陶器で長頸瓶の底部と考えられる。体部下端部分には削りが認められるが、高台との接合部にはナデ調整が施されている。底部は回転ヘラ削りによる調整を受けているが、高台との接合部はていねいなナデ調整が観察される。内面はナデ調整である。産地は愛知県猿投で、井上氏より東山72号窯の製品にみられる特長に類似しているとのご教示を得ている。年代は11世紀前半と推定される。

基本層2層出土遺物

回数 番号	形 態 番 号	種 別	層位	法 量(cm)	外 周 縦 整			内 面 縦 整			備 考	写 真 番 号
					口 縁 部	体 部	底 部	口 縁 部	体 部	底 部		
1 C-4	土師器 片	2層	-	(25.0)	-	横ナデ		ヘラ削り	ヘ ラ ミ ガ キ	黒 色 丸 底	-	-
2 C-2	土師器 片	2層	-	(18.0)	厚底			ヘラ削り	ヘ ラ ミ ガ キ	黒 色 丸 底	-	-
3 C-1	土師器 片	2層	-	(16.1)	横ナデ			ヘラ削り→ ヘラミガキ	ヘ ラ ミ ガ キ	黒 色 丸 底	-	-
4 C-3	土師器 片	2層	-	(19.0)	横ナデ		厚底		ヘ ラ ミ ガ キ	黒 色 丸 底	-	-
5 D-2	土師器 片	2層	-	(13.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	ヘ ラ ミ ガ キ	黒 色 丸 底	-	-
6 D-1	土師器 片	2層	-	(16.1)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	ヘ ラ ミ ガ キ	黒 色 丸 底	-	-
7 D-3	土師器 片	2層	-	(25.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-
8 E-1	陶器片	2層	-	(6.8)	-	ロクロナデ		回転手切り鋸 調整	ロ ク ロ ナ デ		-	-
9 E-2	陶器片	2層	-	(6.0)	-	ロクロナデ		回転手切り鋸 調整	ロ ク ロ ナ デ		11-6	
10 E-3	陶器片	2層	-	(6.0)	-	ロクロナデ		回転手切り鋸 調整	ロ ク ロ ナ デ		11-18	
11 E-4	陶器片	2層	-	(6.1)	-	ロクロナデ		跡止手切り 鋸調整	ロ ク ロ ナ デ		11-7	
12 E-5	陶器片	2層	-	(7.6)	-	ロクロナデ		回転ヘラ削り →手持ヘラ削 り	ロ ク ロ ナ デ		11-5	
13 E-6	陶器片	2層		(8.6)	-	ロクロナデ		回転ヘラ削り →手持ヘラ削 り	ロ ク ロ ナ デ		11-2	
14 E-7	陶器片	2層	-	(7.7)	-	ロクロナデ		回転ヘラ削り →手持ヘラ削 り	ロ ク ロ ナ デ		11-9	
15 E-8	陶器片	2層	-	(8.8)	-	ロクロナデ	回転ヘラ削り	ロ ク ロ ナ デ			切り離し不明	11-3



第18図 3 b層検出遺構全体図

基本層2層出土遺物

回収番号	遺構番号	層位	柱頭(φmm)	外観調査			内面調査			備考	可取回数
				縦断面	横断面	底盤	縦断部	横断部	底盤		
16	E-9	掘立柱 跡	2層	-	-	(6.0)	-	ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ	切り落し不明
17	E-10	掘立柱 跡	2層	-	-	(6.5)	-	ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ	切り落し不明
18	E-11	掘立柱 跡(柱印)	2層	-	-	(10.8)	-	ロクロナデ	四輪ヘラ削り	ロクロナデ	-
19	E-12	掘立柱 跡(柱印)	2層	-	-	(5.8)	-	ロクロナデ	-	ロクロナデ	大戸座面か
20	E-45	掘立柱 跡	2層	(40.0)	-	ロクロナデ	-	平行叩きナデ	-	ロクロナデ	10-7
21	E-44	掘立柱 跡	2層	(36.8)	-	ロクロナデ	-	平行叩きナデ	-	ロクロナデ	11-4
22	E-36	掘立柱 跡(柱印)	2層	(22.2)	-	自然脚のため 不明	-	-	-	ロクロナデ	-
23	E-43	掘立柱 小型柱	2層	-	-	(6.8)	-	ロクロナデ	-	ロクロナデ	-
24	E-39	掘立柱 柱頭板	2層	-	-	ロクロナデ	-	-	-	ロクロナデ	大戸座面か
25	E-28	掘立柱 跡	2層	-	-	-	平行叩き	-	当て目ナデ	-	-
26	E-12	掘立柱 跡?	2層	-	-	-	平行叩きナデ	-	-	背面部	-
27	K-28	掘立柱 跡	2層	-	-	-	平行叩きナデ	-	-	ハケ目状ナデ	10-5
28	E-19	掘立柱 跡	2層	-	-	-	ロクロナデ 平行叩き	-	-	ロクロナデ	-
29	E-29	掘立柱 跡	2層	-	-	-	平行叩き	-	当て目	-	-
30	II-1	陶器 腰か否	2層	(34.0)	-	ナデ	-	-	ナデ 沈殿	-	常滑窯産 11-16
31	II-15	陶器 腰	2層	(14.4)	-	ロクロナデ	-	-	ナデ	-	撫美窯産 ? -
32	H-2	陶器 腰か否	2層	-	-	-	格子状押印	-	-	ナデ	常滑窯産 11-17
33	H-3	陶器 腰か否	2層	-	-	-	格子状押印	-	-	ナデ	常滑窯産 11-18
34	H-13	陶器 丸鉢	2層	-	-	(16.0)	-	削り高台鋸合部・ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	唐波窯(東山)産 11-11

2 3 b 層の遺構と遺物

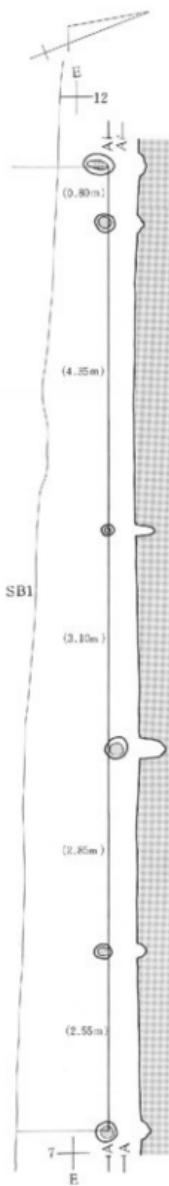
3 b 層上面では以下のような遺構が検出された。竪穴住居跡 4 棟・竪穴遺構 2 基・掘立柱建物跡 3 棟・井戸跡 7 基・土坑 9 基・溝跡 1 条・小溝遺構群・ピット。

これらの遺構の所属時期は中世から奈良時代に及んでいるものと考えられる。以下遺構に関する記述は、時期を新しい順に区分して行なっていきたい。なお、遺構番号の順序は遺構の所属時期を反映したものではない。

— 中世 —

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は合計 3 棟検出された。これらを構成する柱穴から遺物は出土しなかったが、堆積物の状況および竪穴遺構や井戸跡など他の中世遺構との構成から推測して、これらと同じく中世に所属するものと考えられる。なお SB1 掘立柱建物跡は調査区内で完結するものではなく、可能性として推定した建物である。



● SB1 捜立柱建物跡

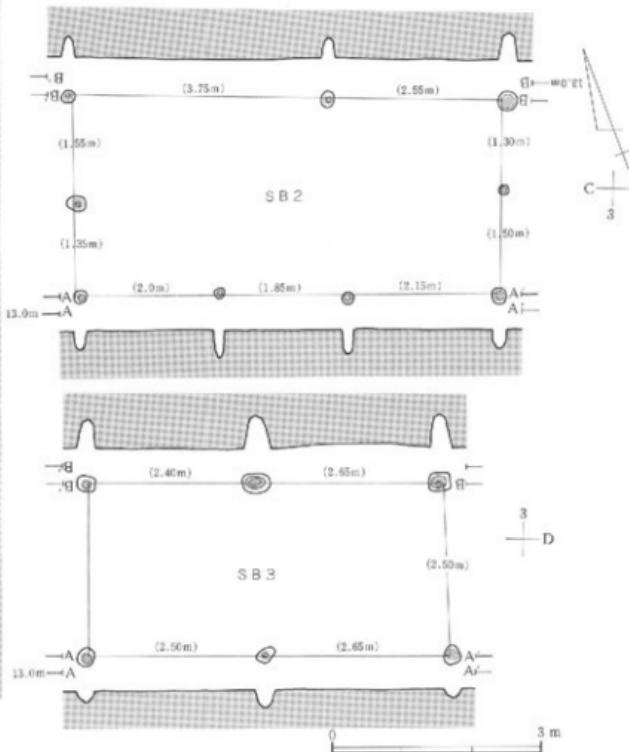
遺構状況（第19図）

建物の主体部分は調査区外に延びていると推測され、北辺だけの検出である。東西4間の東西棟と思われ、桁行長は約13.7mである。建物の西辺にはほぼ1/5間幅の、縁などの施設が想定される。柱穴にはいずれも直径10cm前後の柱痕が確認された。遺物は出土しなかった。

● SB2 捜立柱建物跡

遺構状況（第19図）

東西3間、南北2間を基調とする東西棟であるが、北辺では柱穴が1基欠落しており東西2間となっている。桁行長約6m、梁行長約2.9mである。いずれの柱穴からも直径6～9cm程度の柱痕が確認された。遺物は出土しなかった。



第19図 SB1・2・3 捜立柱遺物跡平面・断面図

● SB3 掘立柱建物跡

遺構状況（第19図）

東西2間、南北1間の東西棟で桁行長約5.1m、梁行長は2.5mである。4本の隅柱の柱穴には直径6～9cmの柱痕が認められた。遺物は出土しなかった。

（2）竪穴遺構

竪穴遺構は重複した状態で2基検出された。

● SI5 竪穴遺構

遺構状況（第20図）

平面形は円形に近い方形を呈し東西軸は3.5m、南北軸は3.3mを計る。深さは最大で50cm程度である。底面あるいは遺構の周囲に、柱穴は確認されなかった。堆積物は6層に区分される。6・5層はほぼ平らな底面の直上にみられる粘土である。この粘土は混入物の少ない良質なもので、人為的に入れられ床として機能していた可能性も考えられる。4層は草本とみられる植物の集積層である。床面に意図的に敷かれたものではないかとの推測もできようが判然としない。3層は灰層であるが灰像分析の結果イネの稈・葉を起源とするものであることが判明した。

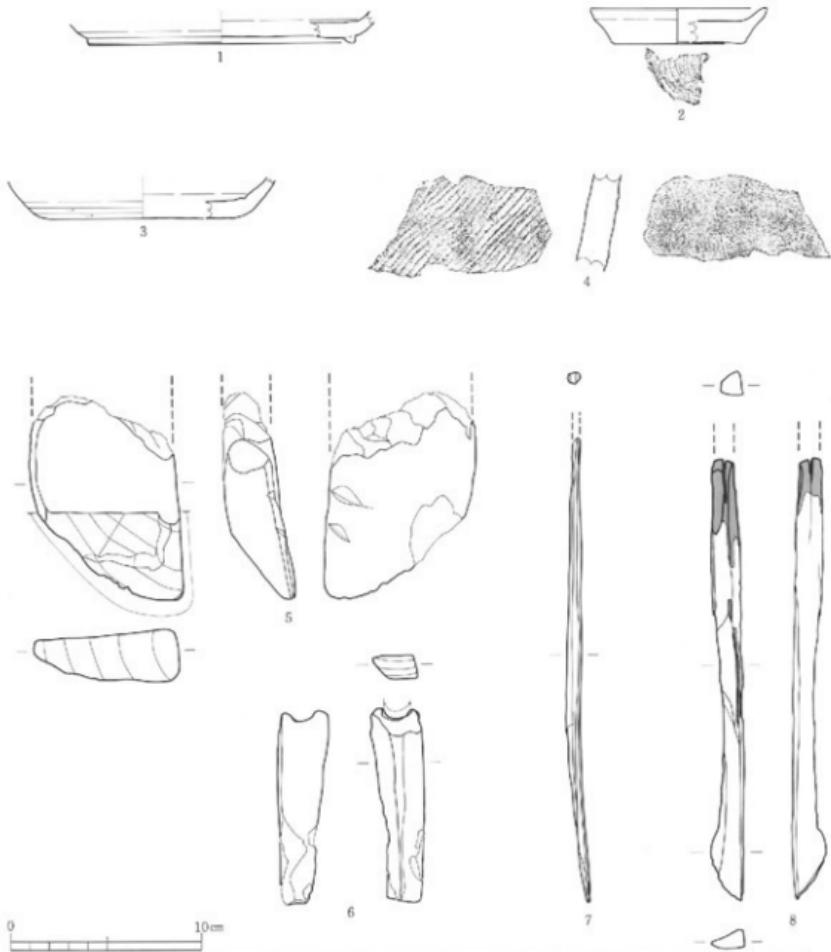
出土遺物（第21図）

土師器・須恵器・土師質土器・木製品などが出土したほか、多量の種子類を検出した。このうち遺構の時期決定資料となったのは、陶器と土師質土器である。



層序	色調	堆積物	混入物
1	10YR4/2 黄褐色	砂質シルト	炭化物少量
2	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	炭化物
3	10YR1/7/7 黑色	灰	イネ稈・茎起源の灰
4	5YR3/2 暗赤褐色	植物遺体	植物種子多量
5	10YR7/2 にぼり黄褐色	粘土	
6	10YR8/2 灰白色	粘土	

第20図 SI5 竪穴遺構平面・断面図

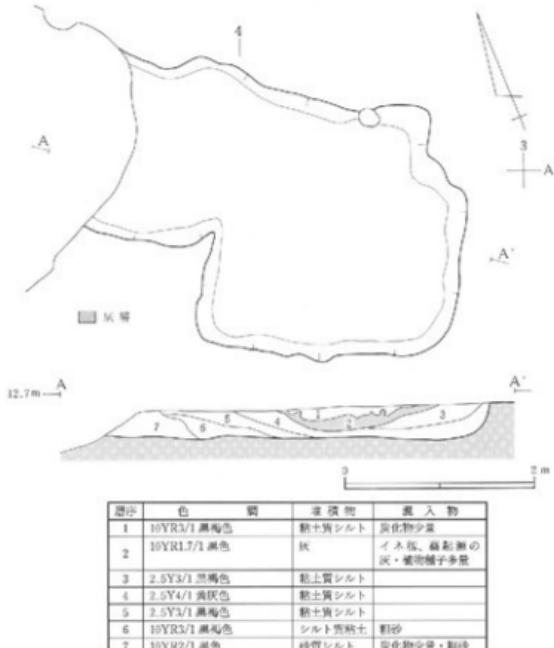


器種 部品 番号	基部 形状	層位	法量(cm)	外 面 調 査			内 面 調 査			備 考	写真 図版
				標高 自然	高径	口 縁 部	体 部	底 部	口 縁 部	体 部	底 部
1 H-14	脚物 組	3層	—	—	(13.3)	—	—	ロクロナデ	ロ ク ロ ナ デ	—	—
2 G-7	脚物 組	5層	1.9 (9.2) (6.8)	ロクロナデ	—	—	回転余切り盤 跡?	—	—	—	—
3 E-78	脚物 組	2層	—	—	(9.3)	—	ロクロナデ	回転ヘラ削り	ロ ク ロ ナ デ	切り離し不明	—
4 K-77	脚物 組	3層	—	—	—	—	平行叩き	—	—	ハケメ次ナデ	—
											19-1
器種番号	分類番号	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木取り	種 子	考	写真 図版		
5	N-9	5層	(11.0)	7.6	2.9	柱目	—	—	—		12-12
6	N-19	5層	10.4	2.7	1.2	柱目	—	—	—		12-19
7	N-7	5層	(24.9)	6.8	0.6	柱目	?	—	—		12-16
8	N-11	5層	(23.6)	1.7	1.3	不明	—	—	—		—

第21図 S1 5堅穴造構出土遺物

1は陶器で付け高台のある皿である。内外面ともにロクロ調整が施されており、復元底径はほぼ14cmとやや大ぶりである。時期・産地とともに特定はできないが、中世の在地産陶器と考えられる。2は一般にカワラケと呼称される土師質土器の皿である。底部が厚くごく短い口縁部がつく。体部外面はロクロ調整で、内面にはていねいなナゲ調整が認められる。底部切り離し技法は回転糸切りである。3は須恵器の壺である。体部下端部にヘラ削りが施され、底部外面の調整は回転ヘラ削りである。4は須恵器で甕の体部片である。外面は平行叩きで、内面にはていねいなハケメ状のナゲ調整が観察される。5・6・7・8は木製品であるが、いずれも用途は判然としない。7は箸の可能性が考えられる。

このほか4層とした植物の集積層からは多量の植物種子を検出した。調査時には層上面の肉眼で確認できる、比較的大型のもののみを取り上げた。これらの種類は同定の結果モモ・ウメ・ヒヨウタン・ウリ・糀・糀殼であった。また4層はすべて整理室に持ち帰って水選別を行ない、そこでも多量の植物種子を検出した。その同定結果は後掲のとおりであるが、多量に検出された糀殼・糀のほかオオムギなどは特に注目される。



第22図 S I 6 壇穴遺構平面・断面図

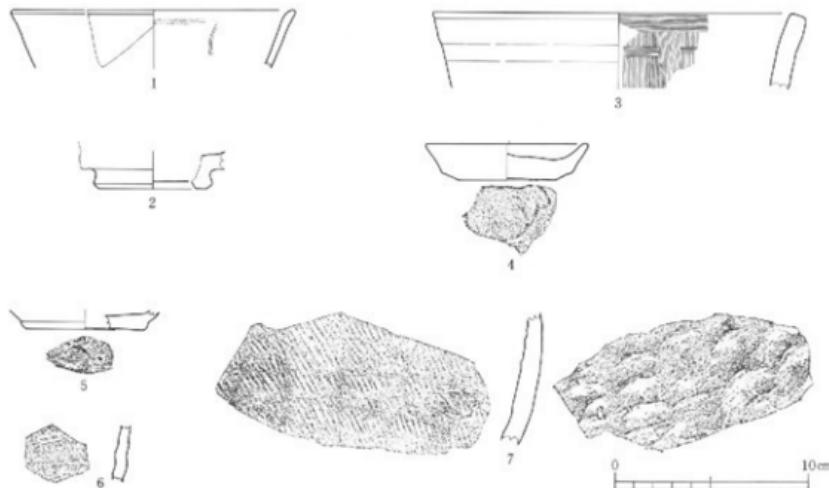
● SI6 竪穴遺構

遺構状況（第22図）

SI5 竪穴遺構に切られた状態で確認された。平面形は方形を基調とし、カギ形を呈している。長軸となる東西軸は約3.7mで、深さは30~40cm程度である。底面あるいは遺構の周囲に、柱穴は検出されなかった。堆積物は8層に区分された。このうち2層は灰層で、灰像分析の結果イネの穂・葉を起源とするものであることが判明した。

出土遺物（第23図）

須恵器・土師質土器・陶器・磁器などが出土したほか、多量の種子類を検出した。このうち遺構の時期決定に係わる資料は土師質土器・陶器・磁器である。なお磁器の产地・年代については柏崎彌一氏にご教示をいただいた。



回数 番号	登録 番号	種別 器形	層位	法 全(cm)			外 面 調 整			内 面 調 整			備 考	写真 回数	
				基高	口径	底径	口	縁	部	底	部	口	縁		
1	I-2	須 器 碗		—	(14.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	中国唐青磁 (東京窯系)	11-14
2	I-3	須 器 碗		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	中国唐青磁 (復元空系)	—
3	H-10	四脚 鉢		—	(18.6)	—	ロクロナデ	—	—	—	ナ ア	—	—	—	—
4	G-8	土 器		2.0	(8.4)	(5.6)	ロクロナデ	—	油輪条切り無 調整	ナ	—	—	—	—	12-3
5	E-99	須 器 环		—	—	(6.2)	—	ロクロナデ	—	油輪条切り無 調整	ロ ク ロ ナ デ	—	—	—	—
6	E-98	須 器 环		—	—	—	—	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ	—	—	外面に施青 (剥落不鮮)	10-6
7	E-95	須 器 环		—	—	—	—	平行叩き	—	—	当て口	—	—	—	10-2

第23図 SI6 竪穴遺構出土遺物

1は中国産青磁の碗で内面に花文が認められる。龍泉窯系のもので年代は12世紀末頃と推定される。2も中国産青磁の碗で底部高台部分の破片である。龍泉窯系で年代は12世紀から13世紀代に納まるものと推測される。3は陶器で器種は鉢と考えられる。やや赤味を帯びた灰褐色を呈し、内外面ともロクロ調整後比較的ていねいなナデ調整が施されている。産地・年代ともに特定はできないが中世の陶器と推測される。4は土師質土器の皿である。厚い底部が特長であるが中心に向かって厚みを増していく。体部外面はロクロ調整であるが、内面は比較的ていねいなナデ調整が施されている。底部の切り離し技法は回転糸切りで再調整はない。5は須恵器の壺で、回転糸切り無調整である。6も須恵器の壺で体部の破片である。判読はできないが刻書が認められる。7は須恵器の壺で、体部の破片である。外面は平行叩き、内面には明瞭な当て具痕がみられる。

2層の灰層からは多くの鶴盤・粉が調査時に検出されたほか、整理室で行なった水選別でも種子類が確認された。その同定結果は後掲のとおりである。

(3) 溝 跡

調査区の北壁拡張部分で1条検出された。

● SD1溝跡

遺構状況（第24図）

南辺一部分の検出であるために、詳しい規模・形状は不明である。検出部分の全長は約9.3m、深さは90cmである。堆積物は3層に分層された。

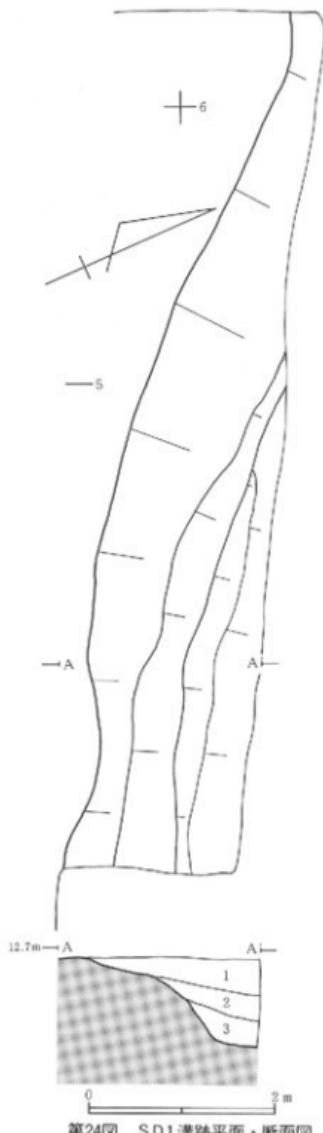
出土遺物（第25図）

土師器・須恵器・土師質土器・磁器などが比較的多く出土したが、図示し得たものは以下の9点である。これらのうち遺構の時期決定に係わる資料は、土師質土器と磁器である。なお磁器の产地・年代については櫛崎彰一氏のご教示をいただいた。

1は中国青磁の碗である。龍泉窯系の製品で年代は12世紀末から13世紀初頭頃と推定される。2は土師質土器の皿で厚い底部が特長である。体部外面はロクロ調整で、内面にはていねいなナデ調整が認められる。底部切り離し技法は回転糸切りで無調整である。3は須恵器の壺である。色調は赤味を帯びた灰褐色を呈し、成形も粗雑であり類例をみないタイプである。底部切り離し技法は回転糸切りで無調整である。4・5・6・7は須恵器の壺である。底部切り離しには回転ヘラ切りのものと（5）回転糸切りのもの（4・6・7）がある。8は須恵器の高台付壺である。9はロクロ使用の土師器で壺である。内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。

(4) 井戸跡

3b層上面では比較的多くの土坑が確認された。それらのうち平面プランが整った円形を



第24図 SD1溝跡平面・断面図

示し、深さ1m以上(SE4のみ80cm)のものについては、井戸跡の可能性が考えられると判断した。合計7基の検出である。

● SE1 井戸跡

遺構状況(第26図)

平面形は円形で一部分を搅乱に切られている。断面形は漏斗状に上部が開く形態を示し、深さは約1.5mを計る。堆積物は5層に分層され4・5層はグライ化している。遺物は出土しなかった。

● SE2 井戸跡

遺構状況(第27図)

平面形は円形で断面形は漏斗状に上部が開く形状を呈している。深さは約1.7mである。堆積物は7層に分けられる。遺物は出土しなかった。

● SE3 井戸跡

遺構状況(第27図)

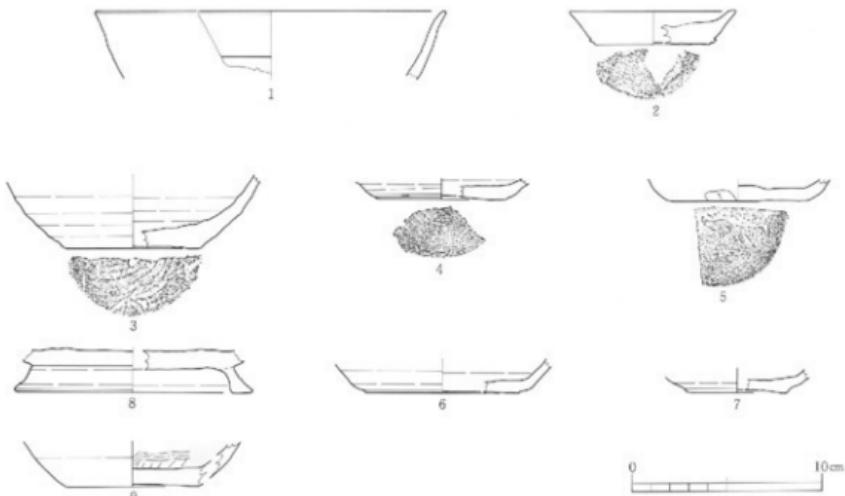
SE4に切られた状態で確認された。平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。断面形は上部が開く形状を示し、深さは約1.5mである。堆積物は5層に分層されるが、最下層の5層はグライ化している。

出土遺物(第28図1・2・3・4)

土師質土器が4点出土した。

1・2・3は皿で厚い底部が特長である。色調は赤褐色を呈する。外面はクロコ調整であるが、内面にはていねいなナデ調整が観察される。底部切り離し技法は回転糸切りで無調整である。またいずれのものにも、内面にタール状黒斑の付着が観察される。4も土師質土器の皿である。成形は手捏ねで、内外面ともナデ調整が施されている。色調は灰白色を呈し胎土は非常に

層厚	色 製	堆 積 物	埋 入 物
1	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	小塊・炭化物
2	2.5Y3/1 黑褐色	シルト質粘土	炭化物
3	2.5Y2/1 黑色	粘土	炭化物



図版 番号	性質 形	剖面 形	層位	法 量(cm)		外 面 調 査			内 面 調 査			備 考	写 真 番 号	
				器高	口径	底径	口 縁 部	体 部	底 部	口 縁 部	体 部	底 部		
1	I-1	器高 筒	3層	—	(8.4)	—	—	—	—	—	—	—	中國青磁 (集束窓系)	11-15
2	G-6	口縁 直	3層	1.8	(8.8)	(6.0)	ロクロナデ	—	回転糸切り無 調整	ナ	ナ	ナ	—	—
3	E-79	底窓 环	2層	—	—	(7.0)	—	ロクロナア	回転糸切り無 調整	ロ	ク	ロ	ナ	11-8
4	E-82	底窓 环	2層	—	—	(6.8)	—	ロクロナデ	回転糸切り→ 回転ヘラ無	ロ	ク	ロ	ナ	—
5	E-80	底窓 环	2層	—	—	(7.4)	—	ロクロナデ	回転糸切り→ 手持ヘラ無	ロ	ク	ロ	ナ	—
6	E-81A	底窓 环	2層	—	—	(8.0)	—	ロクロナデ	回転糸切り→ 手持ヘラ無	ロ	ク	ロ	ナ	—
7	A-81B	底窓 环	2層	—	—	(5.4)	—	ロクロナデ	回転糸切り無 調整	ロ	ク	ロ	ナ	—
8	E-87	底窓 直	2層	—	—	(2.4)	—	—	ロクロナデ	ロ	ク	ロ	ナ	—
9	D-7	土師器 环	2層	—	—	6.8	—	ロクロナデ	回転ヘラ無	ヘ	ラ	ミ	ガ	キ
										黒	色	絶	相	9-7

第25図 SD1溝跡出土遺物

緻密である。他の土師質土器とは系統を異にするものと考えられる。

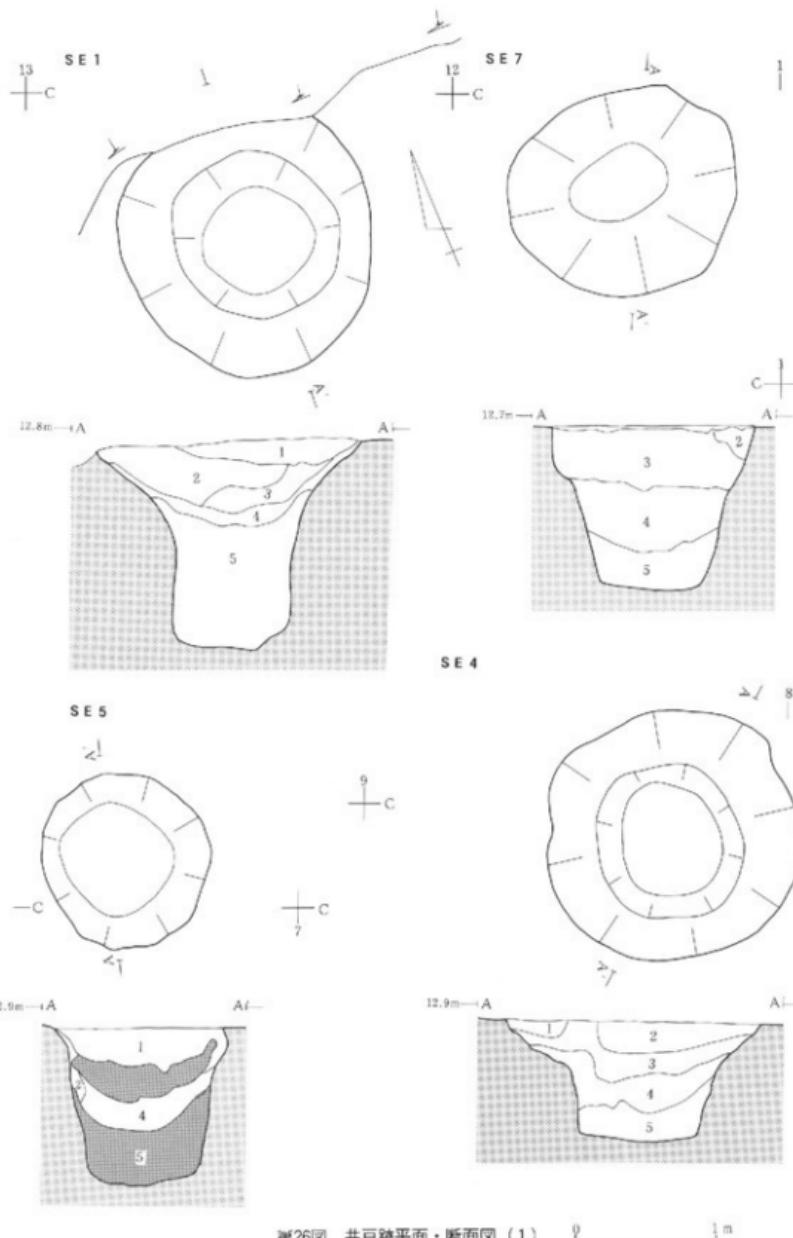
● SE4 井戸跡

遺構状況（第26図）

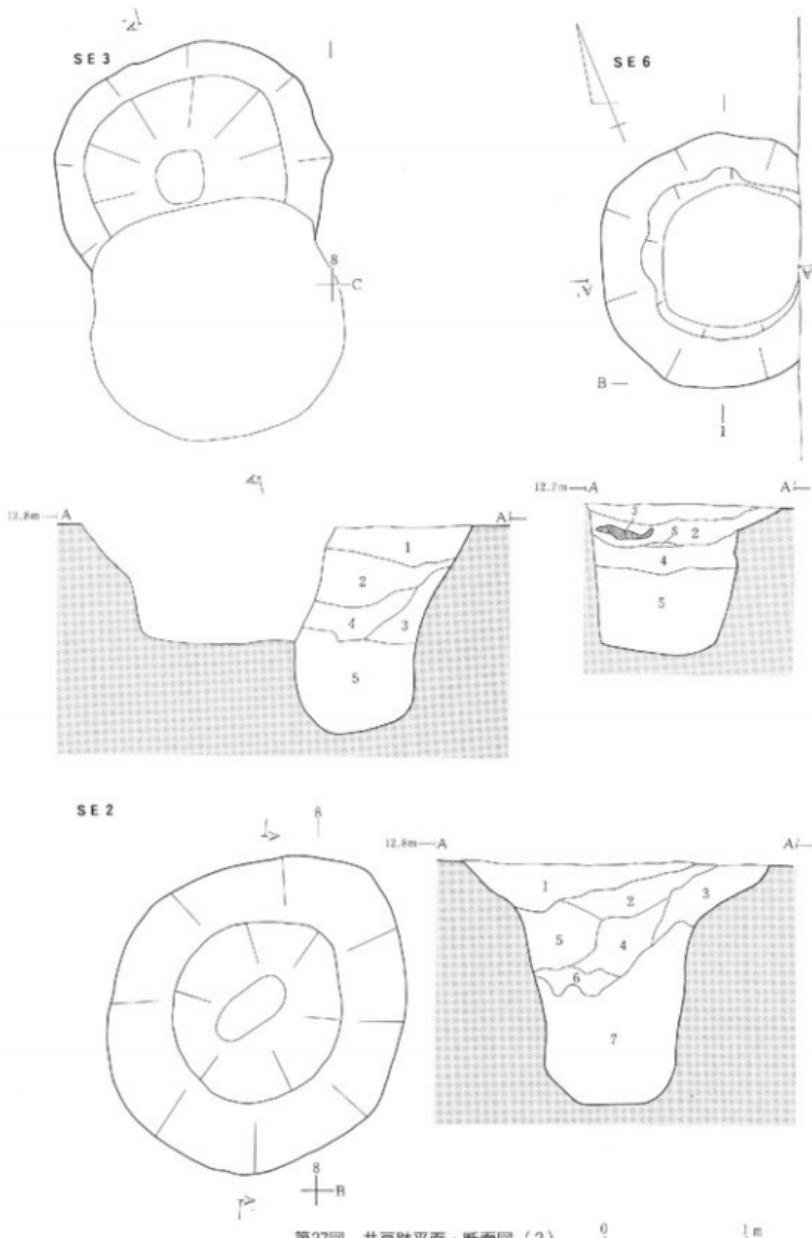
平面形は円形を呈し断面形は漏斗状に上部が開く形状を示す。深さは約80cmである。堆積物は5層に分けられる。

出土遺物（第28図5）

土師器・土師質土器が出土したが、土師器はすべて細片で図示し得たものは土師質土器1点



第26図 井戸跡平面・断面図 (1)



第27図 井戸跡平面・断面図 (2)

SE1

順序	色 調	堆 積 物	混入物・備考
1	10YR2/1 黒色	砂質シルト	炭化物
2	10YR2/1 黑褐色	砂質シルト	小鐵
3	10YR4/3 にい黄褐色	砂質シルト	
4	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	
5	5Y4/1 黑色	粘土質シルト	グライ化

SE3

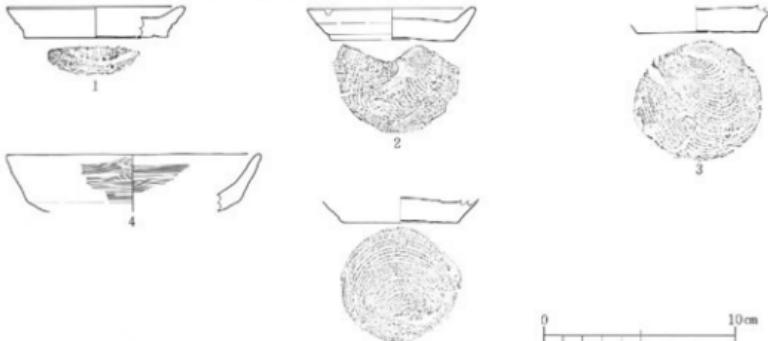
順序	色 調	堆 積 物	混入物・備考
1	2.5Y5/4 黄褐色	砂質シルト	
2	2.5Y3/1 黑褐色	粘土	炭化物
3	2.5Y4/2 墓灰黄色	粘土	
4	2.5Y2/1 黑色	粘土	
5	2.5G4/1 緑オリーブ色	粘土	グライ化

SE5

順序	色 調	堆 積 物	混入物・備考
1	10YR2/1 黑褐色	砂質シルト	粘土・炭化物
2	10YR2/1 黑褐色	粘土質シルト	
3	10YR4/3 にい黄褐色	砂	
4	10YR1/3 黑色	灰	イヌの糞、墓起漬の灰
5	10YR1/1 黑色	灰	イヌの糞、墓起漬の灰

SE7

順序	色 調	堆 積 物	混入物・備考
1	10YR4/2 墓灰褐色	砂質シルト	
2	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	
3	10YR4/2 墓灰褐色	砂質シルト	
4	10YR2/1 墓灰褐色	粘土質シルト	
5	10Y4/1 墓色	粘土質シルト	グライ化



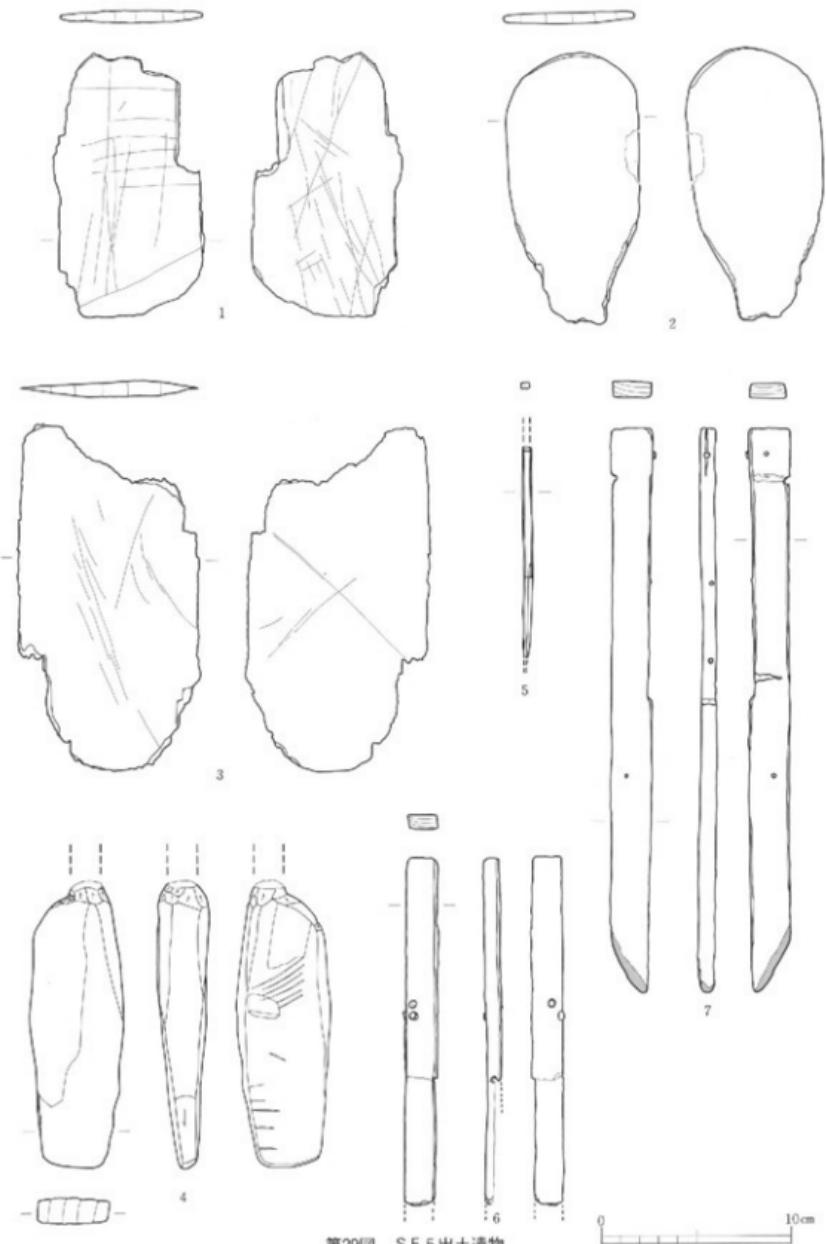
SE3

回収 番号	登 録 番 号	種 別	層位	法 量(cm)	外 面 調 査			内 面 調 査			備 考	写真 回数
					高 度	L 径	底 径	口 縁 部	体 部	底 部	口 縁 部	
1	G-3	三脚土器 底	5層	1.7 (9.4) 7.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転条切り削 底型	ナ	デ	ナ	ナ	12-4
2	G-1	三脚 底	5層	1.7 (8.9) 6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転条切り削 底型	ナ	デ	ナ	ナ	12- 1+5
3	G-2	三脚土器 底	5層	— 6.3	—	ロクロナデ	回転条切り削 底型	ナ	デ	ナ	ナ	12- 2+6
4	G-4	三脚土器 底	5層	— (13.3) —	ナデ	ナデ	—	ナ	デ	ナ	ナ	手づくね

SE4

回収 番号	登 録 番 号	種 別	層位	法 量(cm)	外 面 調 査			内 面 調 査			備 考	写真 回数	
					高 度	L 径	底 径	口 縁 部	体 部	底 部	口 縁 部		
5	G-3	三脚土器 底	4層	— 6.2	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転条切り削 底型	ナ	デ	12-7

第28図 S E 3・4 出土遺物



第29図 SE 5出土遺物

SE5 出土遺物

遺物番号	寸法(㎜)	出土層位	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	本取り	備考	写真回数
1	N-2	5層	(14.0)	7.7	0.7	柾目		-
2	N-1	5層	(14.6)	7.0	0.7	柾目	杓子	12-13
3	N-3	5層	(18.4)	9.7	0.7	柾目		-
4	N-4	5層	(15.5)	5.1	2.6	柾目	杓柄	12-14
5	N-8	5層	(11.3)	0.5	0.4	柾目	箆?	12-15
6	N-6	5層	(18.5)	1.6	0.8	柾目	木釘打ちこみ	12-18
7	N-5	5層	31.1	2.0	0.9	柾目	木釘打ちこみ 瓢箪	12-17

のみである。

5は土師質土器の皿で厚い底部が特長である。外面はロクロ調整で、内面にはていねいなナデ調整が観察される。

● SE5 井戸跡

遺構状況（第26図）

SK4 土坑を切った状態で確認された。平面形は円形を呈する。堆積物は5層に分けられ、そのうち3・5層は灰の集積層である。これらの灰は灰像分析の結果イネの稈・葉を起源とするものであることが判明した。

出土遺物（第29図）

木製品が7点出土した。土器類は皆無であった。

1・2・3は柾目材の薄い板状製品である。2は形態から杓子と推測される。4は有柄の製品である。5は箆と考えられる。6・7には木釘が打ち込まれている。用途は不明である。

● SE6 井戸跡

遺構状況（第27図）

調査区東壁部分で確認したもので、遺構の一部は調査区外に延びている。平面形はほぼ円形を呈するものと考えられる。断面形は上部が漏斗状に開く形状を示している。堆積物は5層に分けられるが、3層は灰の集積層である。この灰は灰像分析の結果イネの稈・葉を起源とするものであることが判明した。遺物は出土しなかった。

● SE7 井戸跡

遺構状況（第26図）

SI 2 穴住居跡を切る状態で確認された。平面形は円形を呈する。断面形は上部が漏斗状に開く形状を示し、堆積土は5層に分層された。遺物は出土しなかった。

——平安時代——

(1) 土坑

この時期に所属すると考えられるものは3基確認された。

● SK4 土坑

遺構状況（第30図）

中世のSE5井戸跡に切られる。平面形は橢円形を呈するものと推測され、堆積物は2層に分けられる。底面には凹凸が観察される。深さは20～30cm程度である。

出土遺物

土師器が数点出土した。すべて細片で図示はできなかったが、いずれもロクロ使用の壺と考えられ内面には黒色処理が施されている。

● SK5 土坑

遺構状況（第30図）

遺構の一部分をピットに切られ、小溝遺構B群1条を切る状態で確認された。平面形は円形である。堆積物は2層に分かれ、深さは約15cmである。

出土遺物（第31図）

土師器・須恵器の破片が比較的多く出土したが、図化し得たものは以下の3点である。

1は土師器の壺である。ロクロ成形で内面には黒色処理が施されている。2は須恵器の壺である。3は土師器でロクロ成形の壺である。

● SK8 土坑

遺構状況（第30図）

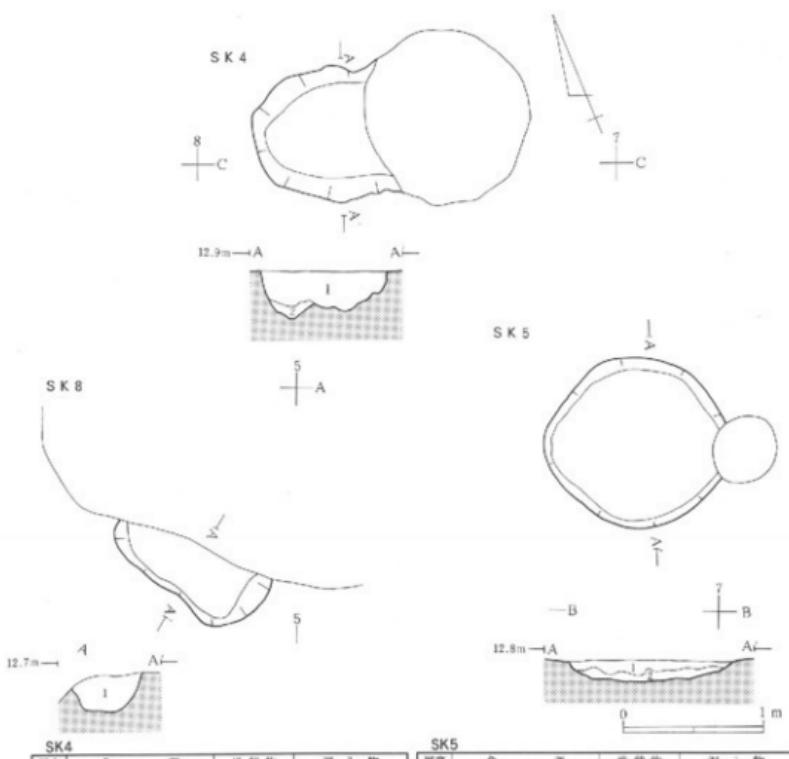
中世のSI5竪穴遺構に切られる状態で確認された。平面形はやや不整な橢円形を呈するものと推定される。堆積土は単層で深さは約25cmを計る。

出土遺物

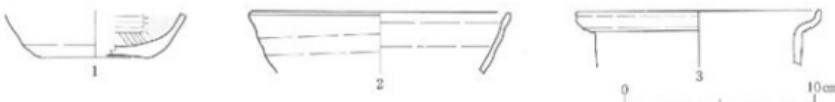
ロクロ成形の土師器が数点出土したが、細片であるために図示することはできなかった。器種には壺と甕がある。壺の内面には黒色処理が認められる。

(2) 小溝遺構群

調査区グリッドの3ラインから13ライン付近にかけて、規模の小さい溝跡が合計で24条検出された。これらは分布する範囲や方向性にまとまりが見とられ成因や機能に共通性が推測されるため、小溝遺構群として取り扱った。小溝遺構群は分布範囲の位置関係からA、Bの大きく2群に分けられ、それぞれがさらに方向別に分類される。

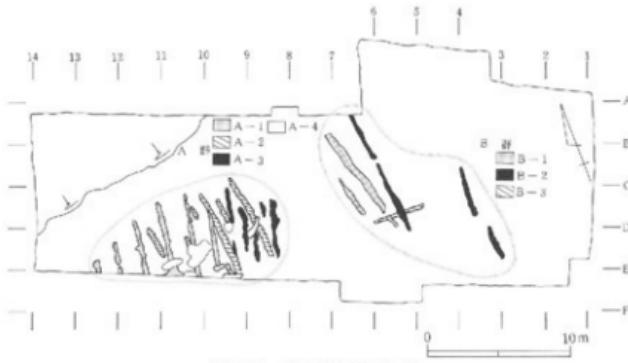


第30図 SK 4・5・8 平面・断面図



回数 番号	性 質	種 別	基 盤	法 量(cm)		外 部 測 定			内 部 実 測			考 察	写真 図版	
				高 度	口 径	底 径	口 部 形	体 部	底 部	口 部 形	体 部	底 部		
1 D-4	土器 破片	2層	-	-	(1.6)	-	ロクロナデ	厚壁	ヘラミガキ	黒	タマ	青	9-6	
2 E-90	陶器 片	2層	-	(1.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
3 D-5	土器 破片	2層	-	(1.6)	-	ロクロナデ	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	

第31図 SK 5 土坑出土遺物



第32図 小溝遺構群配置図

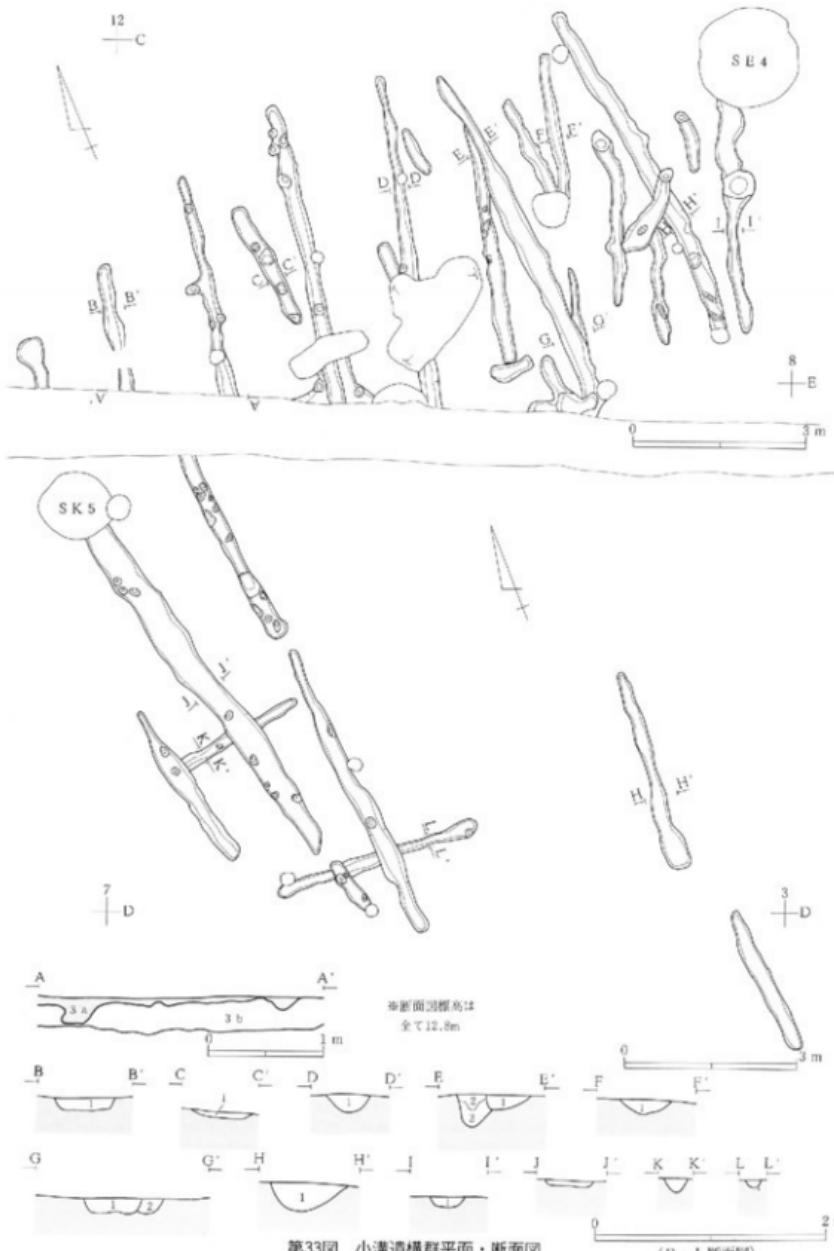
●A群

遺構状況（第33図）

A群は調査区グリッドの8から13ラインの南半部分で確認されたもので、19条の溝跡から構成される。この群においては数ヶ所の地点で、他遺構との重複関係がみられる。SB1 挖立柱建物跡、SE 4 井戸跡のほかいくつかのピットに切られている。A群の確認範囲は基本層3a層の分布範囲に限られている。3a層の直下層3b層は調査区グリッド8ライン付近から北西方向に下がるが、この3b層の低い部分が3a層の分布域である。個々の小溝遺構は基本的に3a層で埋まっており、従って遺構の検出は3a層を除去し終えた3b層上面である。A群の小溝遺構と3a層には、直接的な関連があるものと考えられる。A群は方向性によって1～4の4類に分類が可能である。1類は軸方向がN-10°-EからN-14°-Eを示し6条を数える。最も西寄りに分布するグループである。中軸間隔は120cm前後で、ほぼ等間隔に並んでいる。2類は方向がN-3°-WからN-9°-Wで、6条から構成される。中軸間隔は100～110cmである。3類は軸方向がN-18°-E前後でほぼ揃っており、中軸間隔も100cm程の等間隔で並んでいる。5条を数え、最も東寄りに分布している。4類は2条のみ確認された。軸方向はW-0°-EとN-60°-E前後で東西方向を示し、他の類と方向性を異にしている。1～4類とも溝の上端幅は20～40cm前後で、断面形は舟底形あるいはU字形を呈している。堆積物は基本的にすべて基本層3a層の単層で、直下の基本層3b層の小ブロックを含むものが多い。底面には起伏がみられ、ところどころにはピット状の落ち込みが検出された。なお、各類ともに堆積土が非常に類似しており確実な判断は困難であるが、重複関係から3-4-2-1の順に古くなるものとみられる。

出土遺物

出土遺物は非常に少なく、ロクロ成形の土器が2点出土したものである。双方ともに小



第33図 小溝造構群平面・断面図

(B-L断面図)

A群

断面位置	層序	色調	堆積物	流入物・備考	断面位置	層序	色調	堆積物	流入物・備考	
A-A'	3a	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト						
A-A'	3b	2.5Y3/4	黄褐色	砂質シルト	N-N'	3	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト 3b層の小ブロック多量	
B-B'	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	3b層の小ブロック	F-F'	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	
C-C'	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	G-G'	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	
D-D'	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	3b層の小ブロック	G-G'	2	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト
E-E'	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	H-H'	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト 3b層の小ブロック	
E-E'	2	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	I-I'	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト 3b層の小ブロック	

B群

断面位置	層序	色調	堆積物	流入物・備考	断面位置	層序	色調	堆積物	流入物・備考
J-J'	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	L-L'	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト 3b層の小ブロック
K-K'	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	3b層の小ブロック				

片であるために図示することはできなかったが、甕と内面黒色処理が施された坏である。

●B群

遺構状況（第33図）

調査区グリッド3から7ライン付近にかけて確認され、5条から構成される。SI4 竪穴住居跡を切っており、SB2 挖立柱建物跡・SK5 土坑に切られている。この群はその方向性から1～3の3類に分類される。1類は2条あり、軸方向はN-12°-W前後を示す。中軸間隔は130cm程度である。2類も2条で軸方向はN-3°-W、中間間隔は5m前後を計る。3類は東西方向を向くもので1条検出された。軸方向はN-82°-Eである。各溝の上端幅は20cmから最大で60cmであるが、平均的には30～40cmの間である。断面形は舟底形あるいはU字形を呈している。堆積土は各類ともに一様であるが、A類と同様に基本層3a層とみられる土が堆積している。基本的に単層で、3b層の小ブロックを含むものが多い。底面には起伏があり、ピット状の落ち込みも検出されている。なお、堆積土が非常に類似しており正確な判断は困難であるが、重複関係から3類が最も古いものと推測される。

出土遺物

ロクロ成形の坏が1点出土したのみである。小片であるために図化はできなかったが内面黒色処理が施されている。

奈良時代

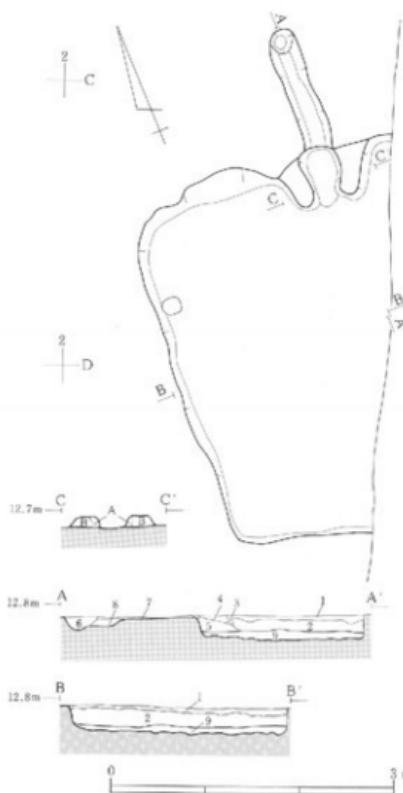
(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区東半部で合計4棟が確認された。他遺構との重複も少なく、SI4 竪穴住居跡を除いて遺存状況は比較的良好であった。

● SI1 竪穴住居跡

遺構状況（第34図）

※平面形 調査区の東部で確認されたが、遺構の東半は調査区外に延びており部分的な検出



層序	色 調	堆積物	参考・記入物
1	2.5Yn/2 灰灰黄色	シルト	
2	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	
3	2.5Y4/2 灰灰黄色	シルト	カマド堆積物 塗土・灰多量・しまり強
4	2.5Y4/2 灰灰黄色	シルト	カマド堆積物 塗土・灰多量・しまり強
5	2.5Y4/2 灰灰黄色	砂質シルト	カマド堆積物 塗土・炭化物・灰多量
6	2.5Y4/1 黄灰色	砂質シルト	煙道堆積物 炭化物
7	2.5Y4/1 黄灰色	砂質シルト	煙道堆積物
8	2.5Y4/2 灰灰黄色	シルト	煙道堆積物
9	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	塗り方埋土 黄褐色のシルトをブロックで含む・しまり強

層序	色 調	堆積物	参考・記入物
A	2.5Y4/2 灰灰黄色	砂質シルト	炭化物・内面は赤褐色の焼痕・しまり強
B	2.5Y5/2 灰灰黄色	砂質シルト	しまり強

第34図 SII 竪穴住居跡平面・断面図

である。平面形は隅丸方形を呈する。

*規模・方向 完全に検出された西辺およびカマドの位置から推定される全体的な規模は、3.5 × 4 m程度である。これから復元推定される煙道部分を除く床面面積は、約13.5m²（約4坪）である。中軸の方向はN-3°-Eでほぼ真北方向を向いている。

*堆積物 住居主体部およびカマド・煙道・掘り方を含めた全体の堆積物は9層に区分された。このうち主体部の堆積物である1・2層の層厚は15～20cm程度である。9層は床面を形成する掘り方

3 m 埋土で、よくしまっている。またカマド堆積物

ある5層には多量の灰が混入していたが、灰像分析の結果イネの稈・藁を起源とするものであることが判明した。このことからカマドの燃料として稻稈・稻藁が使用されていたことが推定される。

*床面 床面はほぼ平坦な状態で検出された。粘土等での貼り床はされておらず、掘り方埋土を叩き締めて構築されたものと考えられる。床面に柱穴および周溝は確認されなかった。

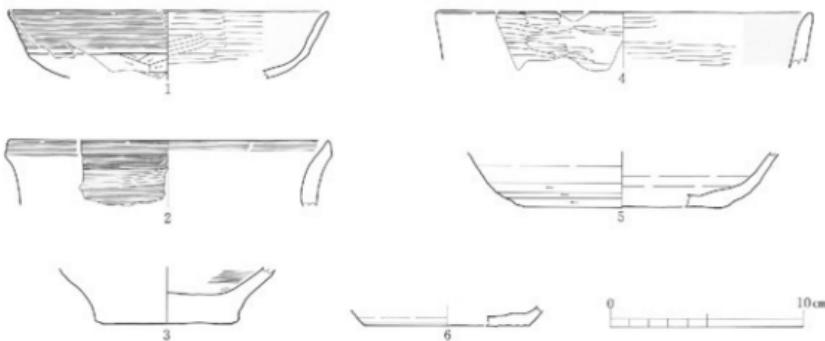
*カマド 北辺に作られている。残存する両袖外側底面の幅は最大で1.1m、内側の幅は20～30cmである。両袖ともに灰黄色の砂質シルトで構築されているが、内側には双方とも焼痕がみとめられる。煙道の検出全長は1.3mで幅は30cm前後である。先端部分で深くなり、端部にはピット状の落ち込みが確認された。

*掘り方 比較的荒く掘られており、底面には起伏が観察される。確認面からの深さは30cm程

度である。

出土遺物（第35図）

非クロ成形の土師器・須恵器が出土したがすべて堆積層中からで、床面からの出土はなかつた。図示し得たものは次の6点である。なお当住居跡堆積層出土須恵器の中に、SI2住居跡の遺



回収 番号	登録 番号	種別	層位	法 量(cm)	外 面 調 整			内 面 調 整			備 考	写真 回収
					高 さ	口 径	底 径	部 位	底 部	口 縁 部		
1	C-5	土師器 坏	2層	—	(16.0)	—	横ナデ		ヘラ削り	ヘ ラ ミ ガ キ		—
2	C-9	土師器 壺	5層	—	(16.0)	—	横ナデ	ナデ	—	横ナデ	—	—
3	C-8	土師器 壺	2層	—	—	6.6	—	摩滅	木焼痕	—	ヘラナデ	ヘラナデ
4	C-7	土師器 坏	2層	—	(19.0)	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘ ラ ミ ガ キ	黒 色 光 澤	—
5	E-47	須恵器 坏	2層	—	—	(30.0)	—	ロクロナデ	手持ヘラ削り	ロ ク ロ ナ デ		—
6	E-48	須恵器 坏	2層	—	—	(8.0)	—	ロクロナデ	回転ヘラ切り 手持ヘラ削り	ロ ク ロ ナ デ		—

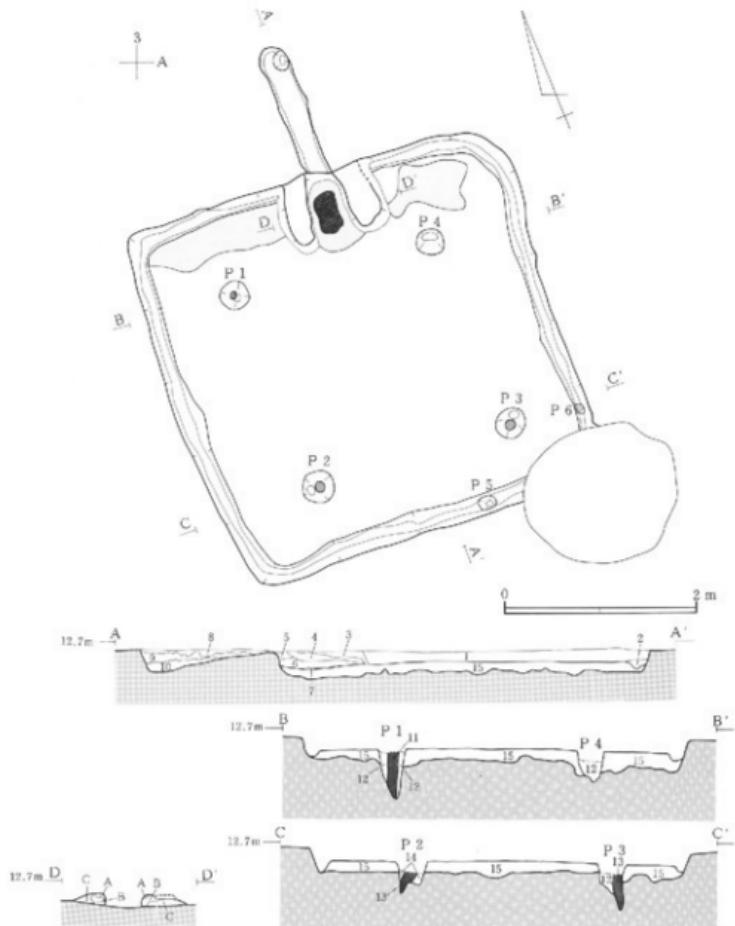
第35図 SI1 穴穴住居跡出土遺物

物と接合関係を持つものがあり、両者の埋没時期にあまり隔たりのなかったことが推測される。

1・4は土師器で内面黒色処理の坏である。1は体部と底部の境に軽い段を持ち、底部は欠いているものの丸底と推定される。4は口縁部の破片資料であるが、椀形の器形が推測される。内外面ともヘラミガキが観察される。2はカマド堆積物から出土した土師器で、壺の口縁部資料である。内外面とも口縁部横ナデ、体部外面はナデ調整である。3は土師器壺の底部資料である。5・6は須恵器の坏である。それぞれ底部の様相は次のとおりである。5は切り離し不明で手持ちヘラ削り。6は回転ヘラ切りの後、手持ちヘラ削りを受けている。

● SI2 穴穴住居跡

遺構状況（第36図）



層序	色 調	堆 積 物	場 所	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
1	2.5Y2/2 黒灰黄色	砂質シルト	炭化物。錆石粒、黄褐色のシルトをブロックで含む	2.5Y2/2 黒灰黄色	2.5Y4/2 黑灰黄色	2.5Y3/2 墓 オリ	10YR5/3 に よい黄 褐色	10YR4/2 黄 褐色	7.5YR4/4 海 色	10YR4/3 に よい黄 褐色	2.5Y4/2 黑 灰黄色	7.5YR4/3 墓 オリ	10YR4/3 黑 灰黄色	2.5Y4/2 黑 灰黄色
2	2.5Y4/2 墓灰黄色	砂質シルト	同属地植物											
3	2.5Y4/2 墓灰黄色	砂質シルト	カマド堆積物 塵土、灰少葉											
4	10YR3/3 黑褐色	砂質シルト	カマド堆積物 滅土、炭化物											
5	2.5Y5/2 墓灰黄色	砂質シルト	カマド堆積物 滅土、灰多葉											
6	2.5Y4/2 墓灰黄色	砂質シルト	カマド堆積物 滅土、灰、炭化物を多量に含む											
7	7.5Y4/3 海色	砂質シルト	カマド堆積物 燐漠面? + しまり強											
8	10YR3/3 黑海色	砂質シルト	煙道堆積物 炭化物											
9	10YR2/2 黑褐色	砂質シルト	煙道堆積物 炭化物多量											
10	10YR3/2 黑海色	砂質シルト	煙道堆積物 炭化物											

第36図 S12 窓穴住居跡平面・断面図

*遺存状況・平面形 調査区の北東コーナー付近で確認された。遺構の南東角をわずかに井戸跡によって切られているが、ほぼ完全な検出である。今回確認された4棟の竪穴住居跡うち、遺存状況は最も良好である。平面形は整った隅丸の方形を呈する。

*規模・方向 住居跡の規模は東西軸が4.15m、南北軸はほぼ4mを計る。これから復元推定される煙道部分を除く床面面積は、約16.6m²(約5坪)である。中軸の方向はN-I'-Eでほぼ真北方向を向いている。

*堆積物 住居主体部および周溝・カマド・煙道・掘り方を含めた全体の堆積物は15層に区分された。このうち主体部の堆積物である1層の層厚は10~15cm程度である。15層は床面を形成する掘り方埋土で、よくしまっている。またカマド堆積物の6層には多量の灰が混入していたが、灰像分析の結果イネの穀・葉を起源とするものであることが判明した。このことから、カマドの燃料として稻穀・稻藁が用いられていたことが推定される。

*床面 ほぼ平坦な状態で検出された。粘土等での貼り床はされておらず、掘り方埋土を叩き締めて構築したものと考えられる。なおカマド両袖脇の床面には、カマドからのものと考えられる灰が分布している。

*柱穴 床面の対角線上に4基の柱穴が確認された。柱間寸法は北辺のP1~P4が2m18cm、南辺P2~P3が2m8cm、西辺P1~P2が2m26cm、東辺P4~P3が2m18cmである。各柱穴間の寸法には若干のばらつきがみられるものの、ほぼ方形に配置されている。掘り方はいずれも整った円形を呈しており、深さは34~52cmを計る。堆積物は灰黄色および黄褐色のシルトである。柱痕跡はP1・P2・P3で確認されたが、円形で直径は10~20cmである。

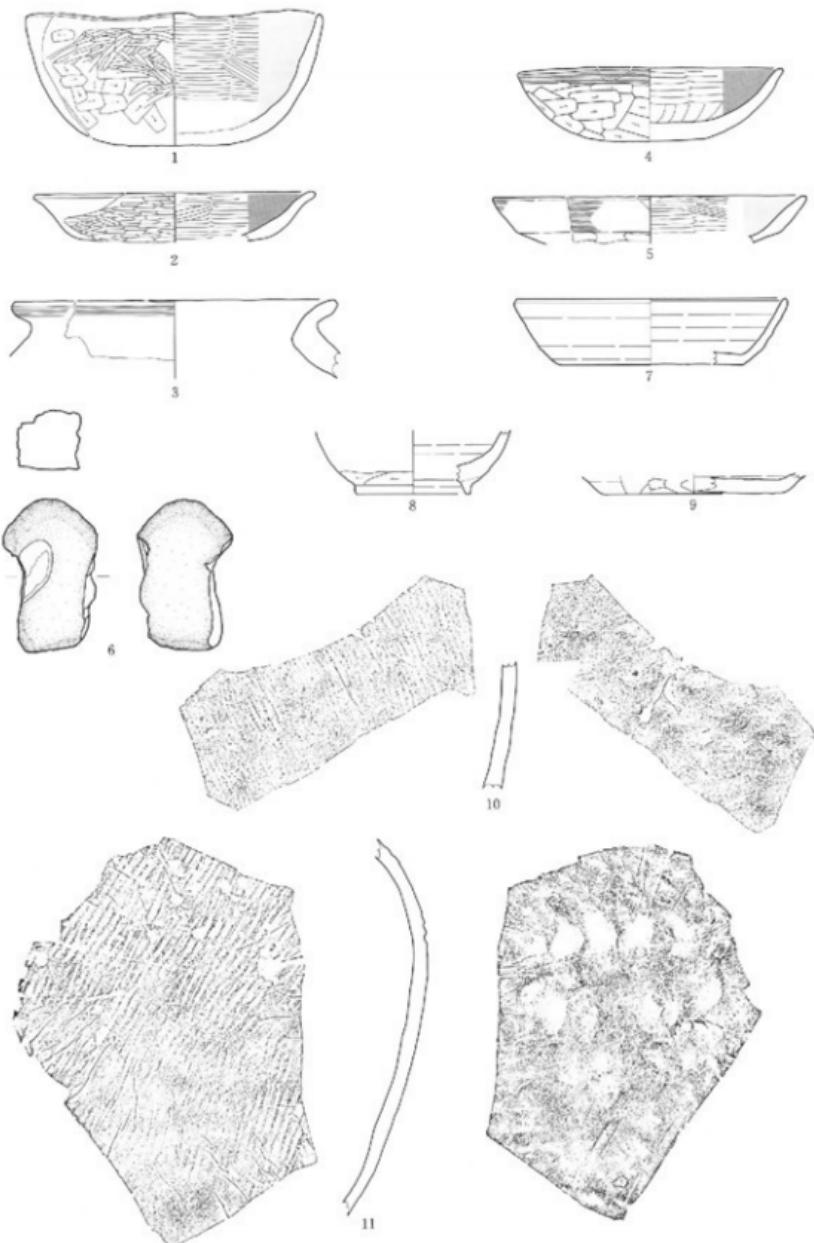
*カマド 北辺のほぼ中央に作られている。残存する両袖外側底面の幅は1m15cm、内側の幅は40cm前後である。袖はどちらも褐色・黄褐色のシルトで築かれており、内側には著しい焼痕がみとめられた。カマド底面の中央部分は長軸40cm、短軸20cm程度の稍円形に強く焼けており、焼土化している。煙道の検出全長は1m45cm、幅は25cm前後である。深さは先端部に向かって増していき、最深で24cmを計る。なお先端部にはピット状の落ち込みが確認された。

*周溝 床面四周に巡っている。北辺のカマド部分でも袖の除去後にその連続が確認され、周溝を掘削した後でカマドの構築がなされたらしい。溝の幅は20cm前後で深さは10cm程度、堆積物は灰黄色のシルトである。なお周溝底面で2基のピットが確認されたが、柱痕等はみとめられずその性格は判然としない。

*掘り方 比較的荒く掘られており、底面にはかなりの起伏がみられる。確認面からの深さは15~40cmである。

出土遺物(第37図)

土師器・須恵器・石製器などが出土したが、堆積層中のものが多く床面からの遺物は少なかつ



第37図 S1 2号穴住居跡出土遺物

回収 番号	主 要 部 位	種 別 名	標 記 番 号	部 位	法 量(cm)			外 面 調 整			内 面 調 整			備 考	写 真 図 版
					基底 径	高 度	底 部	口 縁 部	体 部	底 部	口 縁 部	体 部	底 部		
1 C-31	土師器 环	底面	7.1	(15.5) (4.8)	ヘラミガキ	ヘラ削り	ヘラ削り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色	黒色	黒色	8-18	
2 C-14	土師器 环	1層	-	(15.0)	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色	黒色	黒色	-	
3 C-13	土師器 环	1層	-	(17.0)	-	横ナデ	-	-	-	-	-	-	-		
4 C-10	土師器 环	底面	4.0	14.3	-	横ナデ	ヘラ削り	ヘラ削り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色	黒色	黒色	9-4	
5 C-11	土師器 环	1層	-	(16.6)	-	横ナデ	-	ヘラ削り	-	ヘラミガキ	黒色	黒色	黒色	-	
7 E-60	須恵器 环	1層	(3.5)	(14.3) (9.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ削り	ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
8 E-51	須恵器 环	1層	-	(6.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	11-1	
9 E-61	須恵器 环	1層	-	(9.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	-	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
10 E-53	須恵器 环	1層	-	-	-	平行叩き	-	-	-	当て目	当て目	当て目	当て目	-	
11 E-73	須恵器 环	1層	-	-	-	平行叩き	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	10-3	
回収番号	登録番号	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備 考								写真図版	
6	M-1	床面	8.1	5.1	3.2	両側面に溝り、變底地?								12-10	

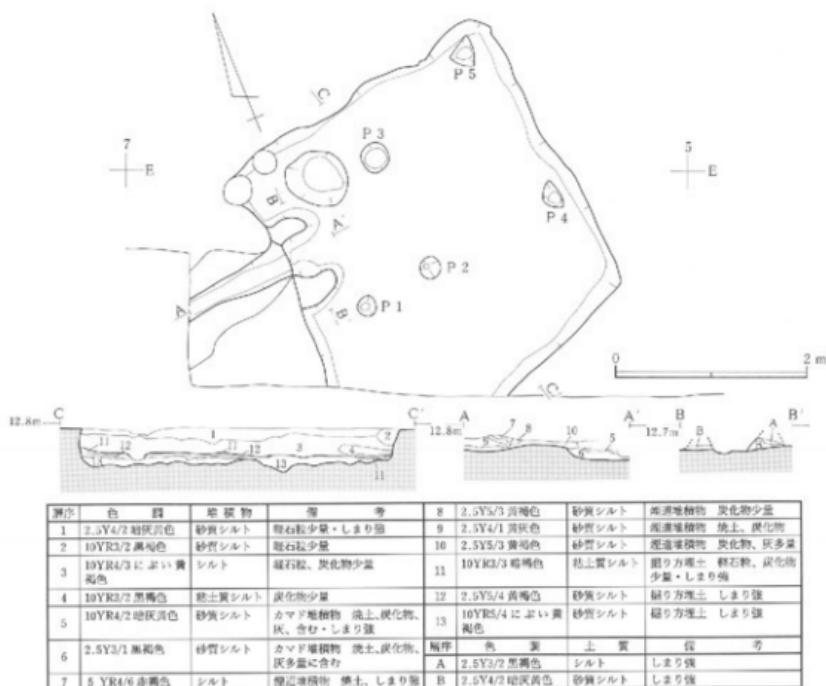
た。図化のできたものは以下の11点である。

1・2・4・5は土師器で非ロクロ成形の坏である。いずれも内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。1は床面からの出土である。大ぶりで楕円形の器形を呈し平底である。外面全体にヘラ削りを施した後、ヘラミガキで仕上げている。2は口縁部が外反し、丸底風の平底である。外面の調整はヘラミガキが主体である。4は床面からの出土である。口縁部は外傾しながら立ち上がり、丸底風の平底である。外面の調整は口縁部が横ナデ、体・底部はヘラ削りである。5は体部と底部の境に稜がみられ、丸底と思われる。外面は口縁部横ナデ、底部はヘラ削りである。3は土師器の壺である。破片資料であるために全体の様相は知り得ないが、口縁部に「く」字状の屈曲がみられる。外面口縁部には横ナデが観察される。7は須恵器の坏である。回転ヘラ切りの後、手持ちヘラ削りが施されている。なお推定口径は14.3cm、底径は9.8cmである。9は須恵器坏の底部資料である。切り離しの後ナデ調整を受けている。8は須恵器の壺と考えられる。底径は6cmと小型である。10・11は須恵器壺の体部資料である。いずれも外面は平行叩きで、内側は当て具痕を軽くすり消している。なお10はSI1 穫穴住居跡堆積物中出土の資料と接合した。6は石製品である。石材は凝灰岩と思われ脆弱である。両側は抉られている。用途は判然としないが、何らかの重りなどが想定される。

● SI3 穫穴住居跡

遺構状況（第38図）

※遺存状況・平面形 調査区の南端部で確認し部分的な検出であったため、調査区の一部拡張を行なったが遺構の全体を検出することはできなかった。煙道の先端部分と、南西コーナー部



第38図 S13 穴住居跡平面・断面図

分は調査区外に延びている。平面形はやや不整な隅丸方形である。

*規模・方向 遺構の規模は東西軸3.2m、南北軸が3.25mを計る。これから復元推定される煙道部分を除く床面面積は、約10.4m²(約3.2坪)である。中軸方向はN-82°-Eで、真東西に近い方向を示している。

*堆積物 居住主体部およびカマド、煙道、掘り方を含めた全体の堆積物は13層に区分された。このうち1~4層は主体部の堆積物で、床面までの層厚は20~30cm前後である。11~13層は床面を形成する掘り方埋土である。11層が粘土質シルト、12~13層は砂質シルトでいずれもよくしまっている。またカマド堆積物である6層には多量の灰が含まれるが灰像分析の結果この灰はイネの穀・藁およびオギ・ヨシを起源とするものであることが判明した。のことから、これらのものがカマドの燃料として用いられていた可能性が考えられる。

*床面 ほぼ平坦な状態で検出された。粘土等による貼床はされておらず、掘り方の埋土を叩き締めて構築したものと思われる。

*柱穴 床面では5基のピットが確認された。柱穴の配置はあまり明瞭ではないがP2・P3が柱穴に相当するものと考えられる。この他P1・P4・P5にも支柱穴の可能性が想定される。いずれのピットも柱痕跡は明らかではなかった。P2・P3の柱間寸法は1.3mを計る。双方とも掘り方は比較的整った円形を呈し、深さはP2が25cm、P3が20cmである。

*カマド 西辺のやや北寄りに作られている。残存する両袖外側底面の幅は最大で1m10cm、内側の幅は24~50cmである。袖部の遺存状況は双方とも良好とはいはず南側の袖は床面から高さ5cm、北側では12cm程度の残存である。両袖とともに黒褐色のシルトおよび灰黄色の砂質シルトで構築されている。煙道の検出全長は1m20cmである。幅は最大部分で50cmで先端部に向かって狭くなり、最狭部で20cmを計る。深さは先端部に向かって増していく。最浅部で4cm、最深部では17cm程度である。

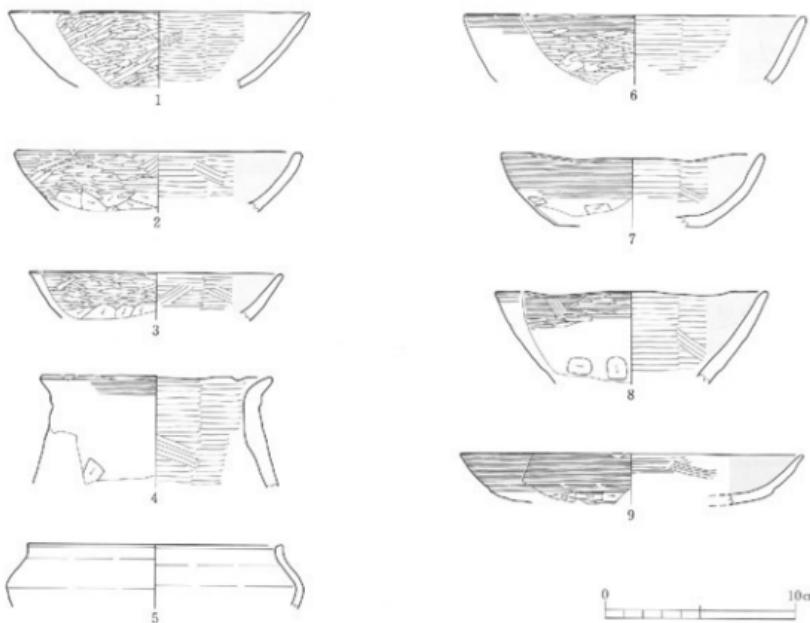
*その他の施設 床面で土坑が1基検出された。平面形は長軸70cm、短軸56cm程度の不整な梢円形を呈している。深さは20cm程度で堆積物は黄褐色シルトの単層である。遺物の出土もなく、性格は判然としない。なお周溝は確認されなかった。

*掘り方 荒く掘られており、底面には著しい起伏がみられる。確認面からの深さは33~46cmである。

出土遺物（第39図）

土師器・須恵器が出土したが、いずれも堆積層中からの出土である。図示し得たのは次の11点である。なお出土した土師器の中に、SI1堆積層出土の資料と接合関係を持つものがある。このことから両者の埋没時期にあまり隔たりのないことが推測される。

1~3・6~9は土師器で非ロクロ成形の环である。いずれも内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。1・2・3は外面の口縁部分に横ナデがみられず、ヘラミガキが主体の資料である。口縁部はいずれも外傾ぎみに立ち上がり、底部の様相は欠損のため判然としない。6・8は口縁部が横ナデで、最終的な調整としてヘラミガキが加えられている。底部の状況は欠損のため不明である。7はほぼ平底となっている。外面の横ナデは口縁部から体部のほぼ中ほどまでおよび、それ以外は削り調整となっている。なおこの資料はSI1堆積層出土のものと接合した。9は体部下位に段を持つもので平底に近い丸底である。口縁部から段まで横ナデで、それ以下ではヘラ削りが施されている。4は土師器で小型の甕である。全体の様相は知り得ないが口縁部の屈曲は弱く、外反ぎみに立ち上がっている。体部にはやや張りのある形態が推測される。外面は摩擦のため明瞭ではないが口縁部は横ナデ、体部にはヘラ削りが観察される。内面には全体にヘラミガキが施されている。5は須恵器の短頸壺である。肩部に張りがあり、薄手で小型なものである。



区分番号	器種番号	種別	部位	法量(cm)			外 西 圓 基			内 口 調 壁			備考	写真番版
				基高	口徑	底径	口縫部	体部	底部	口縫部	体部	底部		
1 C-25		土師器 环	3周	—	(16.0)	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	黒色	黒色	—	—
2 C-23		土師器 环	3周	—	(14.6)	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	黒色	黒色	—	—
3 C-26		土師器 环	3周	—	(13.4)	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	黒色	黒色	—	—
4 C-17		土師器 壺	3周	—	(12.2)	—	横ナデ	ヘラ削り	—	ヘラミガキ	黒色	黒色	—	—
5 E-68		瓦	1周	—	(13.9)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	—	—	—	10-9
6 C-24		土師器 环	4周	—	(18.0)	—	横ナデ	ヘラ削り ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	黒色	黒色	—	—
7 C-21		土師器 环	4周	3.9	(15.8)	(7.7)	横ナデ	ヘラ削り	—	ヘラミガキ	黒色	黒色	—	9-5
8 C-28		土師器 环	3周	—	(14.4)	—	横ナデ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	黒色	黒色	—	—
9 C-18		土師器 环	3周	—	(18.2)	—	横ナデ	—	ヘラ削り	ヘラミガキ	黒色	黒色	—	—

第39図 S1-3竪穴住居跡出土遺物

● SI4 竪穴住居跡

遺構状況（第40図）

*遺存状況・平面形　調査区の南東コーナー付近で確認された。南辺の一部を搅乱に切られており、遺構の全体を検出することはできなかった。平面形は隅丸方形である。

※規模・方向 完全に検出された北辺・東辺の長さはそれぞれ4.6m、4.55mで、これから推定復元される床面積は約21m² (6.3坪) である。中軸の方向はN-17°-Wである。

※堆積物 5層に区分された。主たる埋没土である1層は灰黄色の砂質シルトである。5層は掘り方の埋土で、黒褐色の粘土質シルトである。縛まりが強く、床面となる層である。

※床面 平坦な状態で検出された。粘土等での貼床はみとめられず、掘り方埋土を叩き締めて構築したものと思われる。

※柱穴 床面の対角線上に4基の柱穴が確認された。このうちP4だけでは床面で検出できず、掘り方中で確認したものである。またP3は中世のピットに一部を切られている。柱間寸法は北辺のP1-P4が2m35cmで、南辺P2-P4・西辺P1-P2・東辺P3-P4はいずれも2m40cmである。各柱穴間の寸法はよく揃っており、整った方形に配置されている。掘り方はP3のみ楕円形で、他はほぼ円形を呈する。深さは36~42cmである。堆積物はいずれも灰黄色の砂質シルトである。柱痕跡はどの柱穴でも確認されなかった。

※カマド 袖や煙道などカマドに関連する施設は残存しなかったが、北辺のやや東寄りに一方の袖、およびカマド内部の燃焼面と考えられる痕跡を検出した。袖の痕跡と考えられるのは図中Ⓐの部分である。この範囲にのみ床面の土とは異なる灰黄色のシルトがみられ、高さは失われているものの袖基底部分の残存と想定される。図中Ⓑの範囲は床面が焼けて焼土化しており、カマド燃焼部の痕跡とみられる。なお煙道は後世の削平で失われたものと思われ、確認することができなかった。

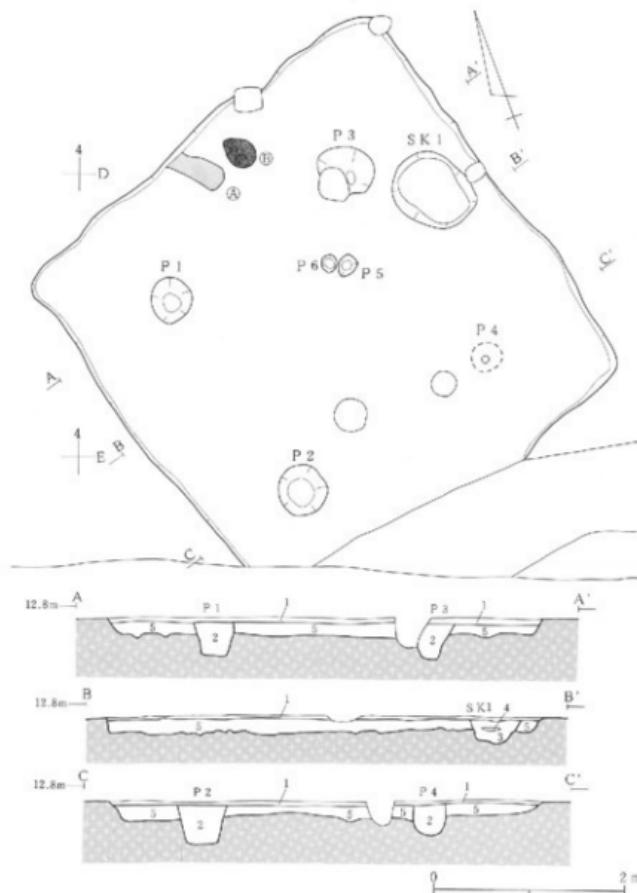
※その他の施設 床面で土坑1基とピット2基を検出した。土坑は平面形が楕円形を呈する。長軸90cm、短軸70cmで深さは25cm程度である。堆積物は黄褐色粘土質シルトの單層であるが、層中に黒色の灰がブロックで混入していた。土器ほか遺物の出土ではなく、遺構の性格については判断がつかない。ピットは床面の中央部分で2基が近接して確認された。P5が直径22cm、深さ15cm、P6は直径18cm、深さ14cmである。双方ともに柱痕跡は確認されない。遺構の性格についても判然としない。なお周溝は検出されなかった。

※掘り方 荒く掘られており、底面には起伏がみられる。確認面からの深さは12~22cmである。
出土遺物 (第41・42図)

土師器・須恵器・石製品などが出土した。床面からものが多く、図化のできた以下の12点全てが床面の資料である。

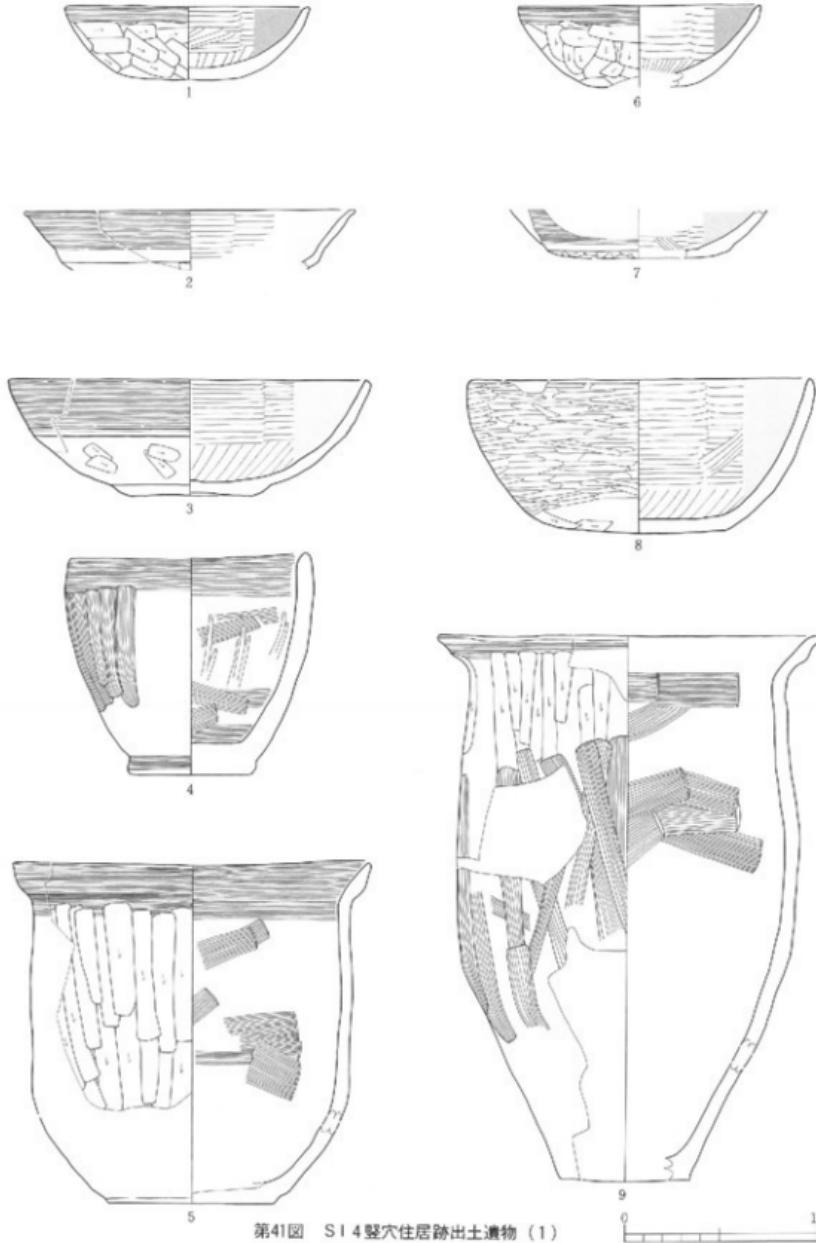
1~3・6~8は非ロクロ成形、内面黒色処理の土師器坏である。1・6は体部に段、稜等のみられないものである。外面の調整は口縁部が横ナデで、体・底部にはヘラ削りが施されている。2は有段で丸底、口縁部はほぼ直線的には外傾して立ち上がる。外面は口縁部が横ナデで、底部はヘラ削りである。7は体部下端に軽い段を持ち、ほぼ平底である。口縁部に横ナデ、

底部にヘラ削りが観察される。3は口縁部の立ち上がりが内湾ぎみで、体部中位に沈線がめぐっている。また体部下端に高台状の稜がつき、平底である。8は大ぶりで橢形の器形を呈し、平

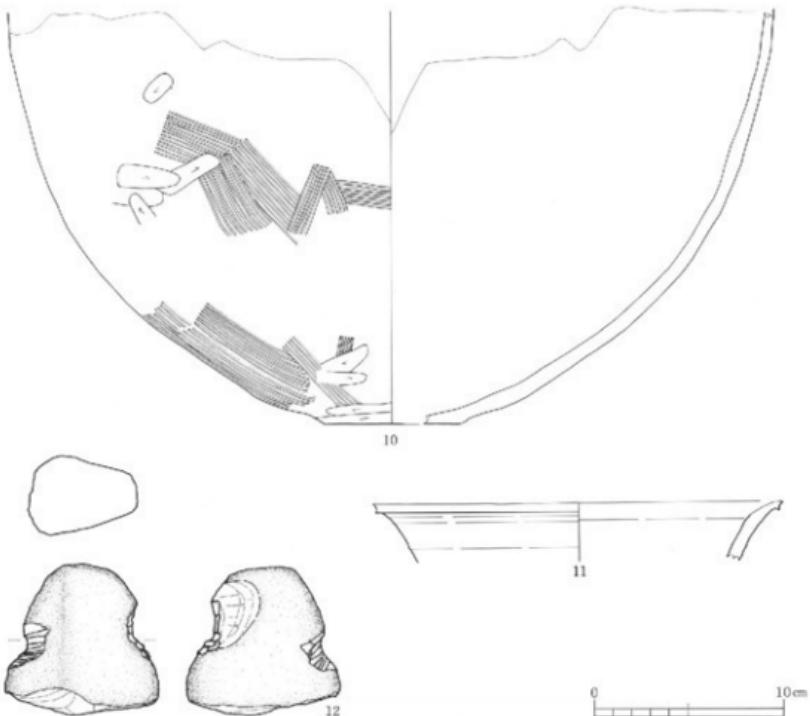


序号	色 調	地 質 物	層 名	序号	色 調	地 質 物	層 名
1	2.5Y4/2暗灰褐色	砂質シルト	硅石粒、炭化物少量・しまり強	4	10YR2/1無色	灰	SKI堆積物
2	2.5Y4/1灰黄色	砂質シルト	柱穴堆積物	5	2.5Y3/2灰褐色	粘土質シルト	塊り方塊土、黄褐色の砂質シルトを小さいブロックで含む しまり強
3	10YR4/3にぼい黄 褐色	粘土質シルト	SKI堆積物				

第40図 S14豎穴住居跡平面・断面図



第41図 S14 積穴住居跡出土遺物 (1)



図版番号	形 種 別	種 别	部位	法 量 (cm)			外 表 調 査			内 面 調 査			写真図版
				高さ	口径	底径	口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部	
1 C-32	土師壺 外	灰陶	床面	6.0	13.0	4.3	横ナデ	ヘラ削り	ヘラ削り	ヘラミガキ	黒色	丸底	9-3
2 C-46	土師器 外	灰陶	床面	—	(17.4)	—	横ナデ	—	ヘラ削り	ヘラミガキ	黒色	丸底	—
3 C-34	土師壺 外	灰陶	床面	4.2	18.8	6.6	横ナデ	—	ヘラ削り	ヘラミガキ	黒色	丸底	9-1
4 C-35	土師器 外	灰陶	床面	11.7	13.6	6.5	横ナデ	ヘラナデ	ヘラ削り	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラナデ	9-8
5 C-37	土師器 外	灰陶	床面	18.2	(19.2)	(8.8)	横ナデ	ヘラ削り	摩減	横ナデ	ヘラナデ	摩減	9-11
6 C-39	土師壺 外	灰陶	床面	4.4	13.0	(5.0)	横ナデ	ヘラ削り	ヘラ削り	ヘラミガキ	黒色	丸底	—
7 C-41	土師器 外	灰陶	床面	—	—	(9.8)	横ナデ	—	ヘラ削り	ヘラミガキ	黒色	丸底	—
8 C-33	土師器 外	灰陶	床面	8.2	17.9	8.3	ヘラミガキ	ヘラ削り	ヘラ削り	ヘラミガキ	黒色	丸底	—
9 C-36	土師器 外	灰陶	床面	29.5	29.4	(7.0)	横ナデ	ヘラナデ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	9-10
10 C-38	土師器 外	灰陶	床面	—	—	(7.0)	—	ハケメ	ヘラ削り	—	摩減	—	9-9
11 E-74	土師器 外	灰陶	1 様	—	(11.2)	—	コクロナデ	コクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—
図版番号	遺物番号	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備 考	写真図版						
12	M-2	床 面	8.0	8.1	4.1	肉桂色に染り、模様器?	12-11						

第42図 S1 4壁穴住居跡出土遺物 (2)

底である。内外面ともにヘラミガキ主体であるが、外面底部にはヘラ削りが観察される。4は鉢形を呈する。口縁部は内湾しながら立ち上がる。内外面とも口縁部は横ナデで体部は両面とともにナデ調整であるが、内面には部分的にまばらなヘラミガキが施される。底部外面はヘラ削りである。5は土師器の壺である。体部には張りがなく、ほぼ直立する。口縁部は内外面とも横ナデ、体部は外面ヘラ削り、内面はナデ調整である。9は土師器で長胴の壺である。体部にゆるい張りがあり、口縁部は「く」字状に屈曲する。外面は口縁部横ナデ、体部はヘラ削りおよびナデ調整である。内面にはナデ調整が観察される。10も土師器の壺である。体部は球形で底径が小さい。外面調整はハケメおよびヘラ削りである。11は須恵器で壺の口縁部資料である。12は石製品である。石材は凝灰岩と思われ脆弱である。両側に抉りが入っている。用途は判然としないが、重りなどが想定される。

3 4層の遺構と遺物

4層上面では溝跡および河川跡が、各1条づつ検出された。所属時期はいずれも古墳時代と考えられる。

(1) 溝 跡

● SD2 溝跡

遺構状況（第43図）

調査区内を東西方向に斜行する状態で確認された。西端部分をわずかにSR1に切られている。検出全長は20m、上端幅は2m前後、下端幅は0.7~1.2mである。深さは58~50cmであるが東方向に緩やかに下がっている。方向はN-85°-Wである。堆積物は8層に区分されたが、5層以下は砂層である。なお最下層の8層中にはφ1~2cmの円礫の混入がみられる。

出土遺物（第44図）

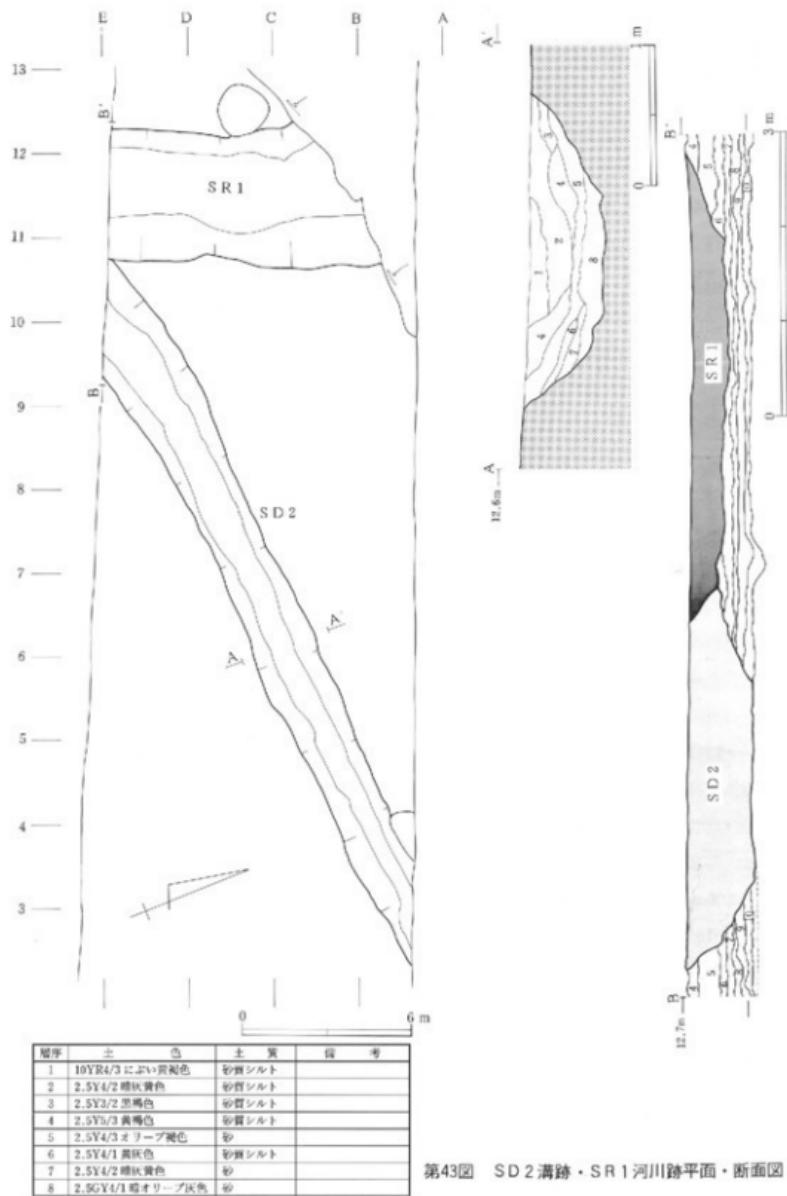
遺物は堆積層5層中から土師器壺が1点出土したのみである。口縁部はくびれて外反し丸底である。外面の調整は横ナデ・ハケメ・ヘラミガキ・ヘラ削りである。内面はヘラナデ・ヘラミガキである。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。

(2) 河 川 跡

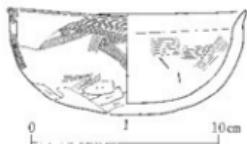
● SR1 河川跡（第43図）

遺構状況

調査区の西端部を、南北に横断する状態で確認された。SD2を切っており。北端部分は擾乱に切られている。検出全長は6m、上端幅4.3~5.2m、下端幅2.1~2.9mである。深さは23~34cmであるが、ごく緩やかに北方向に下っている。方向はN-26°-Wである。堆積物は粗い砂の單層であるが、全体的にφ3~5cmの円礫が混入している。



第43図 SD 2溝跡・SR 1河川跡平面・断面図



回収番号	遺物名	種類	形態	層位	法面(㎝)		外 出 斧 鋸			内 面 調 査			備考	参考図版	
					最高	1往	底面	口縁部	体部	底面	口縁部	体部	底面		
1	C-45	土器	环	7層	5.5	12.8		横ナデ	ハケメ へう割り へうさガキ	へう割り	ナデ	へうさガキ	—	—	9-2

第44図 SD 2溝跡出土遺物

遺物は出土しなかった。

4 8層の遺構と遺物

8層上面では畦畔を伴う水田遺構を確認した。所属時期は弥生時代と考えられる。

(1) 水田跡

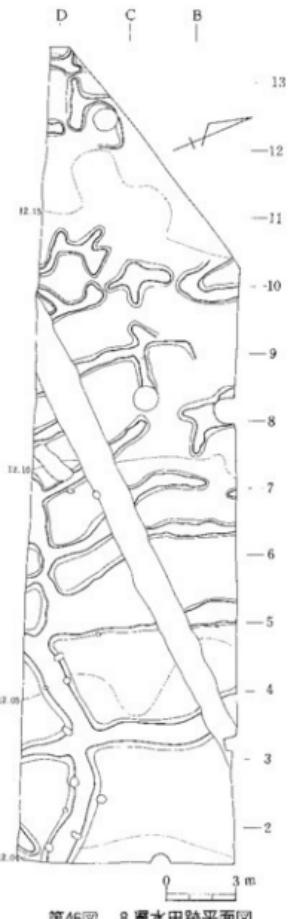
● 8層水田跡

遺構状況（第45・46図）

*検出・遺存状況 畦畔で区画された推定24区画以上の水田区画が検出された。畦畔の検出面は自然堆積と考えられる7層の下面である。廃棄後の崩落や流出によるものか、畦畔の遺存状況は不良で、本来はこれら以外にも畦畔が存在したものと考えられる。従って8層水田跡の全体的な様相が把握されたわけではなく、設定した水田区画については検出された畦畔の配置をもとに想定したものである。なお、この水田跡に伴う水路は確認されなかった。

*畦畔 弯曲したり断片的であるものが多く、直線的に整然とした状態のものではない。しかし大まかな方向性は看取られ、等高線に沿う南北方向のものと、これにはほぼ直交する東西方向のものとがある。このうち6グリッド以東では比較的整った配置を示し連続性も認められるが、これより西側の地区では不規則な様相を呈している。畦畔は耕作土と同じ8層を盛り上げて作られている。下端幅は0.5~3.6mまでのものがみられるが、1m前後のものが主体をなしている。耕作土上面との比高差は5cm程度である。なお直下層9層上面で、当水田跡に伴う擬似畦畔Bは確認されなかった。

*水田区画 検出された畦畔の配置から①~⑩の水田区画を想定した。確認した畦畔は部分的であったり断片的であるものが多く、ほぼ完結した区画の検出は⑩のみである。畦畔のあり方



第46図 8層水田跡平面図

の資料である。全体的な様相は知り得ないが、体部に張りのある器形が考えられる。頸部の無文帯はヘラミガキ、体部には地文として縄文（LR）が施文されているが、無文帯との境界は縄文端部を直線的に揃えている。2は細片であるために器種は不明であるが、弥生土器と考えられる。外面に縄文（RL）が観察される。3・4は管玉で材質は碧玉である。いずれも両方向からの穿孔とみられる。

から推定される全体的な区画の形状は①・④・⑥・⑦・⑨・⑩・⑪などのように方形を基調とするものが多いが③・⑧・⑫・⑬のような不整な形状を示すものもあり、統一的な規格性はみられない。水田面の標高は12.17～12.04mで、平均勾配は5.2cm/10mである。調査区全体では13cm程の比高差があるが、5グリッドライン以東では傾斜が緩やかになる。1～5グリッドラインの勾配は1cm/10m、4～13グリッドラインの勾配は12cm/10mである。水田面の勾配と水田区画の関係をみると、勾配が緩やかになる5グリッドライン以東では①・④・⑥のようなより大きな区画が形成され、これ以西では狭隘化する傾向がうかがわれる。

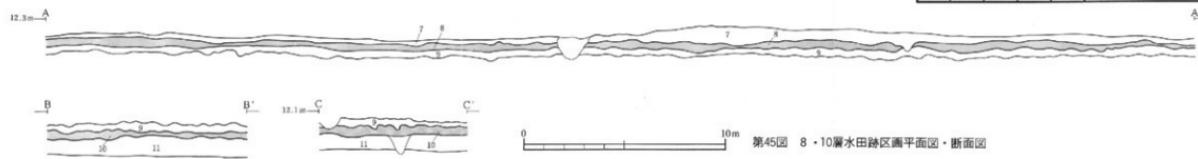
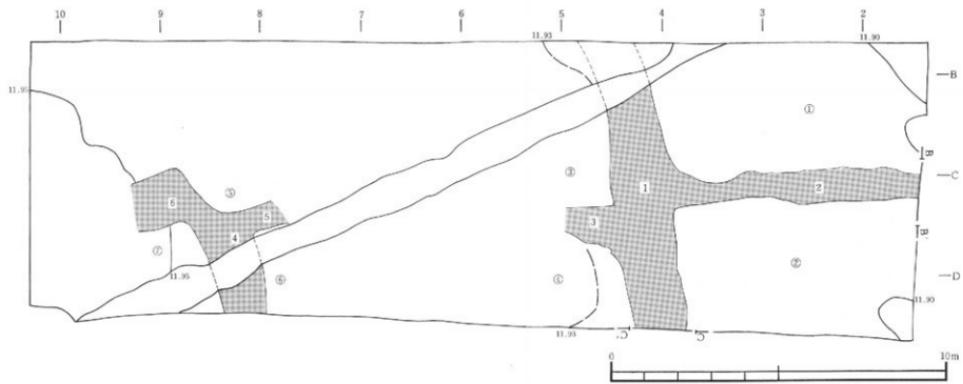
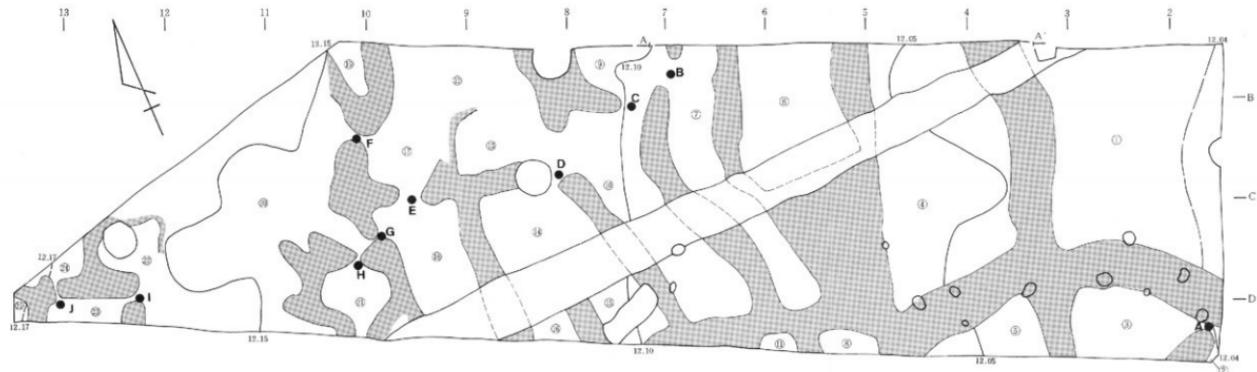
※水口 A～Jの10ヶ所で畦畔の切れる所が確認された。これらには水口の可能性が想定されるが、畦畔の遺存状況からみると崩落や流失とも考えられ認定は差し控えたい。

※耕作土 耕作土は基本層8層で黒褐色の粘土である。層厚は8cm前後で層の下面には緩やかな起伏が観察される。

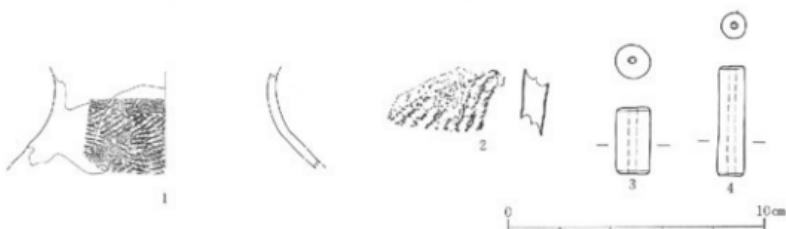
出土遺物（第47図）

耕作土中から弥生土器・石製品が出土したが量的にはわずかで、図示し得たのは以下の4点である。

1は弥生土器の壺で、頸部から体部にかけて



第45図 8-10 mu水田跡区画平面図・断面図



第47図 8層出土遺物

5 9層の遺構と遺物

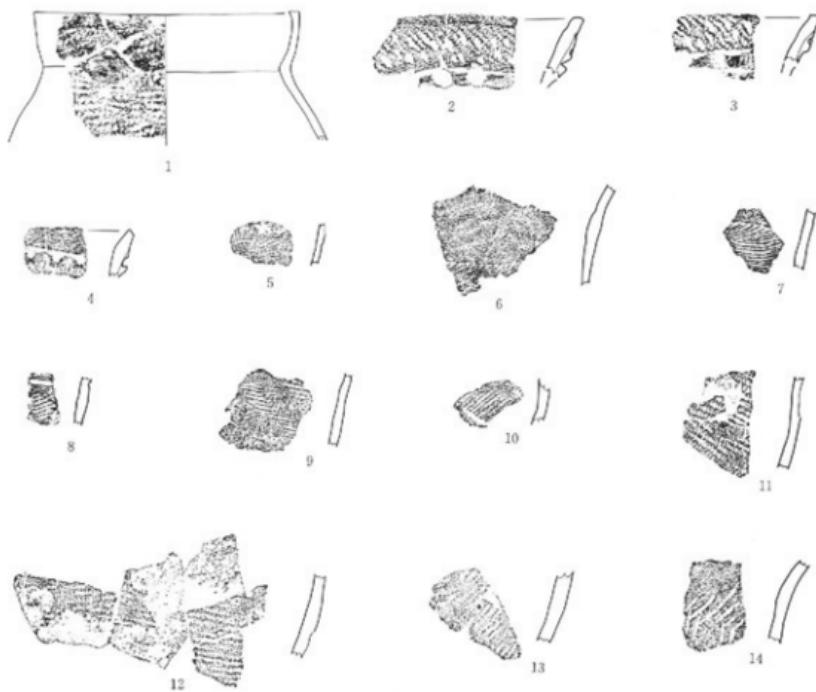
9層は黒色の粘土層であるが、この上面で畦畔等の遺構は検出されなかった。しかし層の下面に緩やかではあるものの起伏がみられ、水田土壤に類似した層相を呈している。次項で触るとおり直下層の10層上面では畦畔を検出しているが、これは本来9層が水田跡で、その時期に形成された擬似畦畔Bの可能性も考えられる。今回は畦畔を確認した10層を水田跡と認定したが、9層にも水田跡の可能性のあることを指摘しておきたい。

出土遺物（第48図）

層中より弥生土器・縄文土器が出土したが、弥生土器が大半を占めている。土器は細片が大部分であるものの直上8層、直下10層に比較すると出土量が多い。図示し得たのは次の16点である。

1は弥生土器の壺である。口縁部は「く」字状に屈曲し、体部は大半が失われており詳細は不明であるものの、あまり張りのない器形が推測される。また口唇部は上面からヘラ状工具によるものとみられるナデ調整を受けており、平らで角ぼった形状を呈している。外面は地文の縄文（LR）のみであるが、屈曲部分はナデ調整によって無文となっている。内面はナデ調整である。2・3は弥生土器で鉢の口縁部資料である。接合はしないが出土位置も近接しており同一個体の可能性が高い。いわゆる複合口縁で、粘土の貼りつけは明瞭ではないが若干の肥厚がみられる。口縁部下端に施した沈線に、下方から交互に押圧を加えることによって交互刺突文ふうの文様を作り出している。この上位には連続した斜位の刺突が、上下2段に交互に加えられている。地文は縄文（RL）である。内面はナデ調整である。4も弥生土器で、同様の交互刺突文ふうの文様がみられる。5は弥生土器であるが、細片であるために器種は不明である。外面にはナデによる器面調整の後、連弧文ふうの文様が描かれている。内面はナデである。6

図版番号	登録番号	種別	器形	法量(cm)		外面調査		内面調査		備考		写真図版
				容積	口径	底径	地文(LR)無文等	ミガキ	赤誠	所誠	---	
1	B-2	弥生土器	壺				地文(LR)無文等	ミガキ	赤誠	所誠	9-12	-
2	B-1	弥生土器	鉢				地文(RL)	ミガキ	赤誠	所誠	-	-
図版番号	登録番号	種別	器形	材質	大きさ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ	色	裏	写真図版	
3	M-3	彌生玉	彌生玉	石	17.9	9.0	1.9		緑	緑	12-9	
4	M-4	彌生玉	彌生玉	石	29.5	7.0	1.9		緑	緑	12-8	



図版 番号	登録 番号	種別	形態	法 量(cm)			外 面 調 査	内 面 調 査	指 考	写真 図版
				形 高	口徑	底径				
1	B-3	弥生土器	壺	-	(14.1)	-	口縁部：ナデ 縱文(LR) 腹部：ナデ 体部：縦文(LR)	ナ デ		8-15
2	B-5	弥生土器	鉢	-	-	-	口縫部：縦文(RL) 脊突 沈継→押圧	ナ デ	天王山式	8-17
3	B-4	弥生土器	鉢	-	-	-	口縫・口唇部：縦文(RL)、斜突 沈継→押圧	ナ デ	天王山式	-
4	B-14	弥生土器	鉢	-	-	-	口縫部：縦文(RL) 沈継→押圧	ナ デ	天王山式	8-16
5	B-18	弥生土器?	-	-	-	-	ナデ 滑粗文?	ナ デ	天王山式	8-11
6	B-15	弥生土器?	-	-	-	-	ナデ 縱文(LR)	ナ デ		9-10
7	B-17	弥生土器?	-	-	-	-	鶴嘴：ナデ 体部：縦文(LR)	ナ デ		-
8	B-19	弥生土器?	-	-	-	-	鶴嘴部：ナデ 沈継 体部：縦文(LR)	ナ デ		-
9	B-21	弥生土器?	-	-	-	-	ナデ 縱文(LR)	ナ デ		-
10	B-22	弥生土器?	-	-	-	-	ナデ 縱文(LR)	ナ デ		-
11	B-12	弥生土器	鉢	-	-	-	縦文(RL)	ナ デ	B5と同一個体か	-
12	B-10	弥生土器	鉢	-	-	-	縦文(RL)	ナ デ	B5と同一個体か	-
13	B-23	弥生土器?	-	-	-	-	鶴嘴?	ナ デ		-
14	B-16	弥生土器?	-	-	-	-	鶴嘴部：ナデ 体部：縦条(R)	ナ デ		8-14
15	B-25	弥生土器	-	-	-	-	鶴嘴?	ナ デ		-
16	A-1	縫文土器	-	-	-	-	鶴嘴(0段) 沈継	掌 級	後期?	-

第48図 9層出土遺物

～15は地文のみの資料であるが、いずれも弥生土器と考えられる。地文には縄文(L R、R L)と撲糸(R)がある。16は縄文土器とみられる細片である。外面は撲糸(0段)の地文に沈線が施されている。

6 10層の造構と遺物

10層の上面では畦畔を伴う水田跡を検出した。所属時期は弥生時代と推定される。なお直上層の9層にも水田土壤の可能性が考えられることから、ここで確認された畦畔は9層段階で形成された擬似畦畔Bである可能性も否定できない。しかしながら8層水田跡のように擬似畦畔Bを伴わない水田跡の検出例もしばしばみられること、直上9層の下面起伏が比較的緩やかであることなどから、ここで検出された畦畔の帰属は10層と考えておきたい。

(1) 水田跡

●10層水田跡

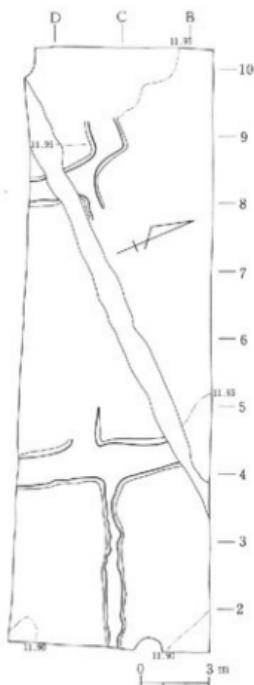
遺構状況(第45・49図)

※検出・遺存状況 畦畔で区画された推定7区画以上の水田区画が検出された。畦畔の確認面は9層の最下面部分である。畦畔の遺存状況は不良である。本来はこれら以外にも畦畔が存在していたものと考えられ、10層水田跡の全体的な様相を明らかにすることはできなかった。設定した水田区画については、検出された畦畔の配置をもとに想定したものである。なお、この水田跡に伴う水路は確認されなかった。

※畦畔 畦畔は大別して調査区の東西2ヶ所で確認された。東部の1～3は直線的で整った形状を呈している。ほぼ等高線に平行して南北方向に延びる1に2、3がおおむね直交の状態で「T」字状にそれぞれ東、西方向から接続している。西部の4～6は、やはり等高線方向に南北に延びる4から、ほぼ同じ角度で5・6がそれぞれ東、西方向に分岐する。畦畔は耕作土と同じ10層を盛り上げて作られている。下端幅は0.7～1.7mのものがみられ、耕作土上面との比高差は3～5cm前後である。なお直下層11層上面で当水田跡に伴う擬似畦畔Bは確認されなかった。

※水田区画

検出された畦畔の配置から①～⑦の水田区画を想定した。いずれも部分的な検出で、完結した区画はみられない。区画の形状は①～④は方形を基調とし、⑤～⑦については断片的であるために判断がつき難い。しかし各区画に1ヶ所づつみとめられるコーナー部分は、やや不整であるものの方形を呈している。また区画①・②はそれぞれ3×7m、3.5×7.2m以上の大型の規模を持つが、本来はこれらの中がさらに小畦畔によって区画された可能性も考えられる。水田面の標高は11.97～11.90mで、東南方向へ緩やかに下っている。調査区内の平均勾配は2.1



第49図 10層水田跡平面図

cm/10m である。

※耕作土

耕作土は基本層10層で、褐灰色の粘土である。層厚は10cm前後で、層下面には緩やかではあるものの起伏が観察される。

出土遺物 (第50図)

耕作土中から弥生土器・繩文土器が出土したが、量もわずかで摩滅の著しい細片がほとんどである。図示し得たものは以下の5点であるが、いずれも器種の特定はできなかった。

1は弥生土器と考えられる。外面には撫糸(R)が施され、内面はナデ調整である。2~5は繩文土器と考えられる。2・3は口縁に突起をもち、外面に横位の沈線がみられる。4・5は沈線が観察される資料である。地文は4が撫糸(R)、5は繩文である。

7 12層の遺物

12層上面で遺構は確認されなかつたが、層中より繩文土器片が出土した。

出土遺物 (第51図1~6)

層中より約40点の繩文土器が散在して出土したが摩滅の進んだ小破片がほとんどで、図示し得たものは次の6点にすぎない。なお、出土遺物の中に弥生土器らしいものは含まれず、この層の形成は繩文時代と推定される。1・6は地文だけの資料で、それぞれ撫糸(R)と繩文(R L)である。5は沈線文の資料である。2・3には地文の繩文(L R)が観察されるが、4・



回復番号	器種番号	種別	器形	外 面 調 査	内 面 調 査	備 考	写 真 図 版
1	B-26	弥生土器	—	撫糸(L)	ナ デ	十二式か天王式?	—
2	A-2	繩文土器	—	沈線	ナ デ	曉期(B-CかC1?)	8-3
3	A-3	繩文土器	—	沈線	ナ デ	曉期(B-CかC1?)	8-7
4	A-4	繩文土器	—	沈線 地文(R)	ミガキ	後期?	—
5	A-5	繩文土器	—	沈線 繩文?	摩 滅		8-9

第50図 10層出土遺物

5は摩滅のためか確認できない。

8 13層の遺物

13層の上面では遺構は検出されなかったが、層中より縄文土器が出土した。

出土遺物（第51図7～10）

層中より25点の縄文土器が散在した状態で出土した。摩滅の著しい小破片がほとんどで、図示し得たものは次の4点にすぎない。

7～10いずれも地文のみの資料である。地文には縄文（RL、LR）と撚糸（R、L）がある。



回収番号	登録番号	種別	断面	層位	外観調査	内面調査	備考	写真記録
1	A-6	縄文土器	-	12層	ナゲ 縄糸(R)	ナゲ?		8-8
2	A-10	縄文土器	深5	12層	沈銀 縄文(LR)	ナゲ	後期?	8-4
3	A-11	縄文土器	深5	12層	沈銀 縄文(LR)	摩滅	後期?	
4	A-14	縄文土器	-	12層	沈銀	ミガキ		
5	A-12	縄文土器	-	12層	沈銀	ナゲ		
6	A-13	縄文土器	-	12層	縄文(RL)	ナゲ		
7	A-15	縄文土器	-	13層	縄文(RL)	ナゲ		
8	A-16	縄文土器	-	13層	縄文(LR)	ナゲ		8-5
9	A-19	縄文土器	-	13層	撚糸(L)	摩滅		
10	A-21	縄文土器	-	13層	ナゲ 撥糸(H)	ナゲ		8-6

第51図 12・13層出土遺物

4 遺構と遺物のまとめ

1 遺物

今回の調査では32ℓのコンテナで約20箱分の遺物が出土した。内容は陶器・磁器・土師質土器・土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器・石器・木製品・自然遺物の10種である。自然遺物を除き、これらは可能な限り図化し本文中に掲載する方針とした。しかしこの項での記述は主として遺構や層の時期、性格に関連のあるものあるいは特長的なものに限定した。

(1) 陶器



第52図 陶 器

H1は、基本層2層から出土した常滑産の陶器の壺である。丸味のある口唇部と口縁内面の沈線に特長がある。赤羽一郎氏の編年（赤羽：1984）では第二段階前半に相当するものと思われ、12世紀後半の年代が推定される。しかし内面に古い様相である沈線を残しており、年代的にやや上がる可能性が考えられる。ここでは一応12世紀半ばから後半という幅の中で考えておきたい。なお、今年度調査が行われた仙台市南小泉遺跡第17次調査でこれに後続する12世紀末頃とみられる常滑産の壺が出土した。現在のところ市内ではこの2点以外に12世紀の常滑産大型壺類の出土例がない。

H13は基本層2層出土の灰釉陶器である。長頸瓶と考えられるが、底径が15.2cmを計り大型の製品と推測される。井上喜久男氏より产地は愛知県猿投窯でH-72の窯式に類似しており、11世紀前半の年代が考えられるとのご教示をいただいている。

H10はSI6竪穴遺構出土で在地産と考えられる鉢であるが、共伴する中国青磁の年代観や形態から12～13世紀頃に位置付けておきたい。

(2) 土師質土器

一般にカワラケと呼称される土師質土器は3b層の竪穴遺構・井戸跡・溝跡から合計8点が出土した。このうちSE3井戸跡からは4点がまとまって出土した。器種はすべて皿であるが製作技法、器形からA・Bふたつの型に分けられる。G4のみがBで他の7点はすべてA型とした。それぞれの特長は次のとおりである。

皿A：成形にロクロが使用されている。底部切り離しは回転糸切りで、無調整である。厚みのある底部に、ごく短い口縁部がつく。内面には比較的ていねいなナデ調整が施される。

皿B：手捏ねである。内外面ともナデ調整が施される。色調は灰白色を呈し、胎土は非常に緻

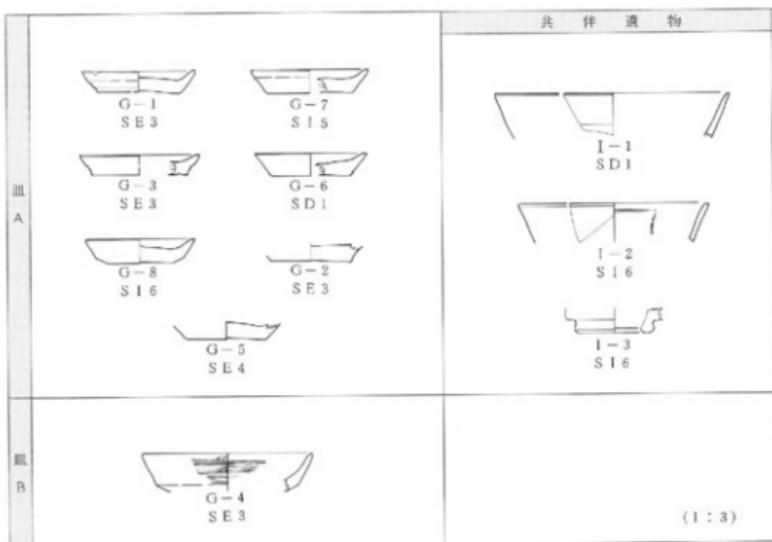
密である。A型とは系統を異にし、「白カワラケ」などと呼称されるタイプのものと考えられる。所属年代については共存する遺物から推定したい。今回の調査では、SD1溝跡とSI6竪穴造構でA型の土師質土器と中国青磁が共存している。

・ SD1 G 6 (皿A) 1-1 (龍泉青磁碗 - 12世紀末~13世紀初頭)

・ SI6 G 8 (皿A) 1-2 (龍泉系青磁碗 - 12世紀末)

1-3 (龍泉系青磁碗 - 12~13世紀代)

以上の状況から、皿Aの所属時期は12世紀末~13世紀初頭を中心とする時に位置付けておきたい。皿BについてSE3井戸跡で皿Aと共にし、同様の年代と理解したい。



第53図 土師質土器

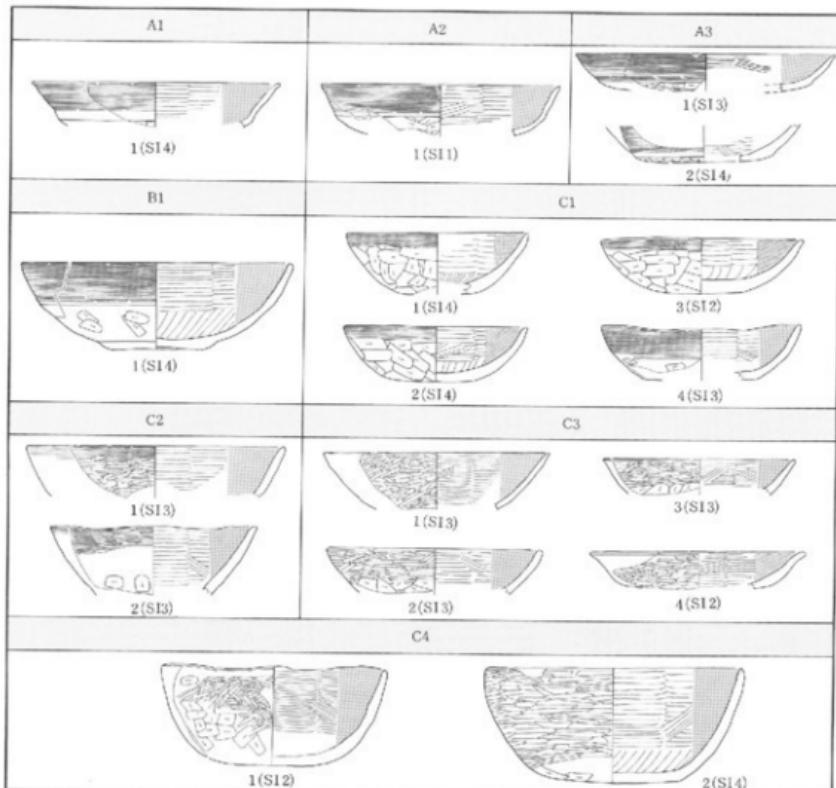
(3) 土師器

今回出土した土師器に関しては小破片が多く量的にも不充分であるが、遺構の時期決定に係わる竪穴住居跡出土のものに限定して言及することにする。

●坏 (第54図)

復元・図示のなし得たものは合計で21点であるが、遺構別の内訳は以下のとおりである。SI1竪穴住居跡 (3点)、SI2竪穴住居跡 (4点)、SI3竪穴住居跡 (8点)、SI4竪穴住居跡 (6点)。これらの坏はいずれも非ロクロ成形で内面黒色処理が施されているという点で共通している

が、器形や調整技法から大きく8タイプに分けた。Aは外面に段のあるもの、Bは沈線、Cはいずれもみとめられないものである。なお図示資料のなかでも状況の悪いものは分類の対象から除外した。またこれら以外の小破片も含めて、いわゆる外来系土器や漆処理、赤彩の資料は確認されなかった。



第54図 整穴住居跡出土土器器坏

(1:4)

A1・A2は外面有段の丸底坏で、A1は内面にも外面と対応する屈曲がみられる。口縁部は直線的に外傾する。外面調整は口縁部が横ナデ、底部はヘラ削りである。このような特長をもつ坏は大体では栗廻式後半階の範疇で捉え得るものと考えられるが、次型式である国分寺下層式の初期段階組成に残る可能性も想定され、単体をもって型式を判断することは避けたい。類似の資料は仙台市郡山遺跡SD35溝跡-II期官衙外郭溝-（木村・長島：1985）、宮城県高清水町

觀音沢遺跡8号住居跡出土土器（加藤・阿部：1980）などにみとめられ、7世紀後半代から8世紀前半頃にかけての存続幅が推測される。

A3も外面有段の坏であるが、段の位置が低く平底化が進んでいる。外面の調整はA1・A2と同様である。このような特長の坏は一般的に国分寺下層式の範疇で理解されようが、宮城県藏王町塙沢北遺跡1号住居跡出土土器（小川：1980）などに類例がみられ、前型式の終末的組成のなかで出現していたものとみられる。この他觀音沢遺跡4号住居跡にも類似の資料があり、年代的には7世紀末・8世紀初頭から8世紀前半代にかけての存続幅が想定される。

B1は体部中位に沈線のめぐるやや大ぶりの坏である。外面調整は口縁部が横ナデ、沈線以下にはヘラ削りが施されている。体部外面に沈線を施す手法は宮城県志波姫町難塚遺跡第1群土器（志間・小井川・加藤：1978）や、本調査区に近接する下ノ内浦遺跡1号住居跡出土土器（渡部・小川：1988）などの例にみられるように、国分寺下層式期のうち8世紀中葉以降に盛行するものと思われるが、本資料は外面調整に前者二例とは相違がみとめられること、同一住居跡床面で坏A1・A3と共に伴することなどから、難塚遺跡や下ノ内浦遺跡のものに先行する可能性のあることを考えておきたい。

C1は内外面ともに段・稜・沈線のないものである。平底のものと（2・4）やや丸底風のもの（1・3）とがあり、口縁部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。外面の調整は口縁部が横ナデで体・底部はヘラ削りである。これに類似した資料は、本調査区と近接する元袋III遺跡18・20住居跡（渡部：1987）、下ノ内浦遺跡住居跡（工藤：1983、渡部・小川：1988）に出土例があり前者は8世紀前半代、後者はともに8世紀中葉に位置付けられ、型式的には国分寺下層式に比定されている。また、宮城県多賀城跡田屋場横穴墓群SP1559出土土器（高野：1985）のなかにもこのタイプの資料がみられ、年代的に7世紀後葉まで遡る可能性が示唆されており、あるいは前型式の終末的な組成のなかに散発的に含まれることも可能性として想定される。

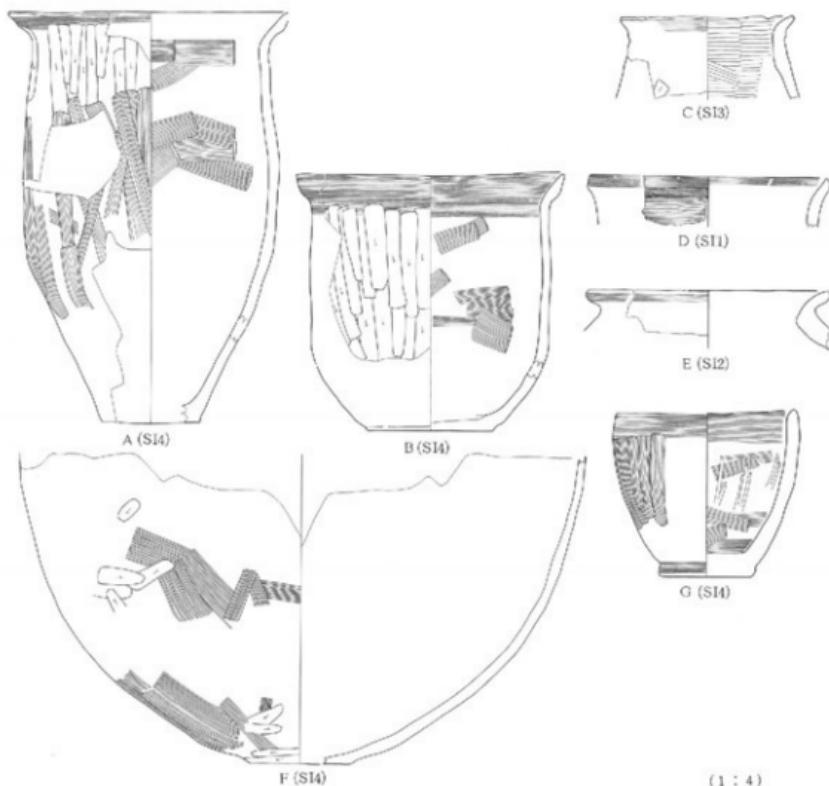
C2はC1と器形的には共通しているが、外面の最終的な調整としてミガキが加わっている点に相違が見いだせる。

C3は外面全体的にヘラミガキが加えられるもので、国分寺下層式に比定されよう。下ノ内浦遺跡住居跡出土土器（工藤、渡部・小川：前掲）、名取市清水遺跡第VII群土器（丹羽・阿部・小野寺：1982）などに類例がもとめられ、8世紀中葉から後葉にかけての盛行が推測される。この他、本調査区に近接する六反田遺跡6号・7号住居跡（佐藤：1987）や、郡山遺跡においてII期官衙期と考えられるSK407土坑出土土器（木村・長島：1984）のなかに類似資料がみえ、外面全体にヘラミガキを施す手法は少なくとも7世紀末・8世紀初頭、前半頃には出現していたものと考えられる。

C4は器高／口径値が大きいもので(0.4以上)、椀形の器形を呈する。外面の調整は比較的て

いねいなミガキ調整が主体となっている。このような壺の類例は六反田遺跡7号住居跡、観音沢遺跡第4号住居跡、また清水遺跡第VII群土器などにみられ8世紀代をとおして存在したことかが知られるが、郡山遺跡SD35溝跡、多賀城跡田屋場横穴墓群SP1559出土土器などのなかにも同様の資料がみとめられ、その初現は7世紀後半代まで遡る可能性も考えられる。

●壺（第55図）



第55図 壺（第55図）

(1:4)

復元・図示のなし得たものは全体で7点にすぎないが、A・B・F・Gの4点は同一住居跡(SI4)の床面から出土したものである。

A・Bはそれぞれ長胴壺、短胴の小型壺である。ともに頸部に段ではなく、外面のナデと区別のつきにくい軽いケズリ調整が特長的である。外面に削りを施す壺は六反田遺跡3号住居跡出土

土器（佐藤：1987）のように7世紀末頃に位置付けされるものもあるが、一般に8世紀代、国分寺下層式期を主体とするものであろう。

Fは部分的な資料で詳細は知り得ないが、大型の球胸甕と考えられる。表面の劣化が進んでいるが、ハケメの後に削り調整が施されている。

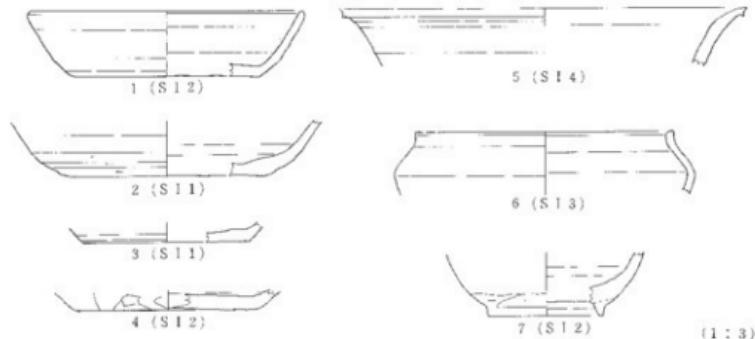
Gは小型で鉢型を呈する。外面の調整は口縁部が横ナデで、体部はナデ調整（軽いケズリ？）である。

（4）須恵器（第56図）

須恵器についての記述も土師器同様に竪穴住居跡出土のものに限定するが図示をなし得たのは8点で、さらに年代等の手がかりとしたい坏類は4点にすぎない。いずれも堆積層中からの出土である。なおSI2出土の4はSI1出土の小破片と接合した。

1は唯一様相を知り得る資料である。口径（14.3cm）、底径（9.8cm）ともにやや大きめで平底、器高（3.5cm）が低く口縁部の立ち上がりは直線的である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、その後手持ちのヘラ削りが施されている。これらの特長から福島県福島市小倉寺高畠窯跡出土土器（工藤：1969）から福島県相馬市善光寺窯跡9号窯出土土器（木元・中山・松崎：1989）あるいは宮城県大和町鳥屋窯跡群三角田南地区1号窯出土土器（東北学院大学考古学研究部：1975）にかけての時期、8世紀前半代の年代を推測しておきたい。

2～4は底部部分の破片資料である。いずれも平底で手持ちヘラ削りを受けている。切り離し確認ができたのは3のみで、回転ヘラ切りである。住居跡の堆積状況・遺物の出土状況から1に近い時期を考えておきたい。



第56図 竪穴住居跡出土須恵器

（5）竪穴住居跡出土土器の組み合わせと所属時期

ここでは4棟の竪穴住居跡から出土したそれぞれの土師器および須恵器の組み合わせと、そ

の所属時期について検討したい。

住居跡	環	A 1	A 2	A 3	B 1	C 1	C 2	C 3	C 4
S I 1		2							1
S I 2						1		1	1
S I 3				1		1	2	3	
S I 4		1			1	2			1

第3表 穫穴住居跡土器坏出土状況

竪穴住居跡出土の土器は S I 4・S I 2 を除くと堆積層中からのものがほとんどである。しかし各住居跡とも堆積状況や土器の特長をみると、底絶から埋没までに大きな時間差はなかったものと考えられ、これらの遺物も時期推測のための資料となり得るものと考えられる。

今回確認された竪穴住居跡のうち最も良好な資料を得られたのは S I 4 で、床面より土器坏 6 点と甕 4 点が出土した。坏は有段の A 1・A 3 が各 1 点、沈線の B 1 が 1 点、無段 C 1 が 2 点、椀型 C 4 が 1 点という構成で、甕には長胴型・短胴型・球胴型および鉢型があって、いずれも外側の調整はヘラ削りとなっている。以上のように坏では無段、沈線のものが主体で甕は外側削り調整となっており、このような組成は国分寺下層式に比定されるものと考えられる。また有段坏 A 1 は内外側の段の状況および器面調整、A 2 は器面調整の点で栗団式後半段階の範疇でも捉え得るものであるが、出土状況から同型式・同時期におけるバラエティーと理解しておきたい。

S I 2 からは 2 点の土器坏が床面で出土したほか、堆積層中より土器坏・甕・須恵器坏等が出土した。床面資料の坏は無段の C 1、椀型の C 4 でこれらは前記 S I 4 の組成中にみられるもので、同じく国分寺下層式に比定されるものと思われる。また土器坏 C 3、須恵器坏 1 などその他の資料はいずれも床面に近い堆積層 1 層から出土したもので、床面資料とあまり時期差はないものと考えられる。

S I 1 からは A 2・C 4 の土器坏 2 点の他、甕・須恵器坏などがいずれも床面に近接した堆積層 2 層および 5 層から出土している。これらのうち土器坏 A 2 は、栗団式後半段階の範疇に含まれ得るものであるが、同一層序の資料で 8 世紀代と考えられる須恵器坏と堆積・出土状況から近似した時期が推測され、全体的に国分寺下層式の組成に比定されるものとみておきたい。

S I 3 の資料の多くは堆積層 3・4 層から出土したものである。このうち土器坏は無段タイプの C 1・C 2・C 3 が大半を占めるが、これらよりも形式的に古い様相を持つ有段坏 A 3 も 1 点含まれている。このように数タイプものが混在する様相を呈しているが、住居跡の堆積状況や出土状況から大きな時期差がないと推定され、同一型式、近似時期内のバラエティーである可能性を考えておきたい。国分寺下層式に比定される組成であると思われる。

各住居跡における土器組成の所属時期については、床面からの資料が得られた S I 4・S I 2 を基

準に考えたい。このうちSI4は床面から同時性・一括性が高いと考えられる土器群が出土し、同時期の一土器組成を示すものと理解される。SI2では床面出土の資料にSI4出土土器との類似性がうかがわれ、床面に近い堆積層より8世紀前半代と考えられる須恵器坏が出土している。このような状況からSI4・SI2の土器組成をおおまかに8世紀前半代に位置付け、国分寺下層式のなかでも比較的早い段階のものである可能性を想定しておきたい。SI1は前記のSI2と、またSI3はSI1との間で堆積層中の土器が接合し、埋没時期に近似性が推測される。従ってSI1・SI3の土器組成にはSI2のそれとあまり隔たりのない時期を考えておきたいが、SI3では外面全体にミガキを施すタイプの坏が目立ち、SI2に後出するものである可能性を想定しておきたい。

(6) 弥生土器

弥生土器は8・10層水田跡の耕作土中および、水田土壤の可能性が考えられる9層中より少量出土している。このうち最も状況を把握し得るのは、9層から出土した交互刺突文の資料である。これらは上下の水田跡の時期決定にも大きく係わると考えられるため、ここでは交互刺突文の土器に限定して触れていく。

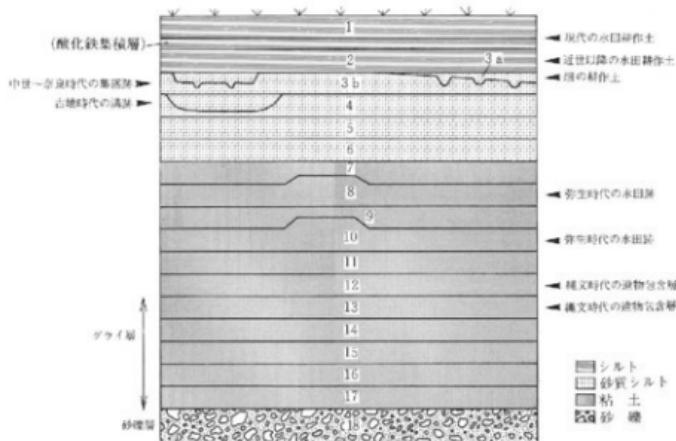
交互刺突文は、弥生時代後期の土器型式である天王山式土器の大きな特長のひとつとされており、今回出土したものもその範疇で捉え得るものである。本調査区周辺でも類似の資料が散見され、これまでに山口遺跡第2次調査(田中:1984)、下ノ内浦遺跡(吉岡・成瀬:1984、兼田:1988)、富沢遺跡第24次調査(工藤:1988)などから出土している。宮城県内の天王山式土器を3段階に区分した太田昭夫は上記の類例のうち、下ノ内浦遺跡を1段階、富沢遺跡を3段階に位置付けている(太田:1990)。今回出土した資料は口縁部下端に沈線を施し、下方より交互に刺突を加えて交互刺突文風の文様を描き出したもので、典型的な交互刺突文とは様相が異なる。このような特長は、太田の設定した1段階のものに近いと考えられる。下ノ内浦遺跡の資料には本調査区9層出土資料にはない長いスリットがみられるが、これは時期差ではなく文様のバラエティーと理解しておきたい。以上のことから9層出土の交互刺突文土器は天王山式のなかでも古い様相を持つもので、下ノ内浦遺跡とほぼ同時期、富沢遺跡・山口遺跡第2次調査のものよりは古い段階との位置付けをしておきたい。

2 遺構

今回の調査結果で想定される当地区における人間活動の痕跡はおおまかに次の11期以上で、このうち遺構を検出したのは*の6期である。

- | | | |
|-----|-------------|-------|
| 1期 | 現代の水田 | 1層 |
| 2期 | 近世以降の水田土壤 | 2層 |
| *3期 | 中世の遺構群(屋敷跡) | 3b層上面 |

- * 4期……古代の土坑、小溝遺構群……3b層上面
- * 5期……古代の集落跡……………3b層上面
- * 6期……古代の溝跡……………4層上面
- * 7期……弥生時代後期の水田跡……………8層上面
- 8期……弥生時代後期の水田土壤……………9層
- * 9期……弥生時代後期以前の水田跡……………10層上面
- 10期……縄文時代の遺物包含層……………12層
- 11期……縄文時代の遺物包含層……………13層



第57図 基本層序と遺構検出模式図

(1) 中世の遺構－屋敷跡－

●遺構の構成（第58図）

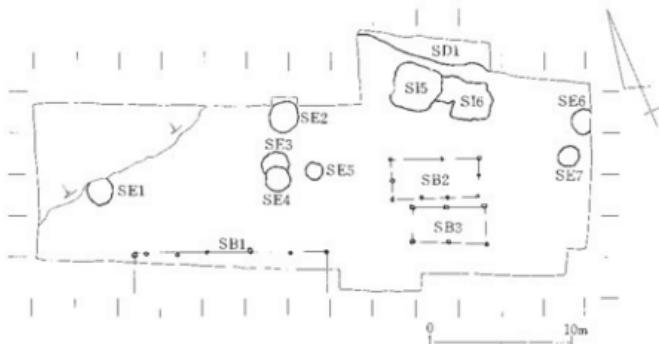
中世の遺構には溝跡（1条）・掘立柱建物跡（3棟以上）・竪穴遺構（2基）・井戸跡（7基）および多数のピットなどがある。各遺構とも堆積物に類似性がみられ、竪穴遺構と井戸跡の2ヶ所で重複はあるものの、大きな時期差はないものと考えられる。なおこれらの遺構はそれが単独で存在したのではなく、まとまりとして一つの「屋敷」を構成するものと考えておきたい。

●各遺構の性格

*溝跡 SDI溝跡は調査区の北辺で部分的に確認されたものにすぎず、形状や規模をはじめ詳しい様相は不明である。性格についての判断もつき難いが、全体的な位置関係から屋敷周囲を

巡る区画溝の可能性も考えられる。

*建物跡 挖立柱建物跡を3棟認定したが、SB1は可能性として推定したものである。いずれも東西棟で、方向もほぼ揃っている。重複や建て替えの痕跡は認められなかった。今回は屋敷地の部分的な検出であり、あくまで可能性の指摘に留めるがSB1は母家、SB2・3には付属屋的性格を想定しておきたい。また多数確認された中世期のものと思われるビットの中には柱痕のあるものが散見され、これ以外にも建物が存在した可能性も十分に考えられる。



第58図 中世造構配置図

*竪穴遺構 2基が切りあった状態で確認された。重複の新しい方のS15は比較的整った隅丸の方形を呈している。底面や周囲に柱穴等の施設は確認されなかったことから固定的な上部構造物は考えにくく、鎌倉や東北地方北部などでみられるいわゆる方形竪穴遺構とは性格を異にするものであろう。しかし掘り方の埋め戻し土とみられる層の直上に貼り床状の粘土層が存在し、人為的に構築された床であった可能性も考えられごみ穴や便所などとも考えにくい。粘土層の直上は植物遺体の集積層であるが、ここからは土師質土器・木製品のほか多量の種子類が検出された。鑑定の結果、内容にはいわゆる雑草のたぐいも多いが、これらとともにヒヨウタン・ウリ・モモ・モミ(コメ)・オオムギ・ソバなど栽培植物の種子も多く含まれている。このうちヒヨウタン・モモ・モミについては層上面で集中的な出土状況を示していた。消極的ではあるが以上のような諸状況から推して、上部構造など全体的な様相には不明な部分が多いものの、この遺構が半地下式の農作物等の貯蔵施設であった可能性を想定しておきたい。なおS15はイネの穀・薙を起源とする灰で人為的に埋められた形跡がうかがわれるが、井戸跡のなかにも同様の灰を確認したものがある。この他宮城県高清水町観音沢遺跡(加藤・阿部:1980)や仙台市今泉城跡(佐藤:1983)などでも中世期遺構の堆積物として灰が検出されており、現在のところその要因については不明であるが、今後注意すべき事柄の一つではある。

SI5に切られるSI6はカギ形の平面形を呈し堆積物の様相もSI5とは異なっているが、SI5と接した規模等に共通性もうかがわれることから、SI5と同様の性格を考えておきたい。なお現在でも仙台市内で、土中に設けた施設に農作物を保存する民俗例（堀籠・中富：1985）がみられる。ムロなどと呼称されている。

*井戸跡 合計で7基が検出された。石組や枠材のあるものではなく、すべて素堀りのものである。これに伴う建物等の施設は確認されなかった。

●所属時期

本文中に掲載したとおり中世遺構に伴う遺物は少なく、ある程度時期を限定し得るものとなると更にごくわずかなものに限られる。今回は溝跡および竪穴遺構から出土した3点の中國産青磁を、直接的な時期決定資料として用いた。この年代観から屋敷跡の所属時期を、12世紀末から13世紀初頭に位置付けておきたい。この他井戸跡・竪穴遺構出土の土師質土器や、また直上2階から出土した12世紀後半と考えられる常滑産壺などにも、傍証資料となり得る可能性が考えられる。

仙台市周辺で12世紀代まで上る屋敷跡の類例は多賀城市新田遺跡（石川・柏沢・千葉：1990）、仙台市今泉城跡（佐藤：1983）、同松木遺跡（工藤：1986）、同鴻ノ巣遺跡第3次調査（青沼・長島：1982）などに求められる。また本調査区の南西約700mに位置する富沢館跡は発掘調査の経験もなく詳細は不明であるが、地表に頗在する濠跡の様相から中世の遺構とみられている。いずれにしても今回確認された遺構は、仙台平野における中世屋敷跡遺構の初現的なもの一つと考えることができよう。なおこの屋敷跡には前述の類例にみられるような長期に亘る変遷や継続性はなく、その存在期間は比較的短期間であったと推定される。

●屋敷の性格、居住者

今回確認された屋敷跡と新田遺跡や鴻ノ巣遺跡第3次調査のそれを比較すると、本遺跡のものは規模も小さく出土遺物の内容にも差異がうかがわれる。これは屋敷の性格や居住者の相違を反映しているものと考えられる。しかし東北地方南部における中世初期段階の階級構造や支配体制、また階級別の居住形態などについては未解明の部分も多く残されており、今回検出された屋敷跡や性格や居住者についても言及は控え、今後の資料の増加や新知見を待って再考することとした。

（2）平安時代の小溝遺跡群－畑跡－

●小溝遺跡群について

小溝遺跡群は仙台市内に限っていえば、1976年に六反田遺跡第1次調査（田中：1981）で初めて確認されて以来各地での検出が続いている。また小溝遺跡群とは区別され搅乱扱いとなっているが、仙台市郡山遺跡では近年の畑作による天地返し痕が密集する溝状の痕跡として頻繁

に確認されている。仙台市内において検出された小溝遺構群の特長については度々述べられているが(工藤:1988、佐藤:1987)、ここでは以下の4点をあげておきたい。①主に、自然堤防など微高地上のシルト質土壤に残されている。②群としてまとまりがみられる。③水の流れた痕跡が認められない。④一般に水田遺構に伴って検出されない。これらのことから小溝遺構群を畑作に伴う痕跡とすることが一般化しつつあるが、この遺構は畑の最も大きな特長である歓の存在の特定が困難で、慎重にならざるを得ないのが現状である。

考古学的な手法において最も確実な痕跡の認定は、群馬県下などでテフラに覆われた状態で発見される事例のように、歓を明確に伴う畑そのものを検出することであろう。しかし一般に本遺跡が立地するような沖積地では堆積の連続があり、それに伴って削平や遺構の重複が繰り返されるため多量の洪水砂などで一気に埋没するような偶然がなければ、畑そのものの遺存はあまり期待することができない。小溝遺構群を畑跡と認定するためには遺構形態や上下層との関係の十分な観察は勿論であるが、加えて使用農具も含めた畑耕作のプロセス、および畑の構造について検討を加える必要があろう。どこまで敷衍し得るのか慎重な吟味をするが、民俗例にみられる畑作慣行の事例等も積極的に活用すべきであるし、またプランツ・オパール分析法・灰像法・種子同定などの分析者との協業を前提とした自然科学からの接近にも力点が置かれるべきである。

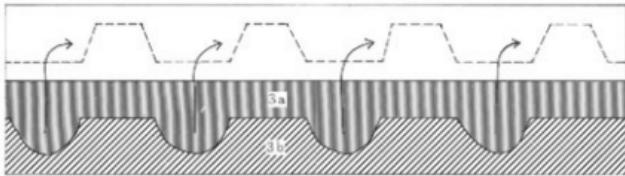


第59図 小溝遺構群配置図

●小溝遺構群形成に想定される2つのバタン

仙台市においては発見当初から小溝遺構群に畑跡の可能性が指摘され畑の歓間(小溝遺構群A)、あるいは天地返し痕(小溝遺構群B)の2つのバタンが想定されてきている。

このうち天地返し痕については各小溝間の幅の広さに着目し、現代の畑作慣行を傍証しながら否定的な見解も示されている(工藤:1988)。たしかに民俗例にみられる地方維持を目的と



第60図 小溝遺構断面模式

した天地返しでは、溝は全く間隔を開けずに掘りこまれ畑全面の土を返すのが通例である。しかし現在知り得る畑作慣行についての民俗例は明治以降のもの主体とし、それ以前の在来農法における畑作慣行を直接的に伝えるものとはいい切れない。従ってこれより以前の天地返しの堀り込みがより間隔を持って行われたと仮定すれば、その痕跡として小溝遺構群が形成される可能性も否定はできないことになろう。第60図は今回検出された小溝遺構群の断面模式である。3a層に畑耕作土の可能性を想定している。溝部の堆積物は3a層との区別が困難なもので、直下層3b層と考えられる土のブロックを含むものが多い。畑耕作のある段階で一旦3a層上面より間隔を置きながら天地返しが掘りこまれ、その後再び3a層を耕作で攪拌したとすればこのような状況を示す可能性が想定ができるだろう。

次に歛間としての可能性を検討したい。先ず3b層は層相から自然堆積と判断され、従ってこの上面にみられる起伏が歛の残存であるとは考えられない。また明治以降の畑作慣行では歛は平鍬を使用して耕作土深度内の土(3a層)で立てられるのが普通で、下層(3b層)にまで及ぶような耕起が行われることは通常なく、民俗例から考えると小溝遺構群が歛立てに伴う耕起痕であるといい難いことになる。しかし前述したように、畑作の民俗例は一般に近代以降の事例として知られているものである。これよりも古い時代に、歛立てが鋤のような深耕型の農具を用いより深起を伴いながら行われたと仮定すれば、今回検出されたような痕跡が残されることも可能として想定し得る。その場合、歛の位置は図中の破線部分に考えられる。

●遺構の性格

今回検出された小溝遺構群は積極的根拠には欠けるものの、従来の仙台市の見解に従い畑耕作に伴う痕跡と考えておきたい。その形成過程についてはA・Bいずれとも判断し難く、今回は特定を避けたい。将来の検出事例の増加とそれに基づく検討の集積が、いずれこの問題を解決してゆくことと思われる。

なお、畑作の可能性を検討する目的でプラント・オパール分析と溝部堆積物より得られた種子の同定を実施した。3a層におけるプラント・オパール密度は2,700個/gという結果が得られた。この値について分析者は①3a層で畑作が行われた。②上層水田からの混入。以上2点の可能性を指摘されたうえで、すくなくとも畑作物となり得るイネ科植物に由来するプラント・オ

バールが検出されなかったことを報告されている。種子類ではコメ（炭化米・糊殻玄米）・オムギ・ヒエ？・ツユクサが確認された。双方の結果を総合的にどう評価すべきか分析・同定者との十分な協議を持つことができなかつたため、現時点においては判断することができない。今後の課題としたい。

●出土遺物と所属時期

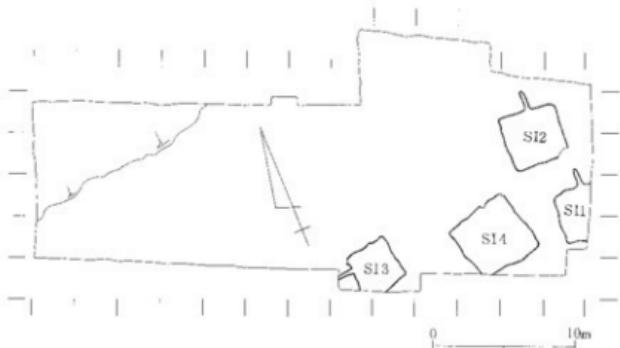
出土遺物は非常に少なくA群より2点、B群より1点土師器小片が出土したばかりである。いずれもロクロ成形、内面黒色処理の坏である。また他遺構との重複関係をみると、B群で竪穴住居跡(SI4)を切り、平安時代と考えられる土坑(SK5)に切られている。またA・B両群で方向別に7類に分けられ数ヶ所に重複関係が認められるが、基本的には全て3a層が畑として機能した時期のものと考えられ、あまり大きな時期差は考えにくい。A・B群ともに出土遺物や他遺構との重複関係から大きく表杉入式期、平安時代に位置付けしておきたい。

なお本調査区にほぼ隣接する第2次調査区では平安時代(10C前半)の集落跡および水田跡が検出されており、今回検出された小溝遺構群(畑跡)が一連の空間の中で存在した可能性も考えられる。

(3) 古代の集落跡

4棟の竪穴住居跡から構成されるが、出土遺物の検討からこれらは国分寺下層式に所属し、年代的には大きく8世紀前半のものと推測された。各住居跡間に重複はなく、これらの同時性については明確な判断が困難であるが、出土遺物の様相からSI2・SI4については近い時間内で併存した可能性が考えられる。

住居跡はいずれも隅丸の方形を呈し、床面積は推定21m²のSI4が最大で最小はSI3の10.4m²であるが、一辺の長さは全て5m以下となっており全体的に大型のものはみられない。床面は掘り方の埋め戻しとみられる土を叩き締めて構築されており、粘土等での貼り床はみとめられなかった。柱穴はSI2・SI4で方形に配置された4本の主柱穴を検出したが、SI1・SI3では明確にすることことができなかった。このうちSI2の柱穴では直径10~20cmの柱痕跡が確認された。カマドは全ての住居跡でみとめられたが、SI4では削平が著しくわずかな痕跡を留めるにすぎなかった。位置はSI1・SI2・SI4では北辺のほぼ中央部で、SI3は西辺に構築されている。またSI1・SI2カマド内堆積物の灰は灰像分析の結果、両者ともに稻穀・藁を起源とするものであることが判明し、これらが当時カマド燃料の一種として用いられた可能性が推測される。なお山口遺跡およびその周辺部で国分寺下層式期に該当する水田跡検出は、当調査区の北東約1kmに位置する富沢遺跡第35次調査12層水田跡(平間:1990)一例ときわめて少ない状況であるが、この時期に所属する住居跡での稻起源の灰の存在は当時本調査区周辺で稻作が行われたことの傍証ともなり得、また両住居跡の居住者がこれと係わりを持ったことを示唆するものと考えられる。



第61図 壺穴住居跡配置図

検出された住居跡の南北軸をみるとSI1・N-3°-E、SI2・N-1°-E、SI3・N-8°-W、SI4・N-17°-Wとなり、SI4を除く3棟は真北に近い方向が基準となっている。ところで本調査区の立地する笊川自然堤防上には多くの集落遺跡が存在するが、これらから現在のところ20棟程の古墳時代後期末から奈良時代にかけての壺穴住居跡が検出されている。これらの南北軸方向をみると下ノ内浦遺跡（工藤：1983）・下ノ内遺跡（渡辺：1984）・六反田遺跡（田中：1981、佐藤：1987）・元袋III遺跡（渡部：1987）・山口遺跡（田中：1984）などに真北に近い方向を示すものが散見され、それらの住居跡はいずれも国分寺下層式期、8世紀代に属している。今回は詳しい検討は行わないが、笊川自然堤防上の集落遺跡では8世紀代に入ると、真北方向より近い南北軸をとる壺穴住居跡が増加する傾向のあることを指摘しておきたい。

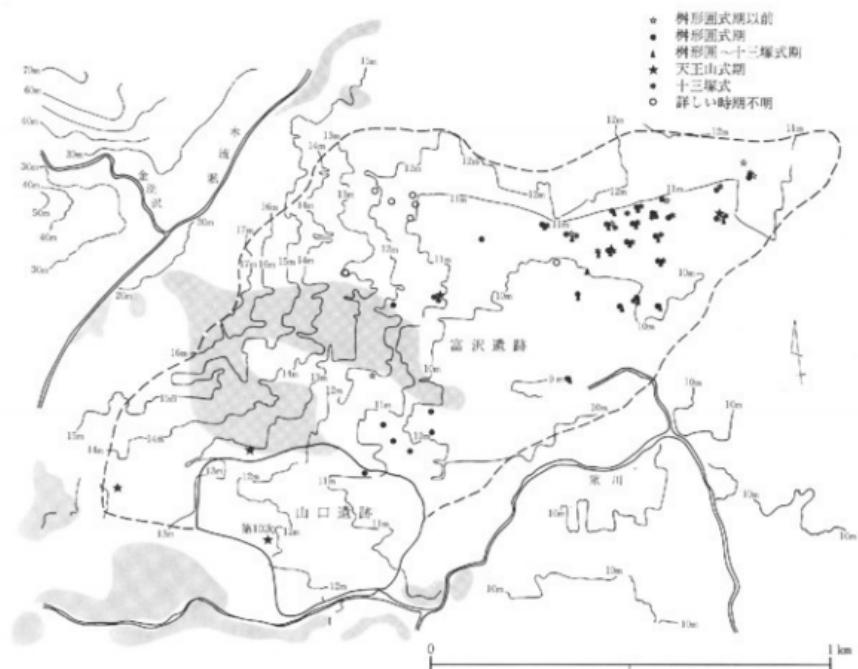
（4）古代の溝跡

4層上面で調査区内を東西方面に斜行する溝跡が1条検出された。今回はこれ以外に人为的な遺構は確認されず、性格を明らかにすることはできなかった。周囲に同時期の集落跡・水田跡等が存在することも考えられる。堆積層中より土師器壊1点が出土したがその特長から古墳時代中期南小泉式期のものと判断され、溝跡もこの時期に位置付けておきたい。

（5）弥生時代の水田跡

8層および10層上面で水田跡が検出されたが、所属時期はいずれも弥生時代と考えられる。山口遺跡で初めて弥生時代水田跡が確認されたことになる。

8層上面では推定24区画以上の水田区画が検出された。畦畔大まかに等高線に沿うものとこれにほぼ直交する方向のもので構成されるが直線的に整然としたものではなく、これらで形成される水田区画も全体的に不整形である。耕作土は泥炭を全く含まない黒褐色の粘土で、すくなくとも調査範囲内では水路等の水利施設は検出されなかった。水田跡の所属時期は、弥生時



第62図 山口・富沢遺跡における弥生時代水田跡

代後期天王山式期と考えられる。なお、本調査区に隣接する山口遺跡第2次調査では7b層上面で「畦状盛り上がり」が検出され、その報告ではプラント・オパール分析のデータ等を考慮しながらこの遺構に弥生時代後期の水田跡の可能性を指摘し、併せて周囲にも同時期の水田跡が存在する可能性を予測した(田中: 1984)。今回確認された8層水田跡は層の状況から、この第2次調査区7b層の延長である可能性が高いものと考えられる。

当山口遺跡を含む富沢遺跡とその周辺地区では、これまで5地点で弥生時代天王山式期の水田跡が検出されている。この時期の水田跡の様相は確認事例が少なく不明な点も多いが、現在のところ以下の特長が指摘されている(太田: 1991)。①これ以前の時期には認められなかった、地形的に高い西部地区にも水田域が拡大する。②従前の泥炭質粘土を主体とする耕作土に対し、シルトや粘土が耕作土として利用されている。③不規則・不整形な区画が多い。今回検出された8層水田跡も、これらの特長によく合致しているものといえよう。

10層上面では推定7区画以上の水田区画が検出された。畦畔は8層水田跡同様大まかに等高

線に平行するものと、これらにほぼ直交する方向のものとで構成されている。耕作土は泥炭を全く含まない褐色灰色の粘土である。全体的に遺存状況も不良で、詳細を明らかにすることはできなかった。10層の出土遺物から明確な時期を判断することは困難であるが、直上の9層より交互刺突文土器が出土しており、今回は大きく弥生時代天王山式期以前に位置付けておきたい。

5 要旨

1. 山口遺跡は名取川水系笊川の左岸に位置し、その自然堤防と考えられる微高地から富沢遺跡へと連続する後背湿地にかけて立地している。このうち当第10次調査地点は、微高地部分のほぼ北端部に位置しているものとみられる。
2. 今回の調査で確認された人間活動の痕跡は現代から縄文時代にわたる11期以上で、このうち6期の遺構を確認した。なおこれらのなかには集落跡も含まれるが、現在まで遺跡内の後背湿地部分の調査では検出遺構は水田跡に限定されており、地形環境による土地利用の差異がうかがわれる。
3. 中世の屋敷跡は溝跡（1条）・掘立柱建物跡（3棟以上）・竪穴遺構（2基）・井戸跡（7基）から構成される。溝跡は区画施設、竪穴遺構には貯蔵施設の可能性が想定される。所属時期は12世紀末から13世紀初頭と考えられ、居住者を含めその性格は不明であるものの、仙台平野における中世屋敷跡の初現の遺構である。
4. 平安時代の遺構には土坑と小溝遺構群がある。このうち小溝遺構群については、その形成過程を明確にすることはできなかったが、畑耕作に伴う痕跡と推定される。
5. 国分寺下層式期、8世紀前半と考えられる集落跡は4棟の比較的小型の竪穴住居跡で構成される。当集落跡は山口遺跡のなかで完結するものとは考えにくく、笊川自然堤防上に立地する一連の遺跡群の中での位置付けが必要である。今後の課題としたい。またこの遺跡群における古代の竪穴住居跡では8世紀、国分寺下層式期以降南北軸が真北に近い方向を示す傾向がうかがわれ、今後調査例の増加を待って整理・検討を要するものと考えられる。
6. 古墳時代中期、南小泉式期の溝跡1条が検出されたが、これ以外に人為的な遺構は確認されずその性格は不明である。周囲に同時期の集落跡・水田跡等の存在が予測される。
7. 弥生時代の水田跡は8層および10層で検出された。このうち8層水田跡は弥生時代後期天王山式期のものとみられ、不整形な水田区画が推定24区画以上確認された。この水田跡は、本調査区に隣接する山口遺跡第2次調査7b層検出遺構の連続である可能性が高い。10層水田跡は遺存状況は不良であるものの、推定7区画以上の水田区画が検出された。所属時期は弥生時代後期天王山式期以前である。また、弥生時代後期天王山式期と考えられる基本層9層にも水田土壤の可能性が推測される。

8. この他、1層は現代の水田耕作土、2層は近世以降の水田耕作土、12・13層は縄文時代の遺物包含層である。

引用・参考文献（五十音順）

- 青沼一民・長島榮一 1982：『宮城県仙台市鴻ノ堀－発掘調査報告書－』 仙台市文化財調査報告書第44集 仙台市教育委員会
- 赤羽一郎 1984：『常滑焼－中世窯の様相－』 考古学ライブラリー23 ニューサイエンス社
- 太田昭夫 1990：『宮城県における天王山式期の現状と課題』「天王山式窯をめぐって」の検討会 記録集』 弥生時代研究会
- 太田昭大 1991：『宮沢遺跡－第30次調査報告書第1分冊－縄文～近世編』 仙台市文化財調査報告書第149集 仙台市教育委員会
- 小川淳一 1980：『塩沢北遺跡』「東北自動車道遺跡調査報告書III』 宮城県文化財調査報告書第76集 宮城県教育委員会
- 加藤道男・阿部博志 1980：『觀音沢遺跡』「東北新幹線関係遺跡調査報告IV』 宮城県文化財調査報告書第72集 宮城県教育委員会
- 兼田芳宏 1988：『下ノ内浦遺跡』 埼蔵文化財調査研究所報告書第10集 埼蔵文化財調査研究所
- 木村浩二・長島榮一 1984：『宮城県仙台市郡山遺跡IV－昭和58年度発掘調査概報－』 仙台市文化財調査報告書第64集 仙台市教育委員会
- 木村浩二・長島榮一 1985：『宮城県仙台市郡山遺跡V－昭和59年度発掘調査概報－』 仙台市文化財調査報告書第74集 仙台市教育委員会
- 木本元治・大越道正 1989：『善光寺遺跡（第2次）』『国道113号バイパス遺跡調査報告V』 福島県文化財調査報告書第211集 福島県教育委員会（財）福島県文化センター
- 工藤哲司・佐藤隆・柳沢みどり 1983：『下ノ内浦遺跡』 仙台市文化財調査報告書第59集 仙台市教育委員会
- 工藤哲司 1986：『柳生一土地区画整理事業に伴う柳生地区的遺跡分布と、松木遺跡の発掘調査報告書－』 仙台市文化財調査報告書第95集 仙台市柳生土地区画整理組合 仙台市教育委員会
- 工藤哲司 1988：『富沢遺跡－24次調査 富沢中学校地区発掘調査報告書－』 仙台市文化財調査報告書第113集 仙台市教育委員会
- 工藤雅樹 1969：『福島県小倉寺高畠遺跡発掘調査報告書』『福島市の文化財－月崎遺跡・高畠遺跡発掘調査－』 福島市文化財調査報告書第7集 福島市教育委員会
- 経済企画庁 1976：『仙台－地形・表層地質・土壤』『土地分類基本調査』 経済企画庁
- 小山正忠・竹原秀雄 1970：『新版 標準土色帖』 日本色研事業株式会社
- 斎藤裕彦 1987：『富沢・富沢遺跡第15次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 佐藤洋 1983：『今泉城跡－名取川下流域における中世城館跡の調査－』 仙台市文化財調査報告書第58集 仙台市教育委員会

- 佐藤洋 1987：『六反田遺跡Ⅲ－名取川下流域の縄文時代後期・律令時代集落』 仙台市文化財調査報告書第102集 仙台市教育委員会・日本電信電話公社東北總支社
- 志間泰治・小井川和夫・加藤道男 1978：『柳原遺跡』『宮城原文化財発掘調査報告（昭和52年度分）』 宮城県文化財調査報告書第53集 宮城県教育委員会
- 高野芳宏 1985：『多賀城跡第48次調査』『宮城県多賀城調査研究所年報1985』 宮城県多賀城調査研究所
- 田中則和 1981：『六反田遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第34集 仙台市教育委員会
- 田中則和 1984：『六反田遺跡Ⅱ』 仙台市文化財調査報告書第72集 仙台市教育委員会
- 田中則和 1984：『山口遺跡Ⅱ－仙台市体育館建設予定地』 仙台市文化財調査報告書第61集 仙台市教育委員会
- 地質調査所 1986：『仙台地域の地質』『地域地質研究報告』 地質調査所
- 千葉季弥・石川俊英・相沢清利 1990：『新田遺跡－第4・11次調査報告書－』 多賀城市文化財調査報告書第23集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
- 東北学院大学考古学研究部 1975：『鳥居塚跡群三角田南地区発掘調査報告』『混放』第9号 東北学院大学考古学研究部
- 豊島正幸 1987：『富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷』『富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 丹羽茂・小野寺祥一郎・阿部博志 1981：『清水遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』 宮城県文化財調査報告書第77集 宮城県教育委員会
- 平間亮輔 1991：『富沢遺跡第35次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第150集 仙台市教育委員会
- 堀龍博子・中富洋 1985：『特別展 仙台山のくらし海のくらし－坪沼と荒浜－』 仙台市歴史民俗資料館
- 吉岡恭平・成瀬茂 1984：『下ノ内浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III』 仙台市文化財調査報告書第69集 仙台市教育委員会・仙台市交通局
- 渡部紀・小川淳一 1988：『下ノ内浦遺跡－みやぎ生活協同組合店舗建設に伴う発掘調査報告書－』 仙台市文化財調査報告書第115集 仙台市教育委員会
- 渡辺忠彦 1984：『下ノ内浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III－』 仙台市文化財調査報告書第69集 仙台市教育委員会
- 渡部弘美 1987：『元袋III遺跡－奈良・平安時代集落跡調査報告－』 仙台市文化財調査報告書第103集 仙台市教育委員会

第3章 分析・同定

第1節 プラント・オパール分析

古環境研究所

仙台市山口遺跡（第9・10次調査）におけるプラント・オパール分析

1 はじめに

この調査はプラント・オパール分析を用いて、山口遺跡（第9・10次調査）における稻作跡の検証および探査を試みたものである。以下に、プラント・オパール分析調査の結果を報告する。

2 試 料

試料は、遺跡調査の担当者によって容量50cm³の採土管を用いて採取され、当研究所に送られたものである。調査地点は第9次調査で1地点、第10次調査で2地点の計3地点であり、試料数は計20点である。

第9次調査地点では、2～9層について各層ごとに土壤試料が採取された。このうち5層は古墳時代の遺物包含層である。第10次調査では、No.1地点で1～4層の、No.2地点で7～12層の土壤試料が採取された。このうち3a層は平安時代頃の畑耕作土と見られており、8層および10層では弥生時代の水田遺構が検出されていた。

3 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105°C・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスピーツ添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（150W・26KHz・15分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

(7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡で行った。計数は、ガラスピーズ個数が300以上になるまで行った、これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。

換算係数はイネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原、1987）。

4 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1および図1に示す。なお、稻作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ・ヨシ属・タケ亜科・ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）・キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。

5 考 察

(1) 第9次調査

2層から9層まで連続的に分析を行ったが、イネのプラント・オパールはまったく検出されなかった。したがって、これらの層で稻作が行われた可能性は考えにくい。

(2) 第10次調査

a. 水田跡の検証

弥生時代の水田跡が検出された8層では、イネのプラント・オパールが14,500個/gと高い密度で検出され、明瞭なピークが認められた。したがって、同層で稻作が行われていたものと判断される。同じく弥生時代の水田跡が検出された10層では、イネのプラント・オパールは検出されたものの、密度は2,500個/gとやや低い値である。しかし、直上の9層よりは高い値であることから、上層から後代のプラント・オパールが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層で稻作が行われたものと判断される。

以上のように、プラント・オパール分析によって、水田跡が検出された各層で稻作が行われたことが検証された。

b. 水田跡の探査

上記以外でイネのプラント・オパールが検出されたのは、1・3a・3b・7・9層である。こ

のうち、1層（現耕作土）は現在もしくは最近の水田耕作に由来するものと考えられる。その他の層については、密度が800～2,700個/gとやや低い値であり、それぞれ上部に高密度の層があることから、稻作が行われた可能性は考えられるものの、上層などから後代のものが混入した危険性も否定できない。

c. 3a層（畑の耕作土？）について

3a層は、奈良時代～中世の畑の耕作土と見られていた。分析の結果、同層では上記のようにイネのプラント・オパールが検出された。このことから、同層で稻作が行われた可能性も考えられるが、プラント・オパール密度が2,700個/gとやや低いことや、直上に高密度の1層があることから、上層などから後代のものが混入した危険性も否定できない。

プラント・オパール分析で同定されるイネ科栽培植物は、イネ以外にもキビ族（ヒエやアワが含まれる）やジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがあるが、これらの植物に由来するプラント・オパールは検出されなかった。なお、プラント・オパール分析で復原できる植生はイネ科植物に限定されていたため、根菜類などの畑作物は対象外となっていることに留意されたい。

（3）稻穀生産量の推定

弥生時代の水田跡が検出された第10次調査地点の8層および10層について、そこで生産された稻穀の総量を算出した。その結果、8層では面積10aあたり9.2t、10層では1.8tと推定された。当時の稻穀の年間生産量を面積10aあたり100kgとし、稻わらがすべて水田内に還元されたと仮定すると、8層で稻作が営まれた期間は約90年間、10層では約20年間であったものと推定される。

〈参考文献〉

- 杉山真二・藤原宏志。1987。川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析。赤山一古環境編一、川口市遺跡調査会報告、第10集、281-298。
- 藤原宏志。1976。プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学、9：15-29。
- 藤原宏志。1979。プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡、板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ (*O. sativa L.*) 生産総量の推定—。考古学と自然科学、12：29-41。
- 藤原宏志・杉山真二。1984。プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学、17：73-85。

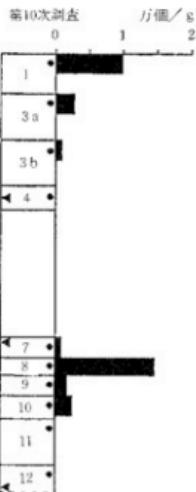
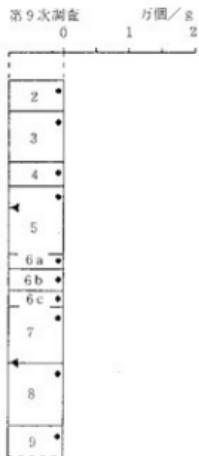
第4表 プラント・オバール分析結果

第9次調査

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(精總量) t / 10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
2	9	10	1.12	0	0.00	0	17,100	0	0
3	19	16	1.06	0	0.00	1,900	22,900	900	0
4	35	8	1.03	0	0.00	0	26,600	900	0
5	43	22	1.00	0	0.00	800	22,300	0	0
6 a	65	5	1.04	0	0.00	900	33,900	0	0
6 b	70	7	1.12	0	0.00	0	18,800	0	0
6 c	77	5	1.12	0	0.00	0	15,800	0	0
7	82	18	1.12	0	0.00	0	18,600	900	0
8	100	20	0.92	0	0.00	3,900	26,700	0	0
9	120	—	1.08	0	—	0	9,000	0	0

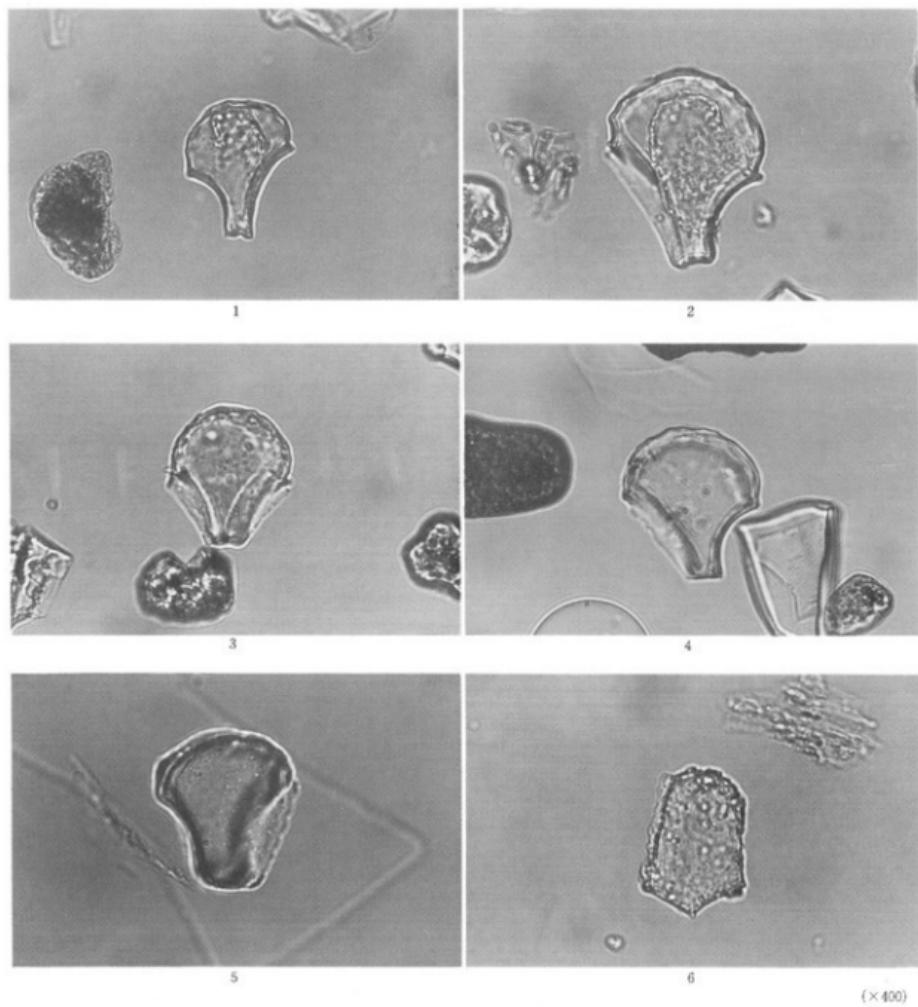
第10次調査

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(精總量) t / 10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1	0	14	0.95	9,700	13.27	900	23,500	900	0
3 a	14	16	1.30	2,700	5.77	0	16,500	600	0
3 b	30	16	1.22	800	1.48	800	15,200	0	0
4	46	8	1.11	0	0.00	700	16,600	0	0
7	98	7	0.99	800	0.50	800	17,700	800	0
8	105	6	1.03	14,500	9.21	800	21,400	0	0
9	111	7	0.96	1,500	1.01	3,100	30,600	700	0
10	118	8	0.92	2,500	1.81	2,500	38,000	0	0
11	126	16	0.96	0	0.00	700	30,800	0	0
12	142	—	1.06	0	—	700	14,800	0	1,500



(注) ◀印は50cmのスケール。●印は分析試料の採取箇所

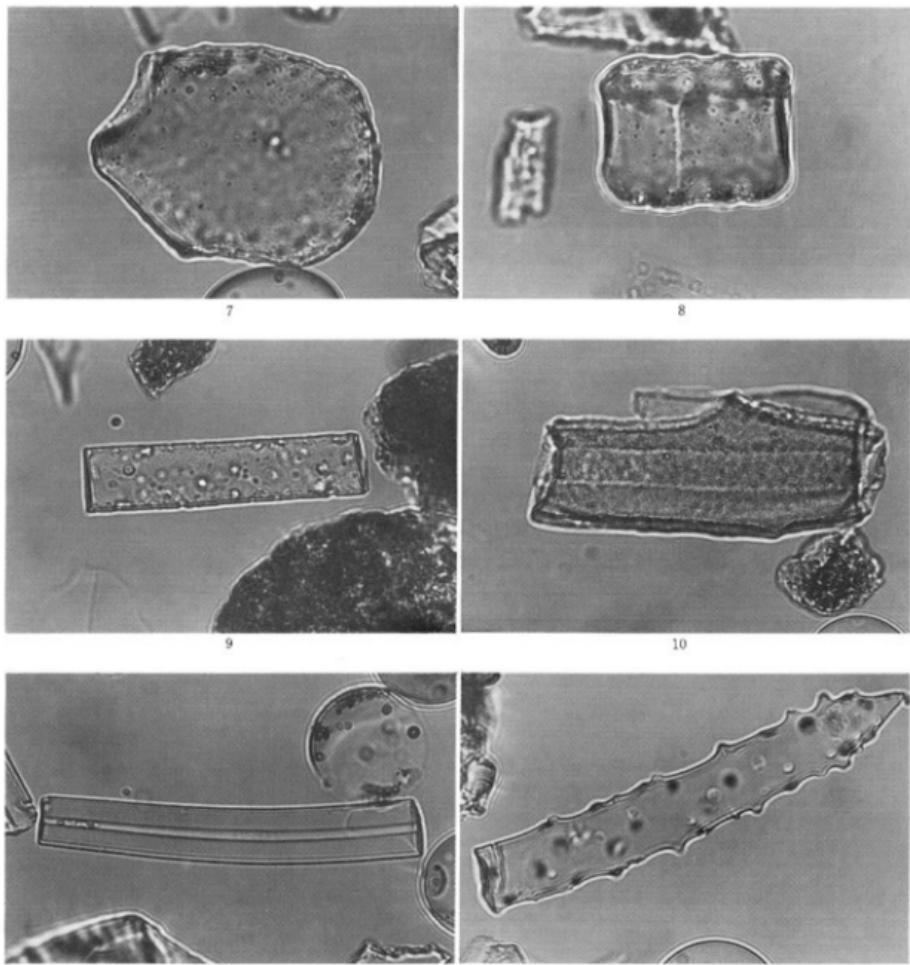
第63図 イネのプラント・オバールの検出状況



($\times 400$)

No.	分類・群	地点	試料名
1	イネ科	No. 1	3 a
2	イネ科	No. 2	8
3	イネ科	No. 3	8
4	イネ科	No. 2	10
5	タケモ科	No. 1	3 a
6	タケモ科	No. 1	3 a

写真1 山口遺跡第10次調査プラント・オパール顕微鏡写真（1）



(×400)

No.	分類・群	地点	試料名
7	ヨシ属	No. 2	10
8	キビ属	No. 2	12
9	棒状珪藻体	No. 1	3 a
10	不明(茎部)	No. 1	3 a
11	海綿骨針	No. 1	3 a
12	海綿骨針	No. 1	3 a

写真2 山口遺跡第10次調査プラント・オパール顕微鏡写真（2）

第2節 灰像分析

東京大学総合研究資料館 松谷 晓子

仙台市山口遺跡第10次調査出土試料の灰像について

1 はじめに

植物分類学でイネ科としてまとめられる植物は、表皮細胞に珪酸を多く蓄積する傾向があるが、稻や麦類等の穀類はこのイネ科に属しており、従ってやはり表皮細胞に珪酸を多く含んでいる。植物体が燃焼や腐植により有機物が消失したあとも、高温や酸に耐性がある珪酸の含まれていた部分は灰として残り、その灰を顕微鏡で観察すると、もとのイネ科植物の表皮細胞の特徴に相当した形態を示すことが知られており、灰像と呼ばれている。

遺跡試料への灰像法の適用は、ルーマニアのネトリツキ氏の報告 (netolitzky 1900) がはじめてとされている。

日本では、渡辺直経氏が弥生時代の愛知県西志賀遺跡の灰にこの方法をはじめて適用し、イネの穀殻と葉の灰像を検出した (Watanabe 1968、渡辺 1980)。その後福岡県立岩遺跡からアワの穎の灰像も検出されている (Watanabe 1970)。筆者も竪穴住居のカマドの跡に残された焼土や灰を顕微鏡で観察してイネの穀殻や葉に類似した灰像を検出した例が若干ある (松谷 1968・1982・1983・1985・1989)。

山口遺跡からは、奈良時代の竪穴住居の窯の堆積土や中世の土坑の跡の堆積土が採取されており、発掘担当者の方からの希望として

- (1) 住居址の燃料として、イネの穀殻や葉が使用されていたかどうか。
- (2) 中世の井戸跡がイネ葉の灰で埋められる例があり、山口遺跡の井戸跡にもイネ葉が使用されているのか、それとも別のものが使用されているのかどうか。
- (3) 土倉跡と推定されている土坑からは、稻穀や瓜類の種子が出土しており、穀類の貯蔵された可能性が考えられるので、その起源を知りたい。

との依頼があり、試料が送付されてきたので灰像の観察を行った。

2 試 料

試料は表1に示すように、奈良時代の竪穴住居カマドの堆積土3点と、土坑の堆積土が7点で土坑性格としては、井戸跡と土倉（竪穴遺構）の二種が推察されていて、井戸跡と考えられる試料が5点で、土倉と推定される試料が2点である。カマド跡の試料は茶褐色であるが、土坑の試料は1点のみ灰色で、他は黒色を呈している。また、井戸跡の試料は水分を含んでいる

が、他の試料は乾燥している。これらの試料はプラスチックの容器(縦11センチ、横7センチ、高さ3センチ)に密封されており、重さは約110グラムから250グラム位であった。

3 方 法

カマド跡の試料は土が多く混在しているので、土と灰を分離する操作が必要である。直径10センチの蒸発皿に試料を入れて水を注ぎ、片手で蒸発皿を回転させると下の方に大きくて重い砂が沈むので、上方の懸濁液を別の蒸発皿にとりわけ、しばらくしてから上澄み液をまた別の蒸発皿にとりわけそれを乾燥させるという簡単な方法を探った。

井戸跡の試料にはほとんど土が混在していないが水分が多いので、アセトンで洗って乾燥させた。土倉跡と推定される試料も水分は少ないが、同様にアセトンで洗って乾燥させた。

以上の試料をスライドグラスに載せ、封入材(オイキットを使用)で封入して光学顕微鏡用のプレパラートを作成し、約100倍で観察と写真撮影を行った。

4 結 果

堅穴住居の竈跡の堆積土3点のいずれからも、稲穂に灰像ならびに稻藁の灰像(註1)に相当すると考えられる灰像が見いだされた。また、堅穴住居3の試料からはイネ以外のイネ科の灰像が観察された。気孔の形態や波状の長細胞や円形の細胞の形は、スキの仲間で湿地に生育するオギの稈に似ているが、ヨシに似た部分もある。

井戸跡と考えられる試料のうち土坑5は、1層の灰も2層の灰もイネ藁は見いだされたもののその量はきわめて少なかった。主体は樹木かと考えるが断定はできない。

土坑7と9からの試料は、イネの稈および藁の灰像が一面に見いだされた。

土倉跡からと推定される試料も、イネの稈と藁の灰像が一面に見いだされた。これらの試料には他の灰像はほとんど混在していない。

註1

イネの穀すなわち外穎と内穎の表皮細胞は、長細胞から構成されているが、その側壁は深く切れ込んで灰像ではジグザク状の輪郭を示すことが多く、また横からみるとくちばし状の乳頭突起が連続している。

イネ藁すなわちイネの葉と茎の表皮細胞には、“蝶が羽をひろげた”(渡辺1981)と表現される、イネの葉に特徴的な細胞、いわゆるイネ細胞が存在する。しかし、このイネ細胞はイネばかりでなくマコモやサヤヌカグサなどにも存在するので、イネ細胞が存在すればイネと即断するわけにはゆかず、気孔や長細胞の形態的特徴などを考慮する必要があるが、山口遺跡のようにイネ稈に相当する灰像と一緒に見いだされる場合のイネ細胞はイネ藁に由来すると判断しても差し支えないであろう。

5 他遺跡との比較

山口遺跡の堅穴住居の電跡からイネ藁とイネ穀殻の灰像が見いだされたが、山口遺跡に近い六反田遺跡（松谷1987）や郡山遺跡（松谷未刊行）の古墳時代の竈の灰からもイネ穀とイネ藁の灰像が検出されている。古墳時代の竈の灰や焼土からイネの灰像を検出した例としては、八王子市中田遺跡（松谷1968）・千葉市上ノ台遺跡（1982）・千葉市小仲台（2）遺跡（松谷1989）等もあるが、これらの遺跡の場合に観察されたイネの灰像は炭に相当するものばかりで、穀の灰像は検出されていない。

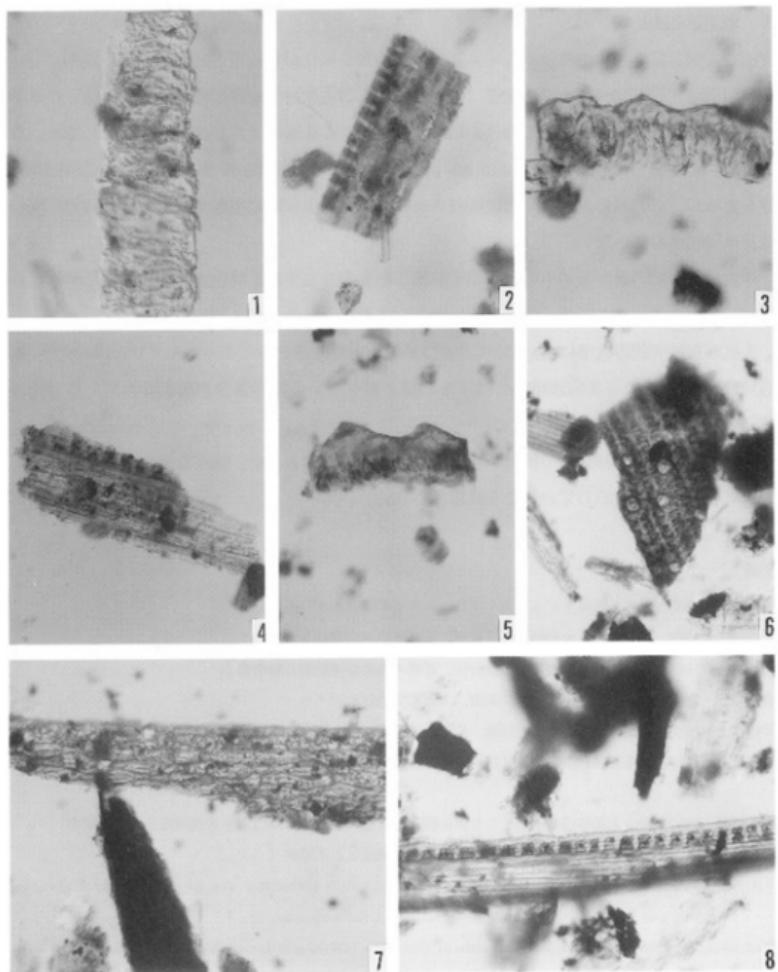
中世の井戸跡の灰からイネ藁の灰像を検出したものとしては、岡山大学構内遺跡の例（松谷1990）があるが、この場合イネは祭祀に関係して利用されたと考えられている。

土坑からの灰像の検出は、弥生時代の山口県綾羅木郷遺跡からイネの穀やアワの穎の灰像（松谷1983）、また大阪府美園遺跡からはイネの穀と藁やヨシの葉の灰像が検出されている（松谷1985）。

イネの灰像が一番特徴的で検出が容易であるのは確かであるが、様々な場合にイネが最もよく利用されたことを示しているように思われる。

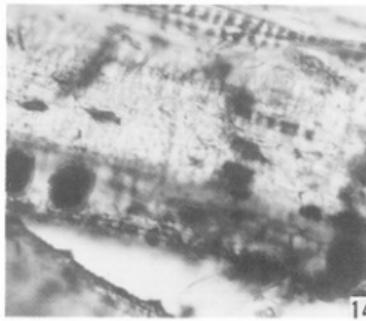
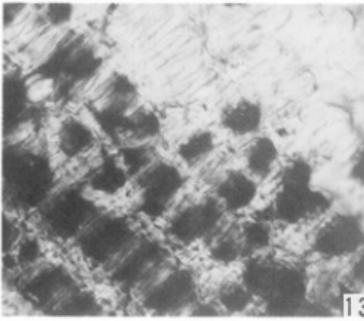
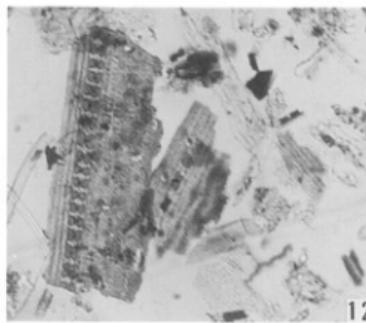
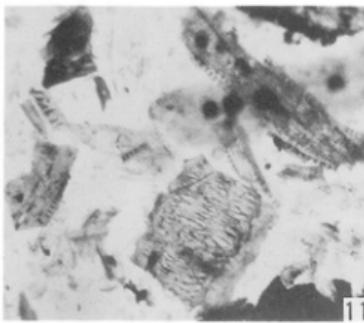
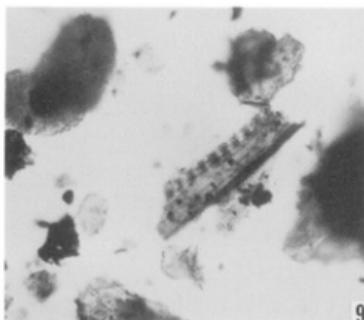
文献

- 松谷曉子 1968 カマド内焼土にみられる灰像。八王子中山遺跡資料編III
松谷曉子 1982 千葉市上ノ台遺跡の灰像分析。千葉市上ノ台遺跡5
松谷曉子 1983 綾羅木郷台地遺跡の灰像分析。綾羅木郷遺跡発掘調査報告書I
松谷曉子 1985 美園遺跡の灰像分析。美園。大阪府文化財センター
松谷曉子 1987 六反田遺跡出土物の灰像。六反田遺跡III。仙台市文化財調査報告書102集、397-399
松谷曉子 1989 馬場遺跡と小仲台（2）遺跡の植物種子・圧痕・灰像について。千葉市文化財センター調査報告159
松谷曉子 1990 岡山大学構内から出土した炭化種子と灰像について。岡山大学南遺跡報告書（印刷中）
松谷曉子 未刊行 郡山遺跡出土灰・炭化物・土壤の顯微鏡による観察
Netolitzky, F. 1900 Microscopische Untersuchung ganzlich verkohlter vor geschichtlicher Nahrungs-mittel aus Tirol. Zeitschr. Unters. Nahrungs u. Genussmittel, 12.
Watanabe, N. 1968 Spodographic evidence of rice from prehistoric Japan. 東京大学理学部紀要5類3巻、217-235.
Watanabe, N. 1970 A spodographic analysis of millet from prehistoric Japan. 東京大学理学部紀要5類3巻、357-379.
渡辺直経 1981 遺跡の灰から穀物をさぐる一次像による鑑別。馬淵・富永編：考古学のための化学10章、東京大学出版会



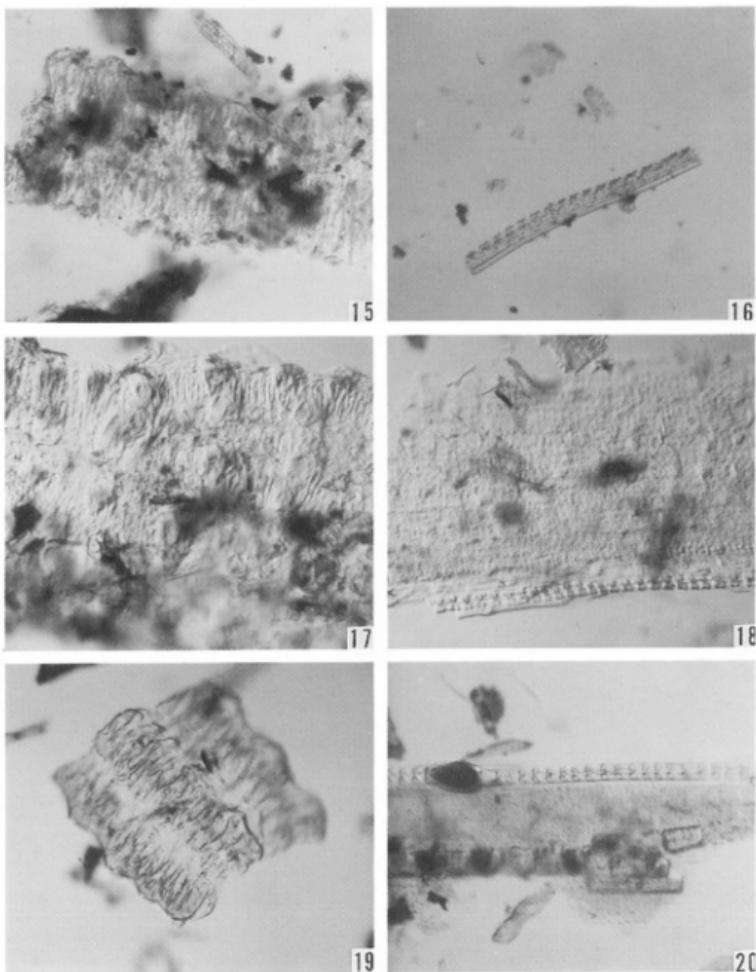
- 1 イネ穂類似灰像 (SI 1 穩穴住居跡)
 2 イネ葉類似灰像 (SI 1 穩穴住居跡)
 3 イネ穂類似灰像 (SI 2 穩穴住居跡)
 4 イネ茎類似灰像 (SI 2 穗穴住居跡)
 5 イネ穂類似灰像 (SI 3 穹穴住居跡)
 6 オギの桿に類似した灰像 (SI 3 穹穴住居跡)
 7 オギまたはヨシの気孔に類似した灰像 (SI 3 穹穴住居跡)
 8 イネ葉類似灰像 (SI 3 穹穴住居跡)

写真3 山口遺跡第10次調査灰像顕微鏡写真 (1)



9 イネ藻類似灰像 (SK1土坑)
10 イネ藻類似灰像 (SK1土坑)
11 イネ藻類似灰像 (SE5井戸跡)
12 イネ藻類似灰像 (SE5井戸跡)
13 イネ藻類似灰像 (SE5井戸跡)
14 イネ藻類似灰像 (SE5井戸跡)

写真4 山口遺跡第10次調査灰像顕微鏡写真(2)



15 イネ穀類似灰像 (S E 6 井戸跡)
 16 イネ茎類似灰像 (S E 6 井戸跡)
 17 イネ穀類似灰像 (S I 5 竪穴遺構)

18 イネ茎類似灰像 (S I 5 竪穴遺構)
 19 イネ穀類似灰像 (S I 6 竪穴遺構)
 20 イネ茎類似灰像 (S I 6 竪穴遺構)

写真5 山口遺跡第10次調査灰像顕微鏡写真 (3)

試料番号	遺構	時代	備考	色調	量
001	SI1 壺穴住居跡	奈良時代	カマド堆積物	茶褐色	170g
003	SI2 壺穴住居跡	奈良時代	カマド堆積物	茶褐色	160g
008	SI3 壺穴住居跡	奈良時代	カマド堆積物	茶褐色	160g
009	SK1 土坑（1層）	近代以降		黒色	250g
010	SK1 土坑（2層）	近代以降		黒色	250g
011	SE5 井戸跡（3層）	中世		黒色	190g
012	SE5 井戸跡（5層）	中世		黒色	180g
013	SE6 井戸跡（3層）	中世		黒色	200g
015	SI5 壺穴遺構	中世	土倉跡？	黒色	110g
019	SI6 壺穴遺構	中世	土倉跡？	灰色	110g

第5表 山口遺跡第10次調査灰像分析試料

(依頼者註)

本分析に係わる依頼は調査期間中の早い段階で行ったため、遺構番号やその性格が本文内容と一致しない部分がある。

当分析報告「4 結果」の項を記載された土坑5はその後の調査で近代以降の遺構であることが判明し、最終的にはSK1土坑として登録している。土坑7・9はそれぞれSE5・6井戸跡に変更した。また土倉跡はSI5・6壺穴遺構を指している。

第3節 出土骨同定

東北大學考古學研究室 富岡 直人

仙台市山口遺跡第10次調査 SI2 穫穴住居跡カマド出土骨片について

本資料は奈良時代の竪穴住居跡のカマドから出土したものである。

全ての骨片の残存状態は不良である。火熱によるダメージ、および地下水による脱灰によりチヨーク化が進み、脆弱化し、細かく砕けている。資料の一部が青色に変化しているのは、地下水により骨中の燐分が溶出し、鉄分と化合して藍鐵鉱（Vivianite, $\text{Fe}_3\text{P}_2\text{O}_8 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ ：松井 1984）が生成されたためであろう。

骨片には、緻密骨、海綿骨が観察された。これらの骨片が同一個体に由来するものかは、判別不可能である。ほとんど全てが哺乳類の骨であると考えられる。5 mm以上の骨片のうち、2点が四肢骨の骨端部であり、そのほか約20点は骨幹部と考えられる。

そのうち一つの骨端部は比較的特徴が残っており、イノシシ (*Sus scrofa*)⁽¹⁾ の右第5中足骨 (right Meta-tarsal V) の遠位端と同定できた。骨幹部との接着が未了であり、未成獣のものであることが推定できる。松井 (1986) が試みているようにブタの化骨化データを参考にすると、2歳3ヶ月以下の若令のイノシシであることが推定される。現生標本との単純な比較から、肩甲高約40～60cm程度の大きさの個体が推測できる。



第64図 イノシシ右第5中足骨遠位端模式図
△：出土部位

その他の骨片にはカット・マークのような加工、調理を示す痕跡は確認できなかった。骨片は白色に変化しているが、これはカマド内で直接火を受けたためであると推定される。骨片が火を受けるプロセスには、純粋な食用または祭祀・儀礼の可能性などが考えられる。ただし、出土地点がカマドであったことから、食用に供された可能性が高いであろう。

以上の観察結果から、イノシシの未成年の中足骨がカマド内で火を受け埋存したことが明確であり、何らかの形で食用に供されたことが推定される。

註(1) 最近、弥生時代の遺跡から家畜化されたブタ (*Sus scrofa domesticus* BRISSON) が確認され問題となっている(西本 1989a, b)。本資料の骨の形質からのみでは、ブタのものか、野生イノシシ(*Sus scrofa leucomystax* LINNAEUS) のものか、判別は不可能であった。本文中ではブタも野生のイノシシも含む意味でのイノシシ (*Sus scrofa*) という用語を用いる。

引用文献

- 西本豊弘 1989a 「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡』: 48-61
西本豊弘 1989b 「弥生時代のブタ」『季刊考古学』28: 91-92
松井 章 1984 「動物遺体」『平城京八条一坊十一坪発掘調査報告』
奈良国立文化財研究所 pp54-56
松井 章 1986 「亀井遺跡（切り広げ部）出土の動物遺存体」『亀井（その2）』
大阪府教育委員会、大阪文化財センター pp423-465

第4節 種子同定

東北大學農學部 星川清親・庄司駒男

サンプル No.	採取遺構 (層序)	発現時期	種	状	写真図版
620	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	モモ		写真6-1
621	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	モモ、ウメ?		-
623	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	ウリ?		写真6-2
624	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	ウリ? (すこし小さい)		-
625	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	エビヅル、その他不明		写真6-3
626	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	ヒョウタン		写真6-4
627	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	エノコログサ、ヒメタイヌビエかヒメイスビエ?		写真7-1
628	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	アカザ		-
629	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	アカザ、イヌタデ、ヒメタイヌビエかヒメイスビエ?		-
630	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	エノコログサ、アカザ、アキメシバ、アキノウナギツカミ、イヌタデ、カラスノゴマ、チカラシバ、ヒメタイヌビエかヒメイスビエ		写真7-2
631	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	シロガ、アカザ、エノコログサ、ヒメタイヌビエかヒメイスビエ?アキノウナギツカミ、イヌタデ、カラスノゴマ		-
632	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	モミガラシイヌタデ、エノコログサ、アカザ、ヒメタイヌビエかヒメイスビエ?ホタルイ、ミヅシバ、ヤノホグサ、ノミノスマ、アキノウナギツカミ、カラスノゴマ		-
633	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	モミガラシ、エノコログサ、ヒメタイヌビエかヒメイスビエ?		写真7-3
635	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	モミガラシ、サヤヌカグサ、エノコログサ、ヒメタイヌビエかヒメイスビエ?昆蟲片、サナエタデ、シロザ、メタモミ		写真7-4
636	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	ヒエ、エノコログサ、シロザ、オトギリソウ、昆蟲片		-
637	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	エノコログサ、ヒメタイヌビエかヒメイスビエ?シロザ、オトギリソウ、昆蟲片		-
638	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	エノコログサ、ヒメタイヌビエかヒメイスビエ?シロザ、ホタルイ、イボクサ、オオイヌタデ		-
639	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	ミヅシバ、モミガラシ、シロザ、昆蟲片、キツネノマゴ、ヒメタイヌビエかヒメイスビエ		写真7-5
640	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	ヒメタイヌビエかヒメイスビエ?シロザ、エノコログサ、昆蟲片、その他不明		-
641	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	黄化イネの米穀、オオムギ(度変)		写真7-6
642	SI 5 壁穴遺構 4層	中世	イネ(稻穀)		写真7-7
656	SI 6 壁穴遺構 2層	中世	モミ、炭化オオムギ、米		写真7-8
657	SI 6 壁穴遺構 2層	中世	モミ		写真8-1
675	SI 6 壁穴遺構 2層	中世	炭化モミ、玄米、玄米(剥け出くれ)、オオムギ、コムギ、ツユクサ、エビヅル、メナモミ?		写真8-2 3+4+5
673	SI 6 壁穴遺構 2層	中世	ホタルイ、シロザ、ヒメジソ、ノミノスマ、ツユクサ、ヒエ、サナエタデ、エノコログサ、その他不明		-
674	SI 6 壁穴遺構 2層	中世	イボクサ、イヌタデ、サナエタデ、その他不明		-
683	小溝5	平安	炭化米、ヒエ?		-
684	小溝8	平安	ヒエ? (新しい)		-
685	小溝9	平安	イネ(稻穀)、ツユクサ		写真8-6

第6表 山口遺跡第10次調査出土種子(1)

サンプル No.	採取地標 (編序)	所属時期	種	名	写真図版
0.8.6	小溝13	平安	炭化米		—
0.8.7	小溝13	平安	ヒエ? (新しい)		—
0.8.8	小溝14	平安	炭化米?		—
0.8.9	小溝17	平安	不明		—
0.9.0	小溝18	平安	セシガク、ヒエ?		—
0.9.1	小溝19	平安	ヒエ?		—
0.9.2	小溝20	平安	炭化米、ヒエ?		—
0.9.4	小溝22	平安	不明		—
0.9.5	小溝25	平安	不明		—
0.9.6	小溝27	平安	不明		—
0.9.7	小溝15	平安	炭化オオムギ、玄米、その他の不明		—

第7表 山口遺跡第10次調査出土種子（2）

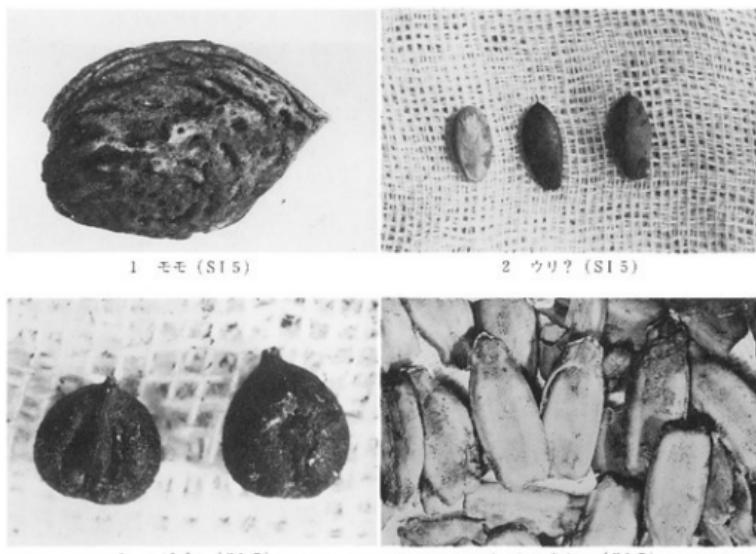


写真6 山口遺跡第10次調査出土種子（1）

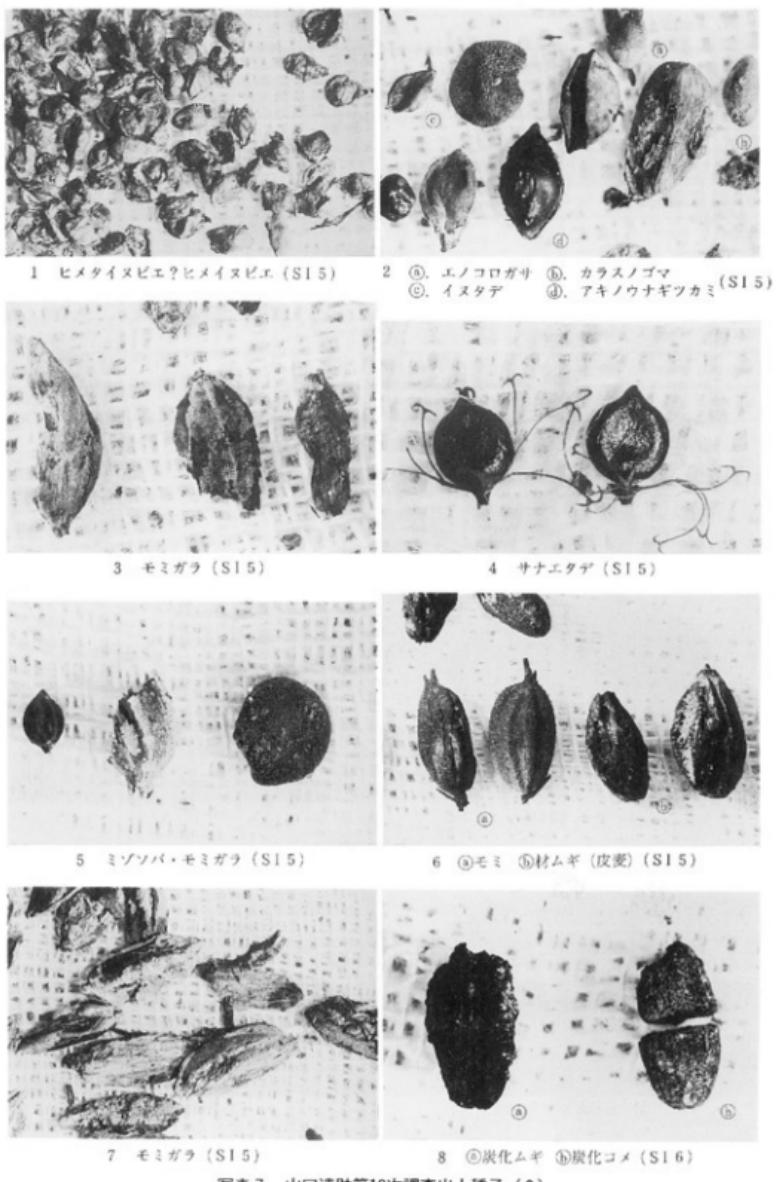


写真7 山口遺跡第10次調査出土種子 (2)



1 モミガラ (S16)



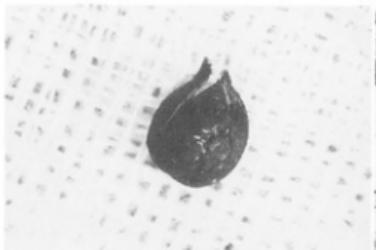
2 ツユクサ (S16)



3 炭化オムギ・コムギ (S16)



4 コメ (炭化玄米) (S16)



5 エビヅル (S16)



6 モミガラ (小溝9)

写真8 山口遺跡第10次調査出土種子 (3)

写 真 図 版



1 SR 1 河川跡完掘状況



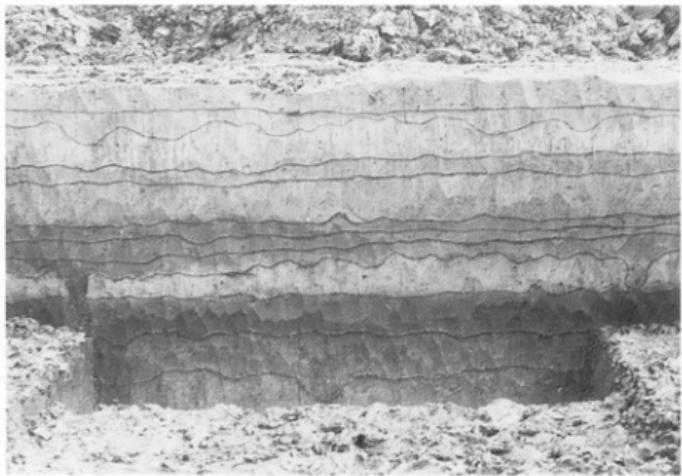
2 SR 2 河川跡検出状況



3 SR 2 河川跡完掘状況

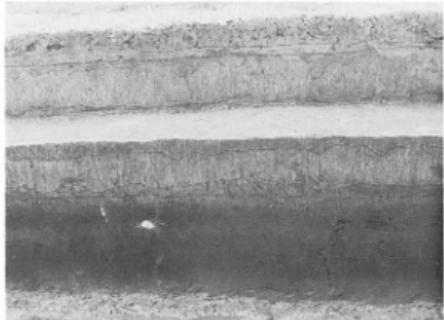


4 SR 2 断面(調査区東壁)

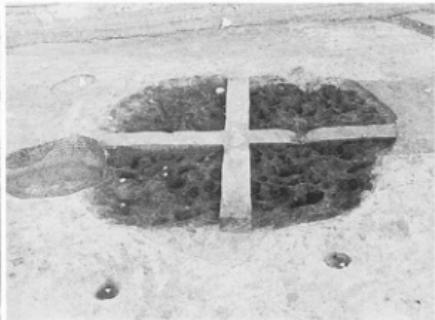


基本層序(調査区南壁)

写真1 山口遺跡第9次調査遺構)



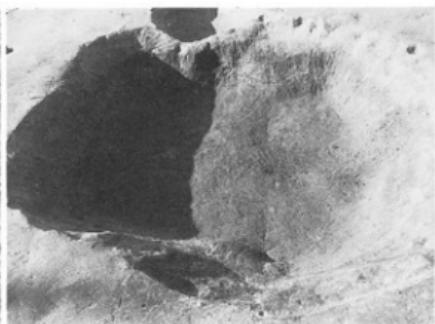
1 基本層序断面(調査区南壁)



2 S15 穴遺構灰層検出状況



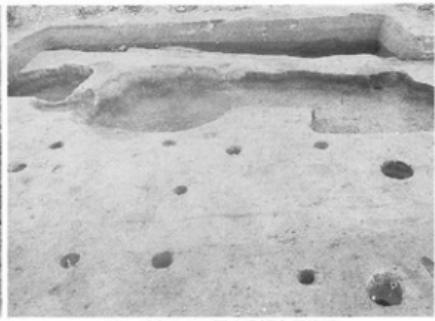
3 S15 穴遺構ウリ種子出土状況



4 S15 穴遺構完掘状況

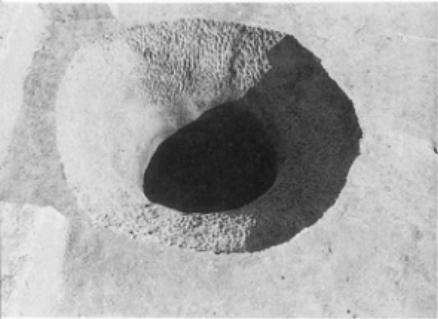


5 S16 穴遺構完掘状況



6 S15・6 穴遺構完掘状況

写真2 山口遺跡第10次調査遺構(1)



1 SE 2 井戸跡



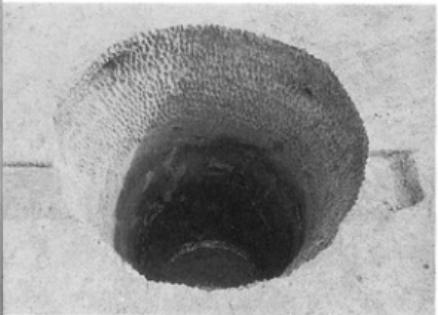
2 SE 4 井戸跡断面



3 SE 1 井戸跡



4 SE 5 井戸跡断面



5 SE 7 井戸跡



6 SK 4 土杭完掘状况 (手前)

写真 3 山口遺跡第10次調査遺構 (2)



1 SD 1溝跡完掘状況



2 小溝遺構群（A群）検出状況



3 小溝遺構群（A群）完掘状況



4 小溝遺構断面

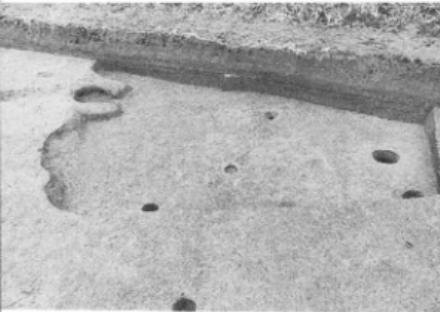


5 S1 1・2竪穴住居跡検出状況



6 S1 2竪穴住居跡完掘状況

写真4 山口遺跡第10次調査遺構（3）



1 SI 1 壁穴住居跡完掘状況



2 SI 4 壁穴住居跡完掘状況



3 SI 4 壁穴住居跡遺物出土状況



4 SD 2溝跡、SR 1河川跡検出状況

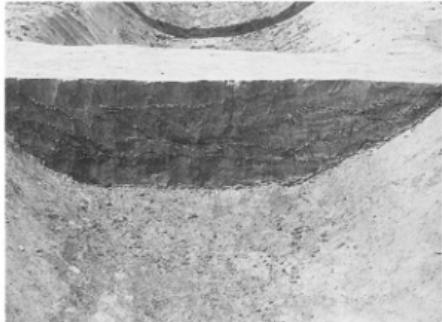


5 SD 2溝跡調査風景



6 SD 2溝跡完掘状況

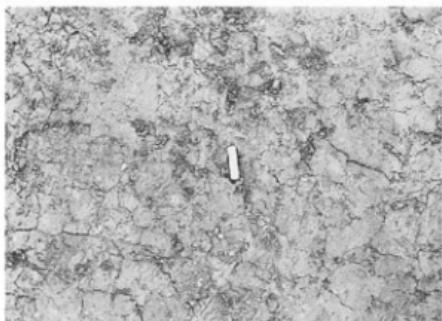
写真5 山口遺跡第10次調査遺構（4）



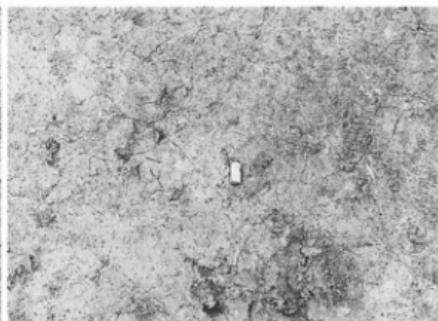
1 SD 2 溝跡断面



2 SR 1 河川跡完掘状況



3 8層中遺物出土状況



4 8層上面遺物出土状況

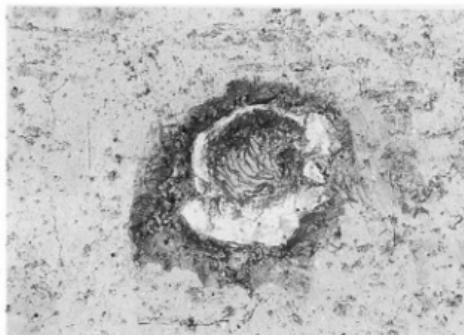


5 8層水田跡全景

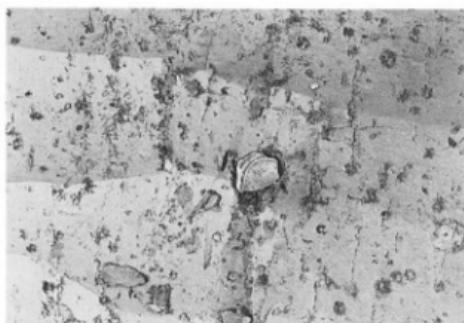


6 10層水田跡全景

写真6 山口遺跡第10次調査遺構（5）



1 9層中遺物出土状況



2 13層中遺物出土状況



3 現地説明会

写真7 山口遺跡第10次調査遺構（6）

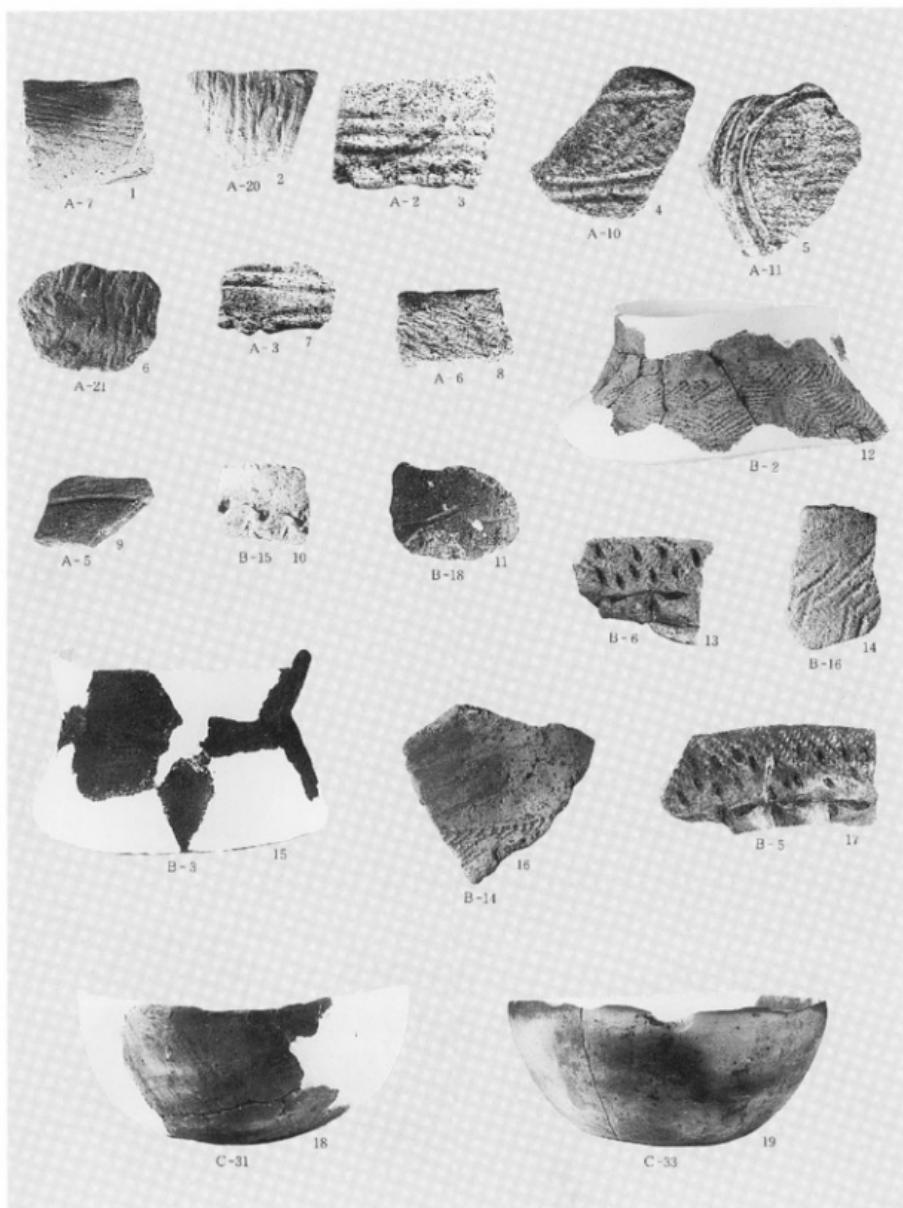


写真8 山口遺跡第10次調査出土遺物（1）

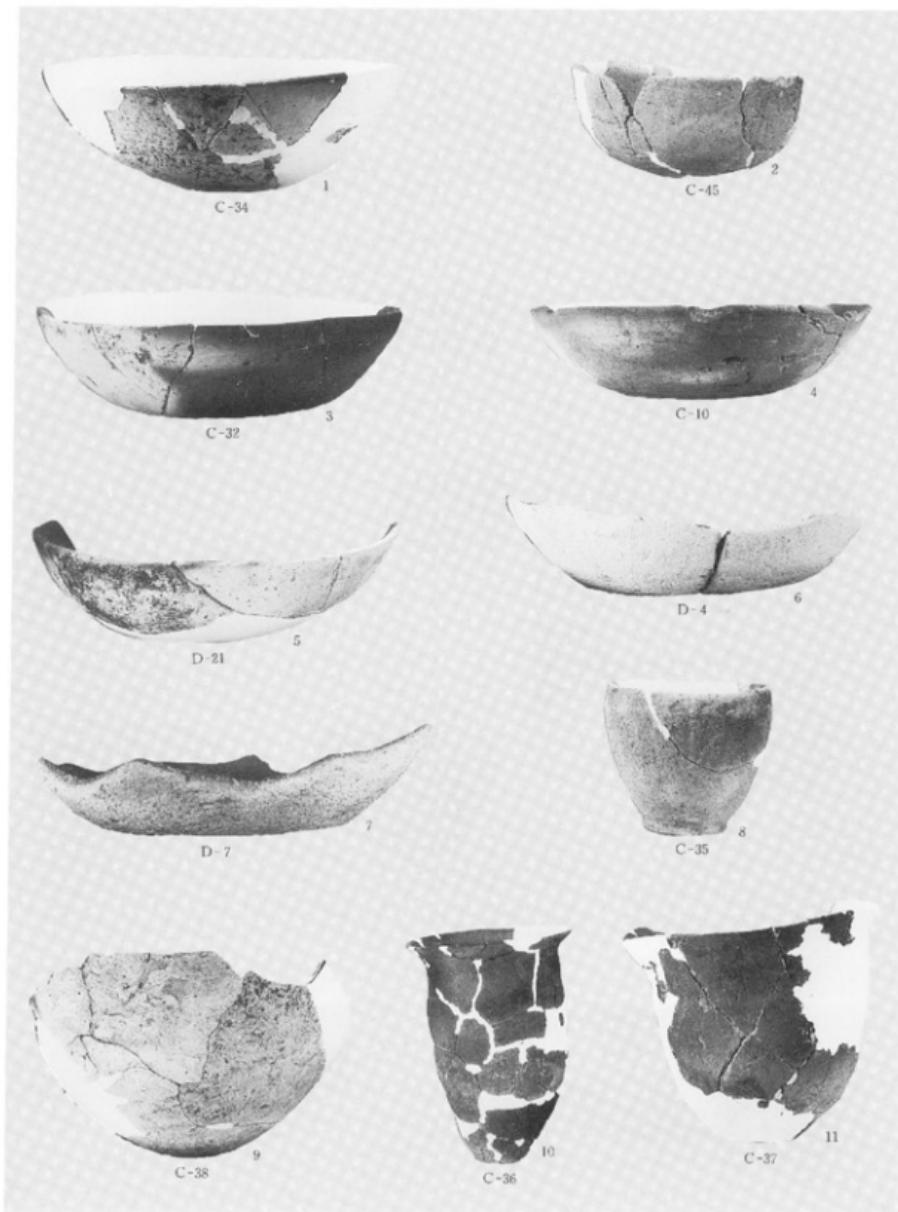


写真9 山口遺跡第10次調査出土遺物（2）

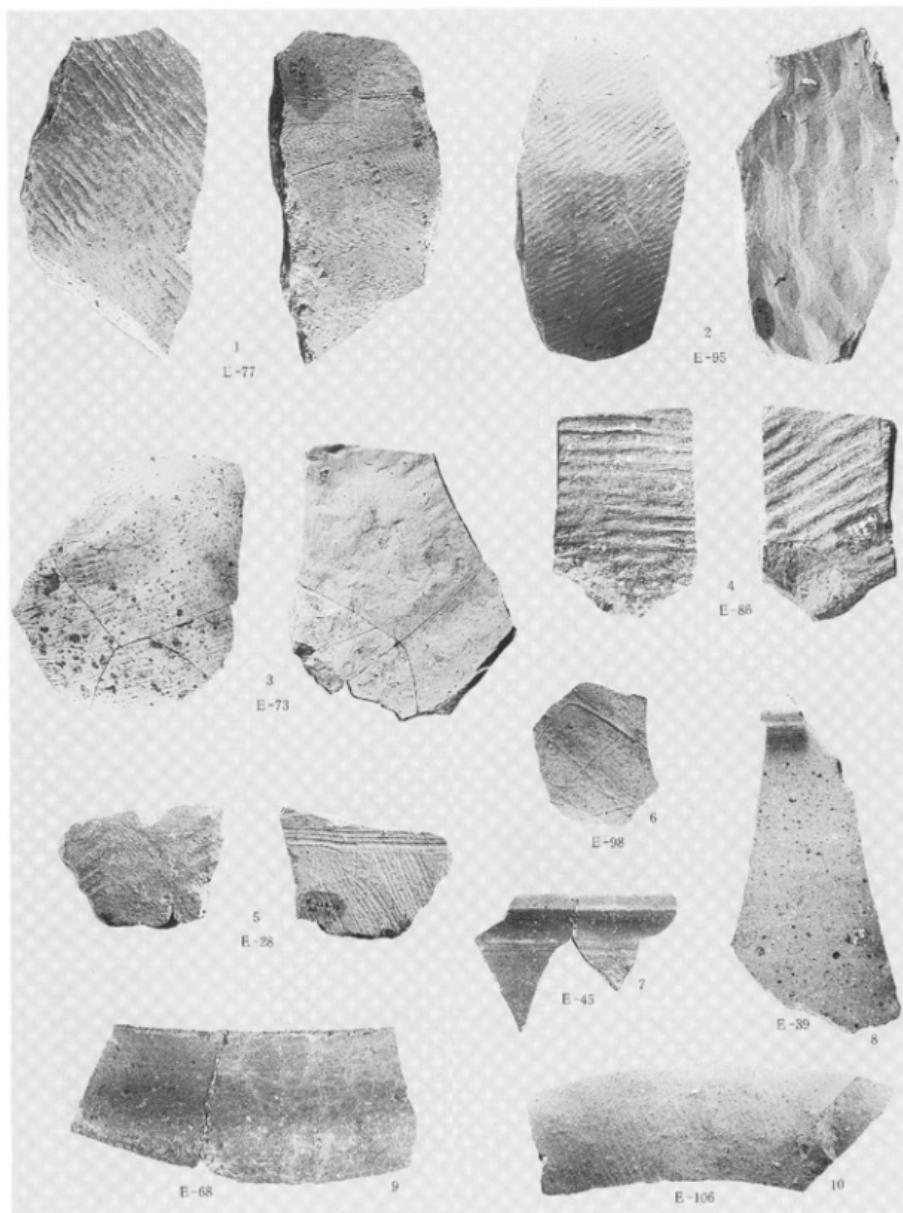


写真10 山口遺跡第10次調査出土遺物（3）

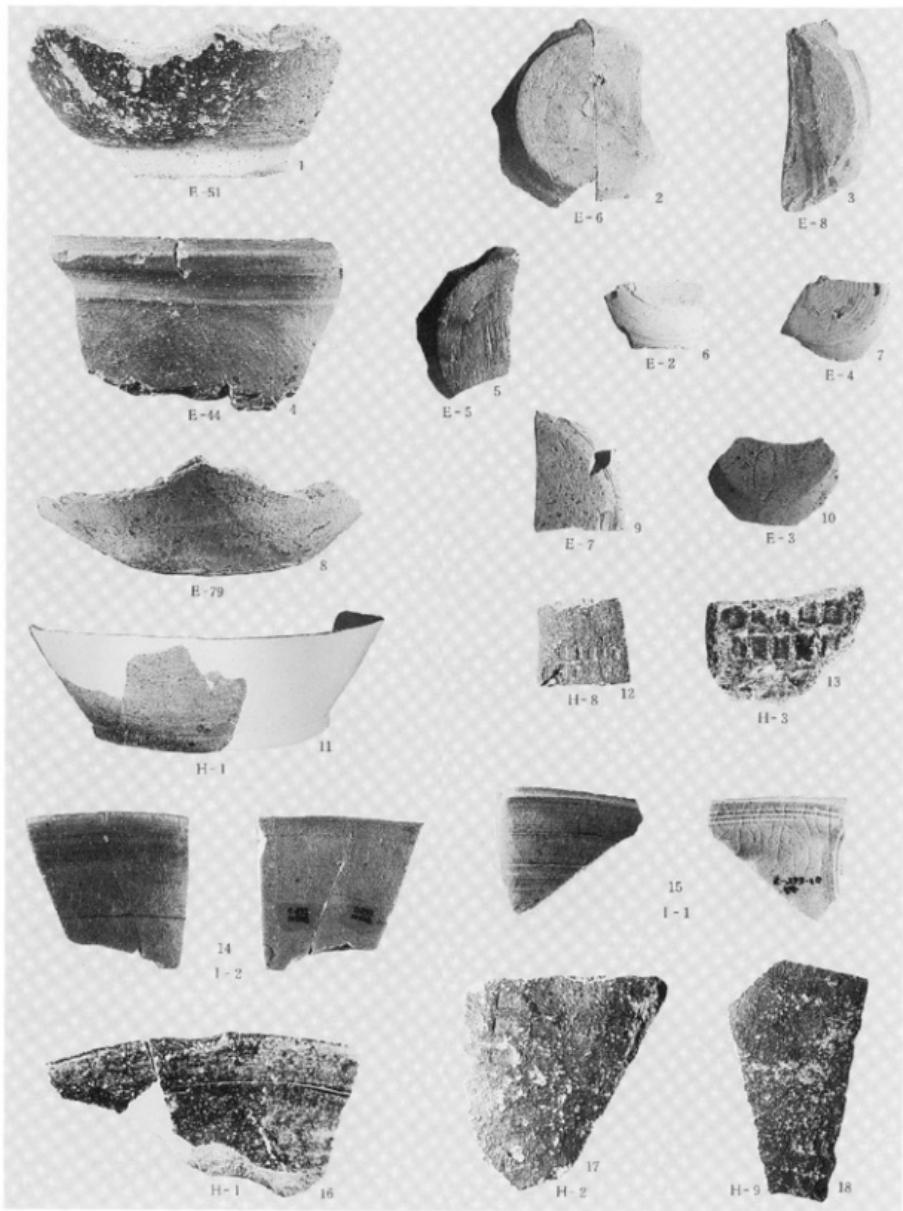


写真11 山口遺跡第10次調査出土遺物（4）

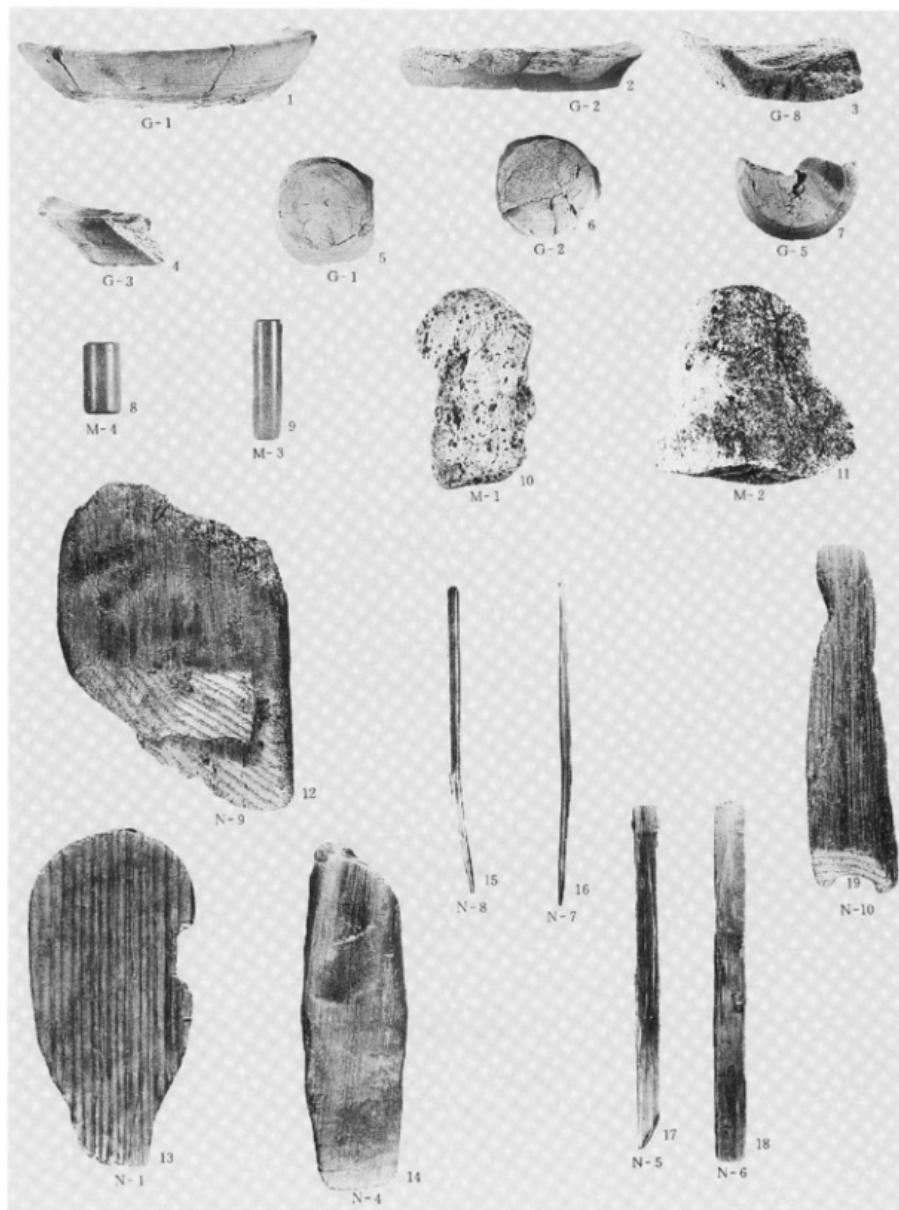


写真12 山口遺跡第10次調査出土遺物（5）

文化財課職員録

課長 早坂春一

管 理 係	調査第一係	調査第二係
係 長 鶴田義幸	係 長 佐藤 隆	係 長 加藤正範
主 事 白幡靖子	主 任 田中則和	主 任 熊谷幹男
〃 佐藤良文	教 諭 佐藤好一	教 諭 太田昭夫
〃 高橋三也	主 任 徳原信彦	主 事 佐藤 洋
〃 庄司 厚	〃 木村浩二	〃 佐藤甲二
	主 事 金森安孝	教 諭 小川淳一
	〃 吉岡恭平	主 事 渡部弘美
	〃 工藤哲司	〃 主浜光朗
	〃 斎野裕彦	〃 中富 洋
	〃 長島榮一	〃 平間亮輔
	〃 工藤信一郎	教 諭 高倉祐一
	〃 荒井 格	主 事 佐藤 淳
教 諭 五十嵐康洋	〃 渡辺雄二	〃 渡部 紀
	主 事 大江美智代	

仙台市文化財調査報告書第151集

山 口 遺 跡

第9次・10次発掘調査報告書

1991年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト

仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166
